

期待される銀行
ご奉仕する

十六銀行

創立 明治10年
本店 岐阜市

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社
名古屋市中種区吹上本町2-20
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393

購読料 1年 500円
郵送の場合 1年 600円
一 部 50円

題字は熱田神宮 穂田官司筆

附 祝 言
主 催 長 月 田 鏡
後 援 中 日 新 聞 会

国家指定 能・狂言の人間国宝出演

定 芸 能 特 別 鑑 賞 会

能・狂言の人間国宝出演

1月31日
2月1日
名古屋・御園座で

文化庁、財団法人演劇研究会主催、朝日新聞社、名古屋放送、御園座後援による「第十回国家指定芸能特別鑑賞会」が新春一月三十一日、二月一日の両日、名古屋・御園座で開催される。

この特別鑑賞会は、日本の伝統芸能の「わざ」を持った人間国宝が一堂にそろう、至芸を披露するもので東海地方では初めての催し、昭和三十三年三月、東京・歌舞伎座で第一回が開かれ、これまで東京で七回、関西で二回催され、今回で十回目である。

芸能は、能、狂言、長唄、舞踊、義太夫節、箏曲、宮内節、京舞で能・狂言関係は次のとおり。(太字は人間国宝の方々)

能楽協会名古屋支部

昭和51年新年謡初式

能楽協会名古屋支部では、新春三日、午前十一時から、熱田神宮能楽殿で新年謡初式を挙行政した。会員一同舞台上で「四海波」を同吟、楽屋にて新年の賀詞を交し、内藤副支部長の司会で藤田支部長から「昨年は協会支部主催により熱田神宮能楽殿二十周年記念能をはじめ、大衆能、義捐能など担当役員、支部員全員のご協力により盛大に催すことができたことをお礼申し上げる。

本年はツツの年で、昇り龍といわれるが、斯道の発展のためいつそうの努力をいたしたい」とあいさつ。

熱田神宮能楽殿運営委員会委員長・熱田神宮権宮司長谷晴男氏は「昨年は能楽殿の運営、催能に関し藤田支部長はじめ会員皆様の一方向ならぬご尽力を頂きましたことを衷心より感謝致します。とくに能楽殿創立二十周年の意義深い年でもあり奉納能、新能、大衆能、義捐能と滞りなく催行され、ご熱意に敬意を表します。

本年も従来にましまして一層のごべんたつを賜りたい。本年は正月三ヶ日とも穏やかな日和で初えびす

をふくめ熱田神宮は二百八十万入場料は一等四千三百円、二等二千五百円、三等千円。

なお、一月三十一日夜の部・舞踊「今様須磨の写絵」には中村歌右衛門、中村治郎、松本幸四郎の顔合わせ、二月一日昼の部の舞踊「時雨西行」は藤間勘十郎、中村歌右衛門、同夜の部の井上八千代の京舞「竹生島」も注目される。

謹賀新年

社団法人 名古屋能楽会
熱田神宮能楽殿

謹賀新年

熱田神宮 宮司 篠田康雄
権宮司 長谷晴男

金剛流能 殺生石高安 渡部晴義 小寺俊三
山本 則直



日奈寺の告別式場に飾られた故
佐藤卯三郎氏の遺影、幽明の界を
異にするとは思えない温顔から
「若いものに負けん、しっかりや
り致します。」
(同人・加野昭二郎記)

観世元正

東京都渋谷区恵比寿南
一-二二-11-14

名古屋観世会

梅若六郎
景英

井上嘉久
京都市北区紫野下鳥田町六

幽謡会
片山博太郎

中日文化センター特別教室

観世元昭
昭門会

鎮仙会

観世鎮之丞
観世寿夫
観世静夫

法人研究会
橘香会

梅若三郎
梅若紀夫
梅若佐晴

鳳鳴会
武田太加志

名古屋市東区葵二丁目一十九
吉田義正方

大槻清韻会

大槻秀夫
大槻文藏

大阪市東区上町二番地

名古屋観世九皇会

観世喜之
観世武雄

増田一雄
塚本秀雄
有賀滋子
長谷川章
加藤保彦
青木武弘
高木美智子
吉田妙

梅猶会
梅若盛義

山本観衛会
山本勝一

幽花会
片山慶次郎

千603
京都市北区山下花ノ木町二
電話 四九二-1530 三番

大江又三郎
京都市東山区本町三番
電話 〇七五(五六)〇六二番

藤井久雄
完楽徳三
治人

神宮市善合区熊内町二-11-10
電話(二二)五一四四番

名古屋橋岡会
名古屋市中区和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

大西信久
大西智久

大阪能楽会館

上田観正会能楽堂
社団法人 観正会
上田 照也

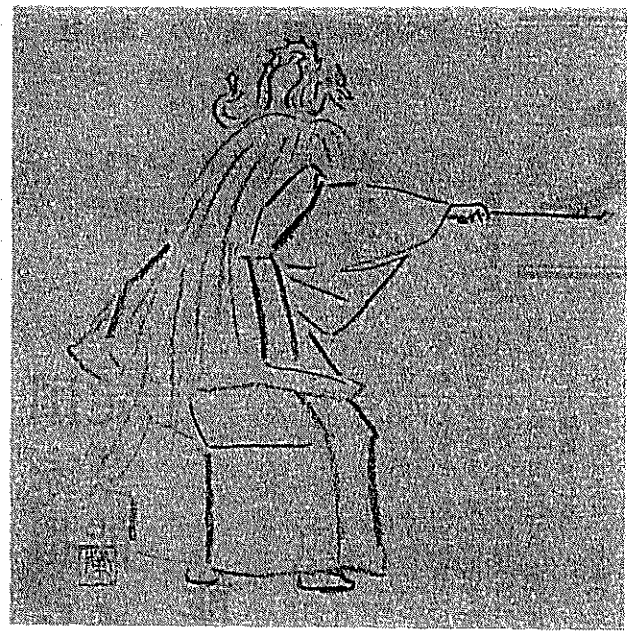
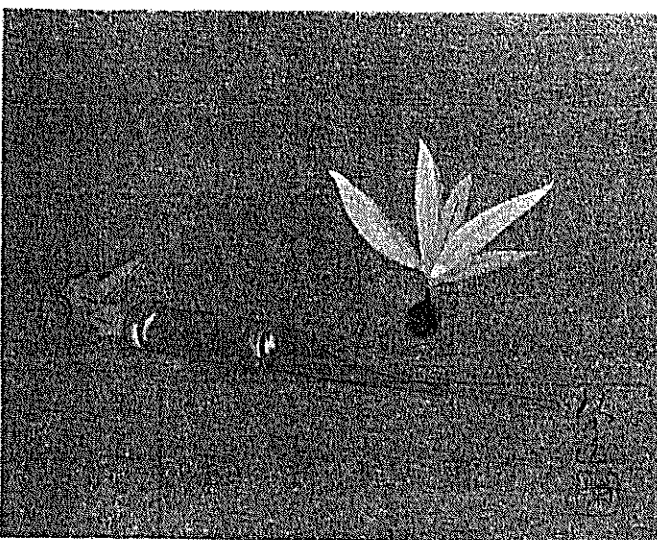
名古屋淡交会

橋岡久共



能 紀 行

龍 逸 榮 井 二 文 と 絵



成年がめぐってきた。龍天に上る、何となく瑞祥に満ちた年のよう...

調の玩具がみつかるものだが、辰にいたっては皆目無い。そこで、昔作ったことのある龍の落し子...

この袋の中に卵を産みつけると雄は、卵が孵化するまで大事に保護するといふ...

さしずめネス湖の怪物ネッシーは龍龍のたぐいというところかも知れない。又、龍は、春分の頃昇天し、秋分の頃天下って水中にひそむとも伝えられているので、神通力もあり、水を思ひ力を持つて...

謹賀新年

熱田神宮能楽殿運営委員会

- 委員長 熱田神宮能楽殿 長谷晴男
委員 熱田神宮 祿宜 岡地幸雄
委員 熱田神宮 祿宜 岡地幸雄
委員 熱田神宮 祿宜 岡地幸雄

演能案内

第廿期・第一回

名古屋宝生会定式能

二月一日(日)午後一時始



Table listing various Noh troupes (e.g., 財団法人 鎌倉能舞台, 中森品三, 武田詠楽会, 梅若修一) and their members, along with contact information and performance details.

Vertical text on the far left side of the page, including names like 今井清隆 and 今井幾三郎.

演能案内

名古屋清韻会大会

昭和五十一年一月十五日(祭日)十時始
熱田神宮能楽殿

神歌 土川 宗勝 千原下郷 綿雄

羽衣 天野登茂子 高安 滋郎 河村総一郎 鬼頭喜太郎
和合之舞 後藤孝一郎 藤田昭彦

狂言 竹生嶋 参 佐藤 秀雄 井上松次郎

猩々 今村 嘉勇 高安 勝久 吉田 定男 助川 寛夫
高安 勝久 福井啓次郎 寛 三男

松謡会春の大会

一月十八日(日)午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡 竹生島 菅瀬 迪子 神原 利男 重松 歌子

屋島 村田とく子 住田 和男 今井 行博
東北 岡部 美子 内藤みち子
師長 加藤 政良 鈴木 守一
玄象 加藤 政良 鈴木 守一

草子洗小町 伊藤萬喜子 森内 昭夫
成経 大須智義夫
康頼 西田 義一

俊寛 水口 森雄 菊川 礼太
半部 永田秀次郎 木村 守正
岩田 信代 岡本 多加 佐藤 太俊

定家 野崎満佐子 川崎 すう
ほか舞囃子、連吟、独吟、仕舞など十五番

御来場歓迎
後援 中日新聞

第廿期・第一回 名古屋宝生会定式能

二月一日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

竹生島

能組 玉井 博祐 立石 澄雄 吉田 定男 鬼頭 好信
衣斐 正宜 飯富 雅介 柳原富司忠 藤田 昭彦
後見 辰巳 孝 北川 道子 足立 澄子
馬場富四夫 地福 小川 壽子 戸内 正枝
竹腰 勝一 須賀 千代子 戸内 正枝

高砂 福川 寿一 鬼頭 喜男
胡蝶 鈴木 義久 鬼頭 喜男
卷 絹 幸子 竹内 澄子 堀江 富夫
雲林 院 幸子 倉本 雅

鉢

木 高安 滋郎 河村総一郎 藤田 六郎兵衛
立石 澄雄 福井啓次郎
間 二階堂 打 井上 礼之助
後見 倉本 博祐 地福 須賀 千代子 鬼頭 喜男
玉井 博祐 高田 真六 鬼頭 喜男
重喜 佐藤 融 井上松次郎

桜

川 辰巳 孝 高安 勝久 寛 三男
飯富 雅介 後藤孝一郎 竹腰 勝一
後見 内藤 義久 地福 須賀 千代子 馬場富四夫
鈴木 義久 小沢 喜一 衣斐 正宜

昭和五十一年度 観世会定式能(初回)

二月八日(日)十二時半始
熱田神宮能楽殿

難波 観世 元昭 寛 敏一 鬼頭 喜太郎
舞囃子 大倉長十郎 藤田 六郎兵衛
後援 中日新聞

明治33年5月金沢市生れ。昭和42年重要無形文化財総合指定保持者。金沢における能楽再興と後継者育成に貢献。能楽協会北陸支部相談役、金沢能楽会常務理事。
かけ、鹿背杖をもって静かに舞を出る。謡も型もまことに底力があり、一種怪異の相をそなえ、あたりに妖雲をまきちらす。
(スケッチは竹生島の後シテ)



名古屋清光会	岡田 光 絃	名古屋千種区希望ヶ丘一―二―四	彌恵会 熊 沢 恵 美 子 名古屋市名東区猪高町猪子石高根 一五―六八日車マンション四〇四	幸詔会 近 藤 幸 江 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三 電話(〇五六四)②二五二九	松和会 中 村 和 男 各務原市那加桜町2―11 電話(〇五八三)②二七九四番	重陽会 菊 池 重 郷 大山市大山宇相生五九一―一六 電話(〇五六八)④四五〇一―番	宝生英雄	近 藤 乾 三 乾 之 助 東京都豊島区巢鴨五―二三―八	野 口 緑 久 東京都港区西麻布四―一八―二八 電話(〇三)四〇九一〇六―一〇番	名古屋巽 会 辰 巳 孝	佐 野 正 治 金沢市東野町四丁目十二―十四
鍵 雲 会	倉 本 雅 神戸市東灘区田中町一―13―26 本山アーバンライフ 四〇一―号	緑 宝 会 名古屋千種区鳴海町池上十六―一― 千 458 加 藤 勝 利 電話(六二二)三四二八番	竹 腰 勝 一	吉 田 俊 彦	金 剛 永 謹	金 剛 巖	中部金剛会	金剛流豊星会	豊嶋弥左衛門 豊嶋三千春 京都市東山区知恩院山内林下町四五五 電話(〇七五)五六一―五四〇八	和谷 亀 二郎	
廣田後援会	今 井 清 隆	廣 田 幸 稔	廣 田 泰 三	廣 田 泰 三	菊扇会(名古屋・京都) 廣 田 泰 三	本 田 光 洋 東京都中野区上高田二ノ二五〇二 電話(三八六)二六四一	林 鉄 郎	中部金春会 名古屋市中区老松町一ノ二八 電話(二四二)三二四一―番	前 田 茂 穂 米 本 平 一	伊勢八声会中 村 富 次 伊勢市富町一―四一―一七 電話(〇五八)②三三三三	伊勢市中島2―26―12

嘉詔会 加 藤 総 兵 衛
名古屋千種区青柳町五ノ一五
電話(七四一) 四六七五番

精古場 大垣市竹島町善念寺
住所 京都市左京区下鴨芝本町五八
浦 田 保 利

雪雪会 後 藤 契 雲
名古屋市中区栄三―三三―一〇

松風について
この後、物著に
なりまして、シテ

謹賀新年
楽 謡 庵 舞 台
名古屋和泉会



前川善雄
京都市右京区御室芝橋町一ノ六

名古屋和泉会

Table listing members of the '邦謡会仕舞百番会' (National Folk Song Association Dance Hundred Roles Association). Columns include names, roles, and affiliations.

Table listing members of the '梅猶会能' (Ume Yū Kai Noh) group. Columns include names, roles, and affiliations.

Advertisement for '賀正' (Happy New Year) featuring '喜多実' (Kimita Jitsue) and '大阪喜多会' (Osaka Kimita Kai).

Table listing various regional associations and their contact information, including '高安流白水会' and '和泉太郎'.

Table listing more regional associations and their contact information, including '幸正影' and '幸圓次郎'.

松風について
この後、物著になりまして、シテも後見も、大変えらいところだ。
長絹をかけるのと同時に前につけている水衣をとってしまします。「前嶋」でも「富士太鼓」でも舞台でこれをやるものは「富士太鼓」などには「富士太鼓」は舞衣(まいぎぬ)です。それから一番つけにくいものです。何しろ座ったままつけますので、その時はそれでよいと思っても、立った時に大変な空

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」より

長絹がやと済めば次は鳥帽子です。これは小さい風折鳥帽子でも、小立鳥帽子でもどちらでもよいのですが、これを「置鳥帽子」と呼んでいます。それは、普通の鳥帽子は紫の紐がついていて、あごで結びますが、これには紐がなく、中からつけた目立たない黒い紐を後へまわしてしめます。つまり、のせかけておくだけですから「置鳥帽子」というわけです。この鳥帽子はかぶり方を注意しないとあとで松の外をくぐったりする時に前へ落ちてしまう心配があり、これも後見の責任の一つであります。

県・市に義捐金贈る

能楽協会名古屋支部

社団法人能楽協会名古屋支部では、旧十二月七日、昭和五十年度の棟尾をかざる支部催能として熱田神宮能楽殿で、恒例の「歳末助け合い義捐金募集能」を開催、各流能楽師の奉仕と同好者の温かい協力と支援で盛会であった。協会名古屋支部では、この収支決算の結果、三十四万四千六百円の

村クセ岩田 龍藏
盛クセ飯尾 勇
若キリ上田 洋子

熊沢恵美子
高安 勝久
飯富 雅介
主催 梅 猫
自由席三、〇〇〇円

物著が済みますと、作物をみて歸り出しますが、途中からシヨツツている手をおろして、狂乱の心となって「あらうれしや〜いであらう」と立ちます時、ツレが心でくれないと困ります。「今から止めに行くぞ」と腰をうかしていたのでは、見ておられる人の気持もそこないです。正しくは、「あらうれしや〜」でシテの方に向いて「松風と召され」でシテが立つ時一緋に立てばよいのです。

「執心の罪にも沈み給へ」からシテが後へさがりはじめますから、ツレもシテから離れて隅の方へよめます。ここでツレが、「あれは松にてこそ候へ」と認めて正面を見廻して「行平は御入りも候はぬものを」という型もありますが、多くはツレが偉い時にやる型であります。

「松風」にはいろいろの小書がありまして、「戯ノ舞」では、最初から松に短冊をつけておいて、中ノ舞の三段目を破ノ舞にくっつけ、松の向うをくぐって通り、廻って短冊を持ち「立ち別れ」をもう一度謡います。これは文字通り戯れ心(狂い戯れの意味)が多く出ています。

謹賀新年
楽 謡 庵 舞 台
名古屋市中区栄五丁目一四一
電話(二六二)一八三番

また「見留」(みとめ)は破ノ舞で橋がかりに出ぬけて、一の松で扇をかざして見る所が止めになるのでこの名があります。最後は「いとま申して」からはノリをはずし、地謡は自然にすすります。橋がかりのシテは「吹くや後の山嵐」で舞台をみかえり、一息入れます。この一息入れるというのは、息をぬくのではなく、お腹に力を入れること、芝居で言えば見得のようなものです。舞台をみかえる時、単に目で見ないで「お腹を見よ」といわれている大切な所なのです。

こうしてシテが大切な型をしている間、ツレはどうするかといえますと、シテが型をしているのに立って歩くのはシテに失礼ですから、ツレはその間に程よくシテとの間隔をとって、シテの型が終ればすぐ立って、都合よく後に従えるよう準備をしておきます。「戯ノ舞」と「見留」の小書の折は、二人が幕に入ってしまったって、ワキが見送り松を見て止める、所謂ワキ止メの型になります。このワキの型も松を見るだけの型、袖をかき合わせる型等、いろいろあるようです。

各地だより

能「竹生島」女体

大阪能楽観賞会一月公演
大阪能楽観賞会では、きたる一月二十八日午後六時から大阪能楽会館で一月公演を開催する。番組は講談「竹生島女体と童神説話」(沼津雨氏) 仕舞「巻袖」(種田道雄) 「田村」(豊嶋三千春) 「羽衣」(広田泰三) 「邯鄲」(今井幾三郎) 「船弁慶」(広田隆一)

長田 正 宜
森田 光 春

小の会
幸 宣 佳

櫻月会
大倉 長十郎
源 正之助
幸 英

住駒陽介
明 弘

福井 良久
柳原 富司 忠

谷口 喜代三
正 喜

亀井 俊一
保 忠 雄

桂 会
岐阜市松屋町 後藤方

前川 善 雄

長生会
鬼頭 喜太郎
好 喜太郎

山本 敬一郎
山本 孝

寛 鉦 一
吉田 定 男

三宅 藤九郎

大蔵 狂言会
大蔵 彌太郎
基 基義

茂山 千五郎
茂山 千作

名古屋和泉会
狂言共同社

野村 万 藏

助川 竜 夫
山口 義 郎
山 口 亮

狂言やるまい会
野村 又三郎

善 竹 忠 一郎
茂山 忠 三郎

朝日文化センター
雛子 教室
笛 算 三男
小鼓 後藤孝一郎

ウシマド写真工房
熱田神宮能楽殿
仙田 美 千子

電話(六七)二九一二番

演能カレンダー (熱田神宮 能楽殿)

- (51年1月) 15日(祭)名古屋清浄会大会 (米場歓迎) (番組③面)
18日(日)松謡会春の大会 (米場歓迎) (番組③面)
(2月) 1日(日)宝生会定式能 (有料) (番組③面)
8日(日)観世会定式能 (有料) (番組③面)
11日(祝)邦謡会春の会 (米場歓迎) (番組③面)
12日(木)西陵高校生鑑賞能 (高校生のみ)
15日(日)梅若会能 (有料) (番組③面)
22日(日)青陽会定期能 (有料)
29日(日)梅若会 (米場歓迎)
(3月) 7日(日)九草会春の大会 (米場歓迎)
14日(日)観世会春の大会 (米場歓迎)
20日(祭)邦謡会春の大会 (米場歓迎)
21日(日)武田謡楽会春の大会 (米場歓迎)
28日(日)大蔵狂言会 (米場歓迎)
(4月) 4日(日)藤田流追善能 (有料)
11日(日)観世会定式能 (有料)
18日(日)中部金剛会定式能 (有料)
25日(日)久田観正会春の大会 (米場歓迎)
29日(祝)幸友会春の会 (米場歓迎)

名古屋宝生会 51年度定式能

名古屋宝生会主催、昭和五十一年度(第二十期)定式能は、二月一日を初回として次の予定で開催される。

なお六月二十日(日)には、別会として「前宗家宝生九郎師追善能」が催される。

定式能日程

- 第一回 二月一日(日) 番組⑤面掲載
第二回 九月二十三日(祭) 内藤泰二
素小 鍛冶 鬼頭 嘉男 竹原 勝一

大阪文化祭賞

茂山千作師に金賞 大槻文蔵師に奨励賞

五十年大阪文化祭は、十月、十一月にわたって大阪で公演されたもの百四十二件の中、十九件に賞が贈られたが、能・狂言関係では、三越劇場での朝日狂言会における「無布施経」で茂山千作氏が金賞を受賞、また大槻能楽堂での第八回能の会における「遠城」の演能で大槻文蔵師は奨励賞を受賞した。

観世九草会 昭和51年度定式能

初回 五月十五日(土)

第三回十一月二十八日(日)

- 千手 本間 英孝 倉本 雅
綾鼓 大坪十喜雄 衣斐 正宣
素雲雀山 稲川寿一 衣斐正宣 鈴木義久
弱法師 野口 緑久 鬼頭嘉男
殺生石 宝生 英雄

定式能年費六、〇〇〇円 (例金三分、別金は含まず)
◎別会 六月二十日(日) 前宗家宝生九郎師追善能

- 安宅 辰巳 孝
仕天 鼓 倉本 雅
唯俊成忠度 宝生英照
仕小 歌 馬標富四夫 本間 英孝
半 蒨 宝生英雄 立花
唯砧 野口緑久
海 人 前大坪十喜雄 後野村 蘭作

玉石会10周年記念会

玉石会(津田合会長)は、結成十周年を迎え、さる十一月三十日、栄能楽ビル舞台で、記念式典ならびに狂言、素謡、仕舞など発表会を開催した。

当日、会場には、玉石芸能百選会として会員の墨彩画展、俳句、

- 正面自由席(三分分節一名) 九千円
臨正自由席(右) 同) 六千円
通小町 長谷川 章
菊慈童 吉田 妙

花月

舞雁子 龍虎 ツレ佐々木勝輝 シテ観世 喜之

花月 高木美智子
終回番組 九月十八日(土)
通小町 長谷川 章
菊慈童 吉田 妙

榮能楽堂

- 1月29日(木) 毎日婦人文化センター 謡初会
3月14日(日) 喜多流・長袖会大会
3月21日(日) 下田 雄 風 会
3月27日(土) 青 翠 会 大 会

1月・2月放送予定

- (1月) 17日(土) 観世流「梅」山階信弘ほか
24日(土) 観世流「海士」藤井久雄ほか
31日(土) 宝生流「簾」渡辺三郎ほか
(2月) 7日(土) 観世流「大江山」藤波重和ほか
14日(土) 宝生流「殺生石」野村蘭作ほか
21日(土) 金春流「山姥」桜間道雄ほか
28日(土) 金剛流「鞍馬天狗」「一角仙人」豊島弥左衛門ほか

NHK・FM 毎週日曜日 (午前7時15分)

- (1月) 梅にちなむ山
18日(日) 喜多流「弱法師」栗谷菊生ほか
25日(日) 観世流「東北」井上嘉久ほか
(2月) 母ものシリーズ
1日(日) 下郷宝生流「百萬」宝生弥一ほか
8日(日) 観世流「隅田川」梅若六郎ほか
15日(日) 宝生流「三井寺」松本恵雄ほか
22日(日) 観世流「海士」藤井久雄ほか
29日(日) 独吟集 梅若万三郎、松本謙三ほか

熱田紳士能「新春能」

熱田紳士能主催の新春能は一月十一日熱田神宮能楽殿で「橋弁慶」「遠城」「弱法師」「望月」狂言「昆布売」ほか素謡、舞雁子仕舞など三十数番で開催。

Table with 2 columns: 幸友会 (福井 啓次郎), 金春欣三 (東京都杉並区成田東 4-35-20), 年中につき (喪中につき) 年賀欠礼いたします

料理 あつた 蓬菜軒
本 店 熱田区神戸町三四 電話(67)868618
神宮東門店 熱田区新宮坂町一 電話(682)5598(代表)

富士道の婚礼道具
家具の富士道
本社 名古屋市中区栄3丁目35番18号
TEL 代表 (262) 5547
工場 愛知県西加茂郡三好町 TEL (05613) 2-1178

檜書店
〒101 東京都千代田区神田小川町2-1 電話(291)2488-9
振替東京 3-3 552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入 電話(231)1990
振替京都 113

季節料理 あお木
盛味月(もりみづき)御懐石料理
あお木
名古屋市中区栄4-12-6 電話 251-2897

発行能樂の友社

名古屋市中千種区吹上本町2-20
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 500円
郵送の場合 1年 600円
一部 50円

造るべきものという油断のあつた
ことは否定できない。
一方、各流各派がそれぞれの舞
台を持っているのに、なにも国が
造りたくてという誤った観念が

能樂の友

楽しいお買い物はマツザカヤ



演能カレンダー
(熱田神宮 能樂殿)

- (2月) 15日(日) 梅猶会能 (有料)
22日(日) 青陽会定期能 (有料)
29日(日) 名古屋橋会二十周年記念大会
(3月) 7日(日) 九草会春の大会 (来場歓迎)
14日(日) 観照会春の大会 (来場歓迎)
20日(祭) 邦國会春の大会 (来場歓迎)
21日(日) 武田謡楽会春の大会 (来場歓迎)
(4月) 4日(日) 藤田流追善能 (有料)
11日(日) 観世会定式能 (有料)
18日(日) 中部金剛会定式能 (有料)
24日(土) 大蔵狂言会 (来場歓迎)
25日(日) 久田観正会春の大会 (来場歓迎)
29日(祝) 幸友会春の会 (来場歓迎)

2月22日サンケイ観世能
3月28日中日五流能

劇場能として伝統をもつ第二十
三回「サンケイ観世能」は、二月
二十二日(日)大阪・サンケイホ
ール、第二十一回「中日五流能」
は三月二十八日、名古屋・中日劇
場で、それぞれ催される。

◎サンケイ観世能

東西を通じて、一年に一度の名
匠競演の「サンケイ観世能」は、
「能の顔見世」として親しまれ、
シテ方はもちろん、ワキ方、囃子
方、狂言方、地謡に最高の陣をし
いて、二十三年の伝統の真髄が高
く評価されている。

回を重ねる劇場能

「夜宵自叙」(観世静夫、観世武
雄) 狂言「伊文字」(茂山千作は
か) 舞臺子「卒都婆小町」(観世喜
之)で、観世家元はじめ、芸術院
会員梅若六郎、人間国宝松本謙三、
安福春雄、藤田大五郎、幸直佳の
諸師が出演する。

柴田初太郎師米寿祝賀
観世流流友会大会

5月3日熱田神宮能樂殿

名古屋観世会の各師社中による
観世流流友会大会は、名古屋観世

(演能変更の節はご了承下さい)

「明治のころの名古屋の謡は、
ほとんど京都式の謡であった。名
古屋観世流の古老松浦羽州師のキ
モいりて、宗家より武田宗治師師
が名古屋へ正式に派遣せられたの
が大正二年、名古屋では京都式謡
と東京式謡とが統一できるまでに
三年以上かかった」と(柴田初太郎
氏談)という。

◎中日五流能

中日五流能は、第二十一回を迎
え、こども小書能時代の代表的
五流能として充実した内容で、全
国より一流の演者を迎え異色の演
目をそろえているのが特色で期待
されている。

能組は、第一部(午前十時開演)
喜多流能「白田村」(喜多長世)
観世流能「花筐」小書能之伝・太
返(観世元正)金春流能「海人」
小書・懐中之舞(金春信高)
第二部(午後四時開演)
宝生流能「通小町」小書杖之型
(宝生英雄) 観世流能「住吉詣」
小書・悦之舞(片山博太郎、観世
元昭) 金剛流能「殺生石」小書・
玉澤前(金剛殿)など(番組③面
掲載)

各一部料金・特別席四、五〇〇
円、A席三、八〇〇円、B席三、
三〇〇円、C席一、五〇〇円(全
部指定席)
中日新聞本社事業部、各支局、
出演能樂師宅で前売り券取扱。

演能案内

梅猶会定期能樂会

二月十五日(日)午前十一時始
熱田神宮能樂殿

菊慈童 菊池重郷 河村総一郎
舞能子 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎
能粗 森田晃一 山並良彦
舞能子 岡田晃一 井戸和男

弱法師

梅若盛義 高安滋郎 後藤孝一郎
梅若盛義 佐藤秀雄 藤田六郎兵衛
梅若修一 後藤孝一郎

二人静

梅若善高 西村欽也 河村総一郎
梅若修一 後藤孝一郎 藤田昭彦
梅若善高 井上生香 池内幸三郎
梅若修一 大嶽賢次郎 山田文三郎

海士

梅若盛弘 高安勝久 寛助川三男
梅若盛弘 坂常雅介 福井啓次郎
梅若盛弘 大野弘之 池内幸三郎

附祝言

主催 名古屋梅猶会
後援 中日新聞
特別席(指定席)三、〇〇〇円 自由席二、〇〇〇円

第十九期 第三回 青陽会

二月二十二日(日)午前十一時始
熱田神宮能樂殿

能組 青木武弘 長谷川保彦
能吟 加藤保彦
能案 鬼頭英二 福井啓次郎

高砂 加賀敏彦 高橋一
田林 高橋一 服部紗枝
雲鼓院 服部紗枝 地謡
天鼓院 生駒美代子 地謡
鞍馬天狗 近藤幸江 地謡

巻

東北 河村征二 地謡
善知鳥 柴田初太郎 地謡
須部南子 高安勝久 後藤孝一郎

熊坂

後見 生駒美代子 地謡
近藤幸江 地謡
玉之段 久田秀雄 地謡
笹之段 佐藤太俊 地謡

附祝言

主催 青陽会
後援 中日新聞
特別席(指定席)三、〇〇〇円 自由席二、〇〇〇円

次回予告

昭和五十一年六月六日
第二十二期第一回
(名古屋市中千種区新宮坂町一)
熱田神宮能樂殿

本店 熱田区神戸町三四 電話(7)8686、8
神宮東門店 熱田区新宮坂町一 電話(682)5598(代表)

元蔵

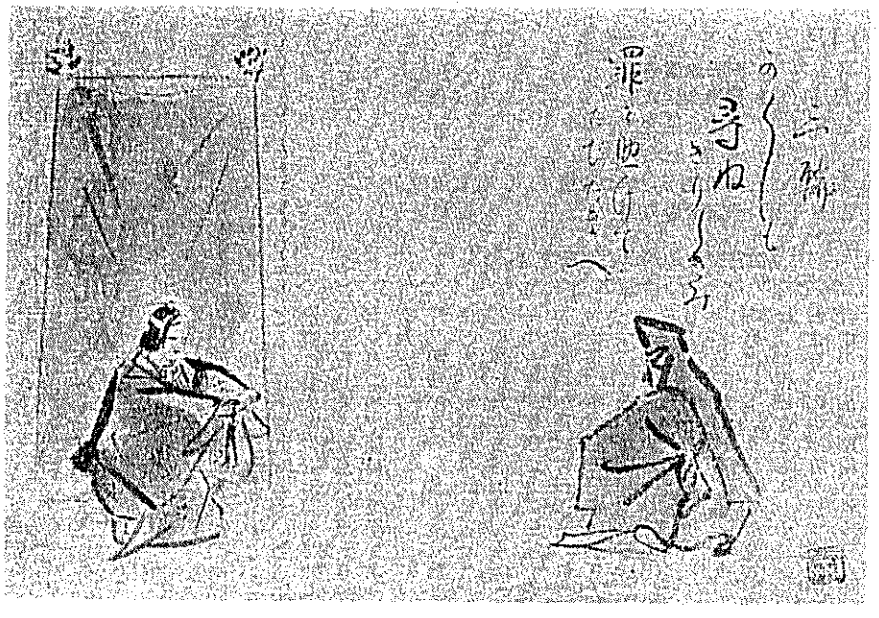
能紀行

杉の花

絵と文 二井栄逸

杉の葉の
葉のうれに
つばみつく
春まじきむみ
雪の散りくもー長塚節ー
ひっそりとしたためたない杉の
つばみが雪花のなかでゆれている
早春の情景を詠んだ歌であるが、
いかにも春寒い山家の風景が目
に浮かんでくるようである。杉の雄花
のつばみは、黄土に茶色の粉をふ
りかけたような可愛らしい実のよう
なもので、幼い頃、よく細い竹に
つめて紙鉄砲のように打合いをし
て遊んだことがある。

杉は日本特産の木だけに本州、
四国、九州の至るところに自生す
る。直々と天を摩す大杉は、山の
針面にあってもスラリと垂直に立
つて己が姿勢をくすくすとしない
その不動の姿勢は何となく能のシ
テに通ずるような気がする。
神話から取付された三輪の舞台
になる三輪山にも杉が多く、山そ



杉と書えはこんなことあった。
一昨年であったと思うが中日五流
能に長世師の海人が出た時である。
能の前夜、おそくに長世師から電
話があり、みるめにする杉が無い
ので杉を持参するようにとの事だ
であった。もう東京には杉が無い
ですよとの事。ところが我が家に
も杉が無く近所に杉畑でもないか

2月・3月放送予定

● NHKラジオ第一放送 (毎週土曜日午後6時5分)

(2月)
21日(土) 金 春 流「山 姥」松間道雄ほか
28日(土) 金 春 流「鞍馬天狗」「一角仙人」
豊嶋弥左衛門ほか

(3月)
6日(土) 観 世 流「隅田川」梅若六郎ほか
13日(土) 下 懸 宝 流「百 萬」宝生弥一ほか
20日(土) 喜 多 流「安 宅」喜多長生ほか
27日(土) 宝 生 流「三井寺」松本忠雄ほか

● NHK・FM 毎週日曜日 (午前7時15分)

(2月)
15日(日) 母ものシリーズ
22日(日) 宝 生 流「三井寺」松本忠雄ほか
29日(日) 観 世 流「海 士」藤次郎ほか
29日(日) 独 吟 集 梅若万三郎、松本謙三ほか

(3月)
7日(日) 観 世 流「大江山」藤波重和ほか
14日(日) 金 春 流「山 姥」松間道雄ほか
21日(日) 宝 生 流「殺生石」野村蘭作ほか
28日(日) 金 春 流「鞍馬天狗」「一角仙人」
豊嶋弥左衛門ほか

● NHK教育テレビ

2月22日(日) 午後9時~10時30分
宝生流能「弱法師」高橋進ほか
狂言「因幡堂」山本東次郎ほか
仕舞(宝生流)「清経」宝生英雄

・番組変更の際はご了解下さい。

求塚の復興

左近さんが在世
中
「求塚」

喜之が下拵えしていたのや、他の御流儀
の読み合わせをみて、やっとなり合わせ
たのですが、それでもまだ十三・四枚にな
りませんでした。せめて十一・二枚ですむように
しました。

来ておいて「空しくなれば」としてもら
うつもりでしたが、たった一つのハメ
テなのに川崎九洲さんは「サア」と言っ
て返事を下さりなかつたので心配してい
ました。

名古屋橋会 二十周年記念大会

二月二十九日(日) 午前十時始
熱田神宮能楽殿

翁	橋井慶	法皇 宮沢 寿夫 内侍 齋藤 光治	田中 武
披	大原御幸	子方 山崎 正道 ツレ 西村 泰男	伊東 誠
披	安	ツレ 山崎 正道 ツレ 西村 泰男	山崎英太郎
披	花	川 請井 和子 月 田中 定子	藤田六郎兵衛 三男
披	胡	蝶 武山八詠子 素 福井啓次郎	鬼頭 喜太郎 三男
披	鶯	鶯 小町 渡部知江子	山本 勝一
柏	磯	磯 前 村田 薬子	河村総一郎 三男
羽	因幡堂	豊田 寿子 和合之舞 番外 仕	井上松次郎 佐藤 友彦
熊	坂	後藤 新蔵 勳 進 極 吉田 市郎	鬼頭 英二 助川 竜夫 鬼頭 季信

先代亡喜之師三十七回忌追善 観世九臯会春季大会

三月七日(日) 九時三十分開曲
熱田神宮能楽殿

翁	千才	観世 喜之 小鼓 幸 藤次郎 シテ 伊藤次郎左エ門 後藤孝一郎	笛 寛 三男
難	波	山村 昌子	河村総一郎 助川 竜夫
忠	度	水野あや子	鬼頭 季信
草紙洗小町	奏 倉 早苗	鬼頭 英二	寛 三男
阿	漕	橋本 とも	河村総一郎 鬼頭 季信
雲林院	立廻り	田中美津子	鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦
頼	政	浅井 銚二 伊藤 睦子	地謡 坂 小五郎 五木田 武三郎 真次郎
放	下	鈴木 胡蝶	吉田 定男 寛 三男
二人	静	佐藤千代子	河村総一郎 藤田 昭彦
三井寺	道行	後藤 鈴子	福井啓次郎 鬼頭 季信
道成寺	水野 喬樹	五木田武計 地謡	小島 木勝輝 小島 武三郎 永島 忠修 観世 喜之 三男 佐々木 勝輝
野道	慶子	高安 澄郎	河村総一郎 藤田 昭彦
巴	間	後見 弘田 裕一 五木田武計	小林 喜久 小島 武三郎 坂 小五郎 真次郎
弱	法師	芝村 栄枝	吉田 定男 藤田 昭彦
花	笛	天笠 桂ともえ	寛 三男
遊行	伊藤 睦子	幸 義太郎	河村総一郎 鬼頭 八郎

Table with NHKラジオ and NHK・FM schedules. Includes dates and program names like 'NHKラジオ (2月) 21日(土) 28日(土)'.

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」より

左近さんが在世中に「求塚」はよい能だから、復興したいがチャンスがなくて困る。と申されながら...

これからは、大阪・神戸・京都と舞って職分、師範の人をはじめ皆さんにも観ていただき...

なつたあと、その熱心に乙女が苦しめられるというもので、昔は流儀にあったのだらう...

各地だより

上田同門会土曜会

本年度前期番組 上田同門会による昭和五十一年度土曜会...

大阪

山本定期能楽会

山本定期能楽会は、三月六日(土)、山本定期能楽会...

名古屋

名古屋観世九奉会

名古屋観世九奉会(二井栄)は、一月三十一日...

岐阜

岐阜定期能楽会

岐阜定期能楽会(梅田邦久)は、一月二十五日...

読次之伝、村雨留、墨次之伝、藤行留、シテ竹下稻子さん、素謡「神歌」...

准師範披露能楽会 三月二十日(祝)十時半始 熱田神宮能楽殿

宝生流全曲旅の友 宝生流謡曲180番を五十音順に、翁、蘭曲を合せ収めてあります。 わんや書店

長袖会春の会

三月十四日(第二日曜日)午前九時半始
名古屋市中区栄・栄能楽堂

舞囃子 高	舞囃子 羽	舞囃子 飛	舞囃子 雲	舞囃子 林	舞囃子 政	舞囃子 衣	舞囃子 小	舞囃子 定	舞囃子 六	舞囃子 楊	舞囃子 貴	舞囃子 追	舞囃子 島	舞囃子 盛	舞囃子 松	舞囃子 班	附祝言
独調 鞍馬天狗	独調 三	独調 放	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三
藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝

重要無形文化財 中日五流能

三月二十八日(日)
名古屋・栄・中日劇場

舞囃子 高	舞囃子 羽	舞囃子 飛	舞囃子 雲	舞囃子 林	舞囃子 政	舞囃子 衣	舞囃子 小	舞囃子 定	舞囃子 六	舞囃子 楊	舞囃子 貴	舞囃子 追	舞囃子 島	舞囃子 盛	舞囃子 松	舞囃子 班	附祝言
独調 鞍馬天狗	独調 三	独調 放	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三	独調 三
藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝	藤田直輝

友社
長町2-20
4)
984
36393
500円
600円
50円

定国家能指 特別鑑賞会

賀新年

法人研能会
梅若万三郎
山本親衛会
山本勝
西宮市南郷町五十二

郵送御購読の皆様へ

郵便料金引上げでお願い
皆様ご高承のように一月二十五日から郵便料金が大幅に引上げられ、このため当「能楽の友」紙第三種郵便の送料は一部二十五円(従来十二円)になりました。

狂言和泉流 佐藤卯三郎師逝去



狂言和泉流職分、佐藤卯三郎師(本名与市)は、一月十九日午後零時二十五分、脳内出血にて国立名古屋病院で逝去された。享年八十四歳。

故佐藤卯三郎師は、五歳で初舞台をふみ、狂言共同社のメンバーとして名古屋を中心に活躍、後進の指導につくした。昨五十年、重要無形文化財総合指定、日本能楽協会員に認定。最後の舞台は、旧ろう二十一日、熱田神宮能楽殿で行なわれた「青少年のための芸術劇場」での「佐渡狐」、同日C B Cクラブ芸能祭で「蝸牛」。また玉石会では、十一月三十日、同会十周年記念で「鈍太郎」。

欧風料理 とんかつ **食亭**
名古屋市中区千種区大久手町4-11 TEL 731-3680

割烹・小料理 **城**
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路(中区栄3-10) 電話 241-0248
●喫茶・グリル(愛労研地下ビル) 電話 731-1128

目撃した設備を誇る日進堂
メガネ調整設備は、正しいメガネ・快適なメガネづくりの根本です。日進堂は視力測定・メガネ調整用の諸設備はもちろんのこと、必要ときには数分でビックアップできる...お客様一人一人の視力記録システムなどを常に最新の充実を心がけています。

目撃した日進堂のアフターサービス
メガネをいつも正しく、最良の状態でご使用いただけるよう努めることもメガネ店のつとめです。日進堂は可能な限りの修理サービス、レンズ・フレームの清掃サービスを無料でやっております。いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。

正しいメガネでしあわせを...
目撃した日進堂
◎駐車場完備 名古屋市西区上島町57(円頓寺本町) 451 TEL (571) 6181-3

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場

名古屋 若宮八幡社

各種会合や宴会にも御利用下さい

(駐車場完備)

名古屋市中区栄3丁目35-30 電話(241)0810

能 楽 の 友

題字は熱田神宮 篠田宮司筆

発行 能 楽 の 友 社

名古屋千種区吹上本町2-20

(郵便番号 464)

電話 (731) 7 9 8 4

振替口座 名古屋 36393

購読料 1年 500円

郵送の場合 1年 600円

一 部 50円

頼 政 武田 孝子
天 鼓 後藤孝一郎 藤田 昭彦
舟 井 寛 敏一 藤田 昭彦
慶 福井啓次郎 藤田 昭彦
山 萩 河村総一郎 鬼頭喜太郎
幸 男 後藤孝一郎 寛 三男

多彩な春の催能

記念能・観世・金剛定式能

4月4日 方藤田流追善能

熱田神宮能楽殿の春の催能は、三月七日、名古屋観世九草会が先代観世喜之三十七回忌追善の春季大会を盛大に開催したのにつづき十四日(日)名古屋観世会春の大会、二十日(祭)邦謡会春の大会、二十一日(日)観世会春季大会が催される。

名古屋観世会大会は観世元昭師来名十年を記念し、能「弱法師」(シテ森幸子さん)「熊野」(シテ竹下福子さん)の二番はじめ、素謡「道成寺」「空都婆小町」「安宅」「求塚」など重曲をそろえ、舞囃子、一調、仕舞、独吟など二十数番の記念能大会。

春分の日邦謡会は、今沢美和清沢一政、須部甫の三氏(片山博太郎師取立)の準師範披露能で、能「巴」(シテ今沢美和)能「蟬丸」(サカ須部甫、セミ清沢一政)さらには梅田邦久師の能「天鼓」の三番能、初番に片山博太郎師の舞囃子「高砂」

二十一日(日)は、武田小兵衛師の名古屋・四日市観世会春季大会、素謡「藤戸」「花筐」「井筒」はじめ八番、舞囃子、仕舞二十数番の出演。

三月十四日曜日の二十八日は、中日五流能が名古屋・栄・中日劇場で各流とも小書能で春の演能を飾る。

また栄能楽堂では、三月十四日喜多流・長袖会(長田驥師)二十一日・下田雄誠会(下田雄三師)さらに二十七日(土)吉翠会大会(吉田妙師)は素謡、舞囃子、仕舞など二十数番。

四月は四日(第一日曜日)笛方藤田流宗家主催による藤田流流祖清兵衛重政、先代清兵衛重孝追善能の披露。

十一日の観世会定式能は能「蟬丸」(サカ大槻秀夫、セミ山本勝一師)「雲林院」(梅若万三郎師)素謡「忠度」(シテ塚本秀雄師)十八日(日)中部金剛会定期能能「三輪」(シテ鈴木タミ)「俊寛」(シテ豊嶋三千巻)「鞍馬天狗」(前シテ日比野圭昭後シテ東田康文)の能三番、中部金剛会はじめ豊嶋弥左衛門、広田泰三の諸師が京都から来演する。狂言「歌争」(井上礼之助、佐藤友彦)ほか仕舞、独吟。

一、やるまい会の公演を二回催します。
一、会員の方へは公演毎に御案内(切符をお送りします)申し上げます。
一、年二回公演 三、〇〇〇円

演能カレンダー (熱田神宮 能楽殿)

[3月]

- 14日(日) 観世会春の大会 (来場歓迎) (番組①面)
- 20日(祭) 邦謡会能楽会 (来場歓迎) (番組①面)
- 21日(日) 武田謡楽会春の大会 (来場歓迎) (番組①面)

[4月]

- 4日(日) 笛方藤田流追善能 (有料) (番組②面)
- 11日(日) 観世会定式能 (有料) (番組②面)
- 18日(日) 中部金剛会定式能 (有料) (番組②面)
- 24日(土) 大蔵狂言会 (来場歓迎)
- 25日(日) 久田観正会春の大会 (来場歓迎)
- 29日(祝) 幸友会春の会 (来場歓迎)

[5月]

- 2日(日) 淡交会春の会 (来場歓迎)
- 3日(祝) 観世流・流友大会 (来場歓迎)
- 5日(祝) 興 会 (来場歓迎)
- 9日(日) 龍 吟 会 (来場歓迎)
- 15日(土) 観世九草会定期能 (有料)
- 16日(日) 鳳鳴会大会 (来場歓迎)
- 22日(土) 猶原会大会 (来場歓迎)
- 23日(日) 観舞会大会 (来場歓迎)
- 29日(土) 一福会・叶石会大会 (来場歓迎)
- 30日(日) やるまい会 (来場歓迎)

(演能変更の際はご了承下さい)

各社中の申込み受付

5月3日 観世流流友大会

観世流・流友大会は、既報のように五月三日(祝)熱田神宮能楽殿で第四回の大会を開催する。今回はとくに、流儀の長老、柴田初太郎氏米寿祝賀大会として企画され流友多数の参加が期待されている。

なお観世流・流友大会事務局は番組編成のため出演曲名など三月二十五日まで申し込みを依頼するとともに素謡、独吟、仕舞、連吟などバラエティある出演をのぞんでいる。

NHK教育テレビ3月20日 NHK教育テレビでは、三月二十日春分の日の午前九時から「能楽思い出の名人集」として、先代梅若万三郎「松風」野口兼賢「羽衣」桜間弓川、宝生新「葵上」喜多六平太「頼政」の諸師の舞姿を放送する。解説増田正造氏、ゲストに人間国宝野村万蔵師が予定されている。

演能案内

今沢美和 清沢一政 須部甫 準師範披露能楽会

三月二十日(祝) 十時半始 熱田神宮能楽殿

能 組 熱田神宮能楽殿

巴 今沢 美和 西村 欽也 鬼頭 英二 後藤 孝一郎 寛 三男

間 河村 鉦二 井上 礼之助

後見 松野 良輝 地謡 中村 和男 久田 徹二 高橋 敏彦 梅田 邦久 義邦 久

丸 高安 勝久 山 口 敏一 鬼頭 季信 坂富 雅介 井上 松次郎 今村 嘉武 佐藤 雅太 加藤 中 武保 弘 矢代 本 壽 紀 弥 夫

後見 梅田 邦久 地謡 青木 藤 武 弘 矢代 本 壽 紀 弥 夫

梅田 邦久 高安 勝久 福吉 定男 藤助 川 昭彦 弄鼓之舞 野村 又三郎 福井 啓次郎 藤田 昭彦

後見 今沢 美和 地謡 中村 和男 久田 徹二 関 美和 紀 地謡 青木 藤 武 弘 矢代 本 壽 紀 弥 夫

天

梅田 邦久 高安 勝久 福吉 定男 藤助 川 昭彦

弄鼓之舞 野村 又三郎 福井 啓次郎 藤田 昭彦

後見 今沢 美和 地謡 中村 和男 久田 徹二 関 美和 紀 地謡 青木 藤 武 弘 矢代 本 壽 紀 弥 夫

蟬

高安 勝久 山 口 敏一 鬼頭 季信 坂富 雅介 井上 松次郎 今村 嘉武 佐藤 雅太 加藤 中 武保 弘 矢代 本 壽 紀 弥 夫

後見 梅田 邦久 地謡 青木 藤 武 弘 矢代 本 壽 紀 弥 夫

巴

今沢 美和 西村 欽也 鬼頭 英二 後藤 孝一郎 寛 三男

間 河村 鉦二 井上 礼之助

後見 松野 良輝 地謡 中村 和男 久田 徹二 高橋 敏彦 梅田 邦久 義邦 久

附祝言

主催 梅田邦久・邦 謡 会
補佐 片山博太郎・後援 中日 新聞 会

招待券は熱田神宮能楽殿にお申出されば差上げます。

名古屋 四日市 謡楽会春季大会

三月二十一日(日) 午前九時半始 熱田神宮能楽殿

観 宗 千 101 千 604

お 一 品

神 歌 吉井 順一 武田 邦弘

竹 生 島 小牧 大助 原 敬

殺 生 石 相馬 純二 大塚 幸二

老 生 林 留三 井川 英嗣

鞍馬 天 狗 武田 昭彦 武田 有雅子

井 小 町 上野 典子 小辰 恭子

通 小 町 岡田 浩二 広岡 修

盛 久 小林 秀吉 寛 敏一 藤田 昭彦

班 女 上野 典子 寛 敏一 藤田 昭彦

融 大井 光明 福井 啓次郎 藤田 昭彦

高 屋 砂 小牧 大助 川村 淳

松 衣 小 廣 光一 藤田 昭彦

車 虫 川 村 津 益 清

養 老 池田 菊雄 吉田 定男 鬼頭 喜太郎 水波 伝 後藤 孝一郎 藤田 昭彦

吉野 天人 鬼頭 清治 吉田 定男 鬼頭 喜太郎

花 篋 小林 秀吉 福井 啓次郎 藤田 昭彦

花 笹 川 村 光雄 洲崎 文彦

松 之 川 村 光雄 洲崎 文彦

東 之 川 村 光雄 洲崎 文彦

敦 之 川 村 光雄 洲崎 文彦

笹 之 川 村 光雄 洲崎 文彦

花 之 川 村 光雄 洲崎 文彦

藤 戸 鈴木 信男 武田 欣司

熊 野 今村 香 吉田 定男 藤田 昭彦 後藤 孝一郎 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦

山 姥 大塚 幸二 吉田 定男 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦

清 番 外 仕 舞 福 保 向 小 林 慶三 梅田 邦久 古橋 正士

放 下 鼓 備 若 經 藤田 昭彦 吉田 定男 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦

天 下 鼓 備 若 經 藤田 昭彦 吉田 定男 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦

頼 政 武田 小兵衛 後藤 孝一郎 藤田 昭彦 鬼頭 喜太郎 藤田 昭彦

主 催 武 田 田 田 小 謡 兵 衛 会 武 田 田 田 邦 弘 弘 司 衛 会

能 紀 行

水鳥までも我故に

絵と文 二井 榮 逸

若葉摘む。生田の小野の朝風。猶さ返る袂かな。木の芽も春の淡雪に。森の下風鶴寒し。深由には松の雪だに消えなく。都は野辺の若葉摘む

桔草の下にさみどりの路のうら。がむ。つくり頭をもたげていたので。家に持ちかえらうとシヤベルで揺りおこすと、ブンと土の匂いがして、そこから春のあし音がきこえてくるような気がした。吹く風が何となく春めいている。暖かい海風が吹くあの南紀の丘の陽だまりには、すみれやたんぽぽがきつと春の色どりを添えているに違いないと思った。



隅田川

狂女物の中でもたずねる子供が死んでいるといふだけに、とかく陰気になりがちなの

其の時妾思うよう。無題
やなきしも契は深緑の、
水鳥までも我故に。さこそ命は鶯のつがい離れし哀さよ

困りはたうないをよめは、吾が身の為に水鳥をいけにえにした事を悲しみ、生田川に身を沈めしめようのである。

思いわが我が身すて、
ん津の国の 生田の川
は名のみなりけり

そして、二人の男も同じところに沈み死んでしまふ。一人はをよめを、一人は手をとらえていたという。演出では、二人の男がうなむをよめの亡骸を葬った墓の前で刺し違えて空しくなるのである。

男が女を殺したり、女が男を殺したりする悲恋物語りは多いが、水鳥を殺すことにより、三人が自殺するという物語は能らしく、そしてロマンチックであるが、その執念の恐ろしさを否定することは出来ない。
フランスの作家、メリメが書いて

のです。梅若の父など心得たもので、笠にキリで穴をあけてすましていました。
狂女は寒竹を用いますが、一本で三方によい形に枝を張っているのではないと不恰好なものになります。孟宗竹では片面にな

東京新聞 中日新聞 世界の動き 身近な話題 東京中日スポーツ 中日スポーツ

たあの有名悲恋小説カルメンでは青年衛兵ドンホセがタバコ工場の女工カルメン(実は密輸団の女スパイ)に恋をして軍隊を脱走、最後に女が闘牛士ルーカスに心を移したことからこれを殺すのであるが、愛欲の葛藤の果は殆んどが悲恋に終わるのである。

山本能楽堂創立 25周年記念別会能
山本能楽堂(大阪市東区徳井町一〇〇)は、創立二十五周年を迎え、きたる四月二十五日(日)山本能楽会別会能を開催する。

能「鶯」(千鶴隆一、千歳長谷川良蔵)「養老」小書、水波之伝(山本真善「熊野」小書村雨留・勝行(山本勝一)「乱」(矢野一馬)

流祖 清兵衛重政 三百五十年
先代 清兵衛重孝 五十年
追善能
四月四日(第一日曜日)十二時半始
熱田 神宮 能楽殿

大観 文蔵
大槻 秀夫
高安 勝久
西村 欽也
飯富 雅介
立石 澄雄
井上松次郎
後藤 孝一
後藤 孝二
後藤 孝三
後藤 孝四
後藤 孝五
後藤 孝六
後藤 孝七
後藤 孝八
後藤 孝九
後藤 孝十

松山 長田 義
吉田 定男
柳原 富司
地謡
森本 重一
富田 邦二
山本 栄才

武 悪 井上松次郎
佐藤 秀雄
井上礼之助
佐藤 秀雄

江口 観世 喜之
藤田 六郎兵衛

石橋 高安 浩郎
河村 総一郎
福井 啓次郎
藤田 六郎兵衛
鬼頭 喜太郎
藤田 昭彦

以上 藤田 流 笛方
十世 宗家 藤田 六郎兵衛

中部金剛会定期能
四月十八日(日)正午始
熱田 神宮 能楽殿

観世会定式能(第二回)
四月十一日(日)十二時半始
熱田 神宮 能楽殿

忠 度 塚本 秀雄
久田 秀雄

田 村 水藤 元三
地謡
長谷川 修二
河村 契雲

雲林院 西村 欽也
吉田 定男
久田 邦一
藤田 昭彦

知 章 大観 文蔵

寝音曲 野村 又三郎
井上礼之助

丸 高安 浩郎
飯富 雅介
後藤 孝一
後藤 孝二
後藤 孝三
後藤 孝四
後藤 孝五
後藤 孝六
後藤 孝七
後藤 孝八
後藤 孝九
後藤 孝十

山姥 山田 茂
松井 弘
間下 藤平
成経 小島 隆一
康頼 吉川 正和
寛 桑山 昭三
三川 絃平

隅田川

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」

狂女物の中でも、たずねる子供が死んでいくというだけに、とかく陰気になりがちなのがこの「隅田川」です。しかし始めからそれがわかっているわけではありませぬので、沈んだ調子でやってはおかしいし、さりとて軽く流してもいけません。そのかね合いが難しいところで、皆さんが聞かれて成程と納得されるのは、つまり九番の位までです。

同じ「セイ」で出る狂女物でも「櫻川」は位がなく、「柏崎」は品がよく位がありますので、同じような調子ではいけないわけです。

「隅田川」はそういう点をかなり注意して、沈まないように、自分では相当大きい声で謳っているつもりでも、さく人には何を言っているのかわからないということがよくあります。これはあの女笠(おんながさ)が、当流の「明笠」として先がとがっています。そのせいで声がかもってしまっているからな

「のう舟人」の所は少し高めに調子を張って派手に謳います。この曲にはワキの語りを聞いてからもう一度「のう舟人」という文句が出て来ます。この時は悲しみの極にありますが、沈みめに謳わねばなりません。

「うたて都鳥」は遠くの鳥を見る心で、「ひなの鳥とや」は、くだらぬ鳥だと諦め

流祖三百五十年、先代五十年

笛方 藤田流 追善能

能「鷺」「石橋」「管独吟」「江口」

藤田流笛方宗家・藤田六郎兵衛師は、四月四日、熱田神宮能楽殿で流祖清兵衛重政三百五十年、先代清兵衛重孝五十年追善能を開

に当り、笛を認められ近衛家につかえ、禁裡の能に出仕。徳川義直公尾張に封ぜられるとともに、金春八左衛門、山崎和泉とともに尾州藩お抱えとなった。

尾州家は藩で徳川御三家の中でも能楽師の数が多かったが、明治維新でちりちりになり、その中

で流祖の各家を守り通してきた。特色を盛った番組をとつとめまし

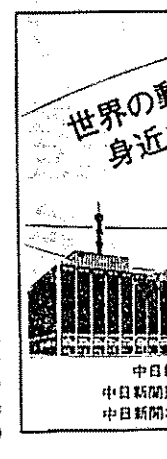
右へ廻ります。

「それは難波江、これはまた」は一の松でも常座でもよいのですが「速くも来ぬる」という所は、速くに聞こえるような気持でむくり謳います。そして笠に手をかけて見るわけですが、この時、シテ柱に少し沈んで(身をかがめる)おいて伸び上がるようにしますと型が活きてきます。

ここで前へ詰める(進む)時、一の松でするとシテ柱でするとの二通りがありますが、どちらも替の型で手をかけないのが本来の型です。

この後「さりとては護守」とかけて「舟こぞりて」と舟をさし「さりとてはのせてたが給へ」と合掌するのが普通の型です。ここで下を打ってワキを指す型と、

手を指す型とあります。いずれにしても頼む心で頭を少し下げるようにします。笛を置くのは、後で舟に乗る時に笛を持ったまま、笠をとるのが見苦しいためその前に



世界の身近

中部金剛会定期能

四月十八日(日) 正午始 熱田神宮能楽殿

Table listing performers and roles for the 'Chubu Kongō Kai' event, including names like 俊寛, 三輪, and 鞍馬天狗.

Table listing performers and roles for the 'Hōryū Kaigai Taikai' event, including names like 鳳鳴, 会大会, and 附祝言.

Table listing performers and roles for the 'Hōryū Kaigai Taikai' event, including names like 素嵐, 葵, and 上村.

Table listing performers and roles for the 'Chubu Kongō Kai' event, including names like 素嵐, 山, and 俊.

Table listing performers and roles for the 'Chubu Kongō Kai' event, including names like 素嵐, 山, and 俊.

Table listing performers and roles for the 'Hōryū Kaigai Taikai' event, including names like 素嵐, 山, and 俊.

Table listing performers and roles for the 'Hōryū Kaigai Taikai' event, including names like 素嵐, 山, and 俊.

国立能楽堂の建設

多年の要望実現へ一歩

国立能楽堂の建設について、かねて能楽協会理事、役員を中心に日本能楽協会、芸術院会員、重要無形文化財保持者らが一丸となつて、建設促進の陣営を行なってきたが、文化庁ではこのほど「国立能楽堂設立準備調査費」として百六十万円を計上、設立準備協議会の発足が期待されており、多年の要望がいよいよ路線に乗ってきたものとして国立能楽堂に寄せられる各界の要望と関心はいよいよ高まつている。

能楽協会会長春信高理事は「まず演者が立ち上らなければと思ひ努力した。協議会が発足したら、十分各權威の声を採り入れ、理想的な能楽堂にしたいと念願している」とその抱負を語っている（能楽タイムズ）。

またこの国立能楽堂の意義について、武蔵野女子大助教授・増田正造氏は、「一世紀近い能の努力は、国家の力を得て新たな開花を上げよう」と朝日新聞（二月二十五日付）で次のように述べている。

歌舞伎と文楽のために第一国立劇場はすでに十年を経、寄席演芸のための、あるいは新劇・オペラ・バレエの劇場が進捗中であるのに、能楽堂だけが「積み残された状態」のまま今日まで放置されたのか、これはかなり不可解な事実である。ひとつは民主主義という形式が、必要なものを優先させるのではなく、陣営や圧力など手順を要するがためである。能楽人はそうした面がまことに不得手であり、当然国が真っ先に造るべきものという油断のあつたことは否定できない。

一方、各流各派がそれぞれの舞台を持つているのに、なにも国が造らなくてもという誤った観念が

一般に根強かつた。国立能楽堂がなぜ必要なのかという根本の問題は、本場の意味での能の場は、実はひとつもないのだという認識に出発せねばならぬ。現在のものはシアターではなく、本質的に稽古場のだから。

能楽堂そのものの様式は、桃山期にはすでに完成していた。西本願寺の国宝の北能舞台は、家康の造営になるもので、本能寺の変の前半に建てられている。

野外的な能舞台は、江戸時代を通じての正式の形であった。舞台と観客席をひとつの屋根でおおった今日能楽堂と呼ばれている様式は明治以後の便法で、能の歴史の中では六分の一を占めるにすぎない。しかも、玄人の稽古場を、その座敷からのぞかせてもらうという、江戸時代のもう一つの形態を、意識の上で覆く重ね合せてしまった。今日ある能楽堂のほとんどは、能役者側の努力によるものだから、それもまた当然と言わねばならぬ。能舞台そのものの空間も、土地の制約が橋がかりの長さや角度の深さなど（わい）小化がいろいろある。

役者の稽古のための空間はあつても、それをどう見るかという観客のための設計は二の次三の次であった。音響や照明のいちじるしい不備などは、その端的な証拠といえよう。外部の騒音はほしほしに侵入するし、カラーで撮つてみると、どの舞台も色が濁つて能の美を伝えにくい。

探照灯ではほぼ上から照らされるような計算は、当然能面は予期していなかったはずだ。稽古場ならば、そしてそれを観客がただ、「拝見」しているものであつたら文句も言えぬ道理であつた。

つまり、本場の意味での能の上演と鑑賞の場とは何かということもだれも考えないまま、百年近くが過ぎたということである。

国立能楽堂は、既存のものより条件がよい建物が、能にひとつ加えられるということではまったくない。六世紀にわたる上演の歴史をふまえた、そして現代のための、まったく新しい舞台空間が能にはじめて誕生するということなのだ。そしてまた、後継者養成の拠点として、運きには過ぎたが、また起死回生の場となりうるはずだ。

民間の有志と、わずかに三百万ほどの国庫補助で続けられている能楽養成会は、今日稽古の場すら思うにまかせない。流儀や役柄によるはなはだしい落差は、もう国の力でなくては継承が難しい。素人の月謝に頼るのではない。本場の芸術家の養成も、能面、能装束、楽師の製作補修の技術者についての現状は、いっそう深刻である。

さらには、家元制度の管理下にある能界、あるいは能楽堂では実現しにくい、古典の発掘や演出の復元などの実験、新作活動への十分な補助。また一日限りの上演形式ではなく、かりに月の第一週は各流が「羽衣」を、第二週は「葵上」をといった公演の新しい形も、能の普及に画期的な展開をもたらすだろう。

あるいは、博物館にいった能面や能装束の舞台での活用、また事情あつてある名家の蔵に納められたままの旧金剛座の伝承面なども、国立能楽堂なら生きる可能性も夢ではあるまい。

そして芸の記録、資料の収集。法政大学の能楽研究所は古文書を主とし、私の大学の能楽資料センターは、テープやスライドによる徹々たる記録の仕舞を能に加えていく。年間二百万ほどの予算にすぎない。それにくらべ国立劇場の芸能調査室の予算は、三千五百万と聞く。全主催公演はカラービデオで記録されている。

昨春秋は、国際交流基金の派遣

の友社

上本町	2-20
464)	
7 9 8 4	
1 3 6 3 9 3	
年	500 円
年	600 円
年	50 円

2月22日サンケイ観世能

回を重ねる劇場能

3月・4月放送予定

● NHKラジオ第一放送（毎週土曜日午後6時5分）

〔3月〕

6日(土)	観世流「隅田川」梅若六郎ほか
13日(土)	下懸宝生流「百萬」宝生弥一ほか
20日(土)	喜多宝生流「安宅」喜多長生ほか
27日(土)	宝生流「三井寺」松本恵雄ほか

〔4月〕

3日(土)	観世流「正尊」坂井音次郎ほか
11日(日)	観世流「歌占」木原康次ほか
18日(日)	金春流「養老」櫻間金太郎ほか
25日(日)	観世流「杜若」橋岡久共ほか

● NHK・FM 毎週日曜日（午前7時15分）

〔3月〕

14日(日)	金春流「山姥」櫻間道雄ほか
21日(日)	宝生流「殺生石」野村剛作ほか
28日(日)	金剛流「鞍馬天狗」「一角仙人」豊嶋弥左衛門ほか

〔4月〕

4日(日)	観世流「歌占」観世喜之ほか
11日(日)	宝生流「雲雀山」高橋進ほか
18日(日)	観世流「草子洗小町」梅若万三郎ほか
25日(日)	喜多流「頼政」後藤得三ほか

● NHK教育テレビ

3月20日(祝) 午前9時
「能楽思い出の名人集」(本紙④面参照)

4月18日(日) 10.05~10.50
狂言「二人袴」野村万蔵、万之丞、万作
・番組変更の節はご了承下さい。

福井能楽会

宝生流鑑賞能

福井能楽会による宝生流鑑賞能(第七回)はきたる三月二十八日(日)福井能楽堂で開演される。

能「桜川」(シテ佐野前)「国和」(シテ佐野前)「高橋右任」の二番、仕舞「加茂」(島村展)「胡蝶」(京盛一美)「放下僧」(渡辺登之助)「山姥」キリ(近藤乾之助)狂言「粟山伏」次回は六月二十六日の予定。

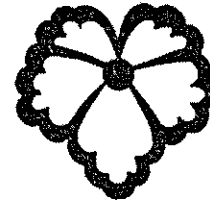
吉翠会大会

高校クラブの発表も観世流・青翠会(吉田妙師)は、三月二十七日

観世流・高野瀬透氏

観世流師範・高野瀬透氏は、かねて病氣療養中のところ三月三日午後九時老衰のため名古屋市東区徳川町七の五の自宅で逝去された享年八十一歳。

告別式は五日正午から一時まで東区飯田町・円勝寺で行なわれた喪主恵三氏。



御料理 あつた 菜軒

本 店 熱田区神戸町三四 電話(67)8686、8

神宮東門店 熱田区新宮坂町一 電話(682)5598(代表)

中日五流能は、第二十一回を迎え、ことしも小能楽時代の代表的五流能として充実した内容で、全国より一流の演者を出し異色の演

檜書店

観世流・金剛流
宗家本元

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1 電話(291)2488-9
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入 振替東京 3-3552
電話(231)1990
振替京都 113

割烹 鳩 じ

名 古 屋 市 中 区 栄 3 丁 目 13
電 話 (241) 2713

城

割烹・小料理

● 熱田神宮能楽殿喫茶部
● 住吉小路(中区栄3-10) 電話 241-0248
● 喫茶・グリル(愛労社地下ビル) 電話 731-1128

酒藏白龍

蔵元直営

白龍本店 名古屋市中区深田町 電話 911-7572

演能案内

梅猶会定期能楽会

第十九期 第三回

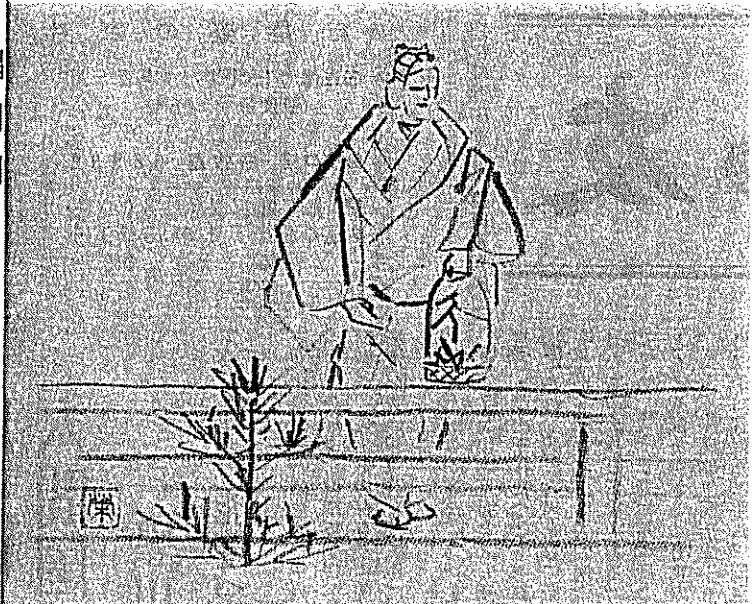
二月二十二日(日)午前十一時始

熱田神宮能楽殿

能 紀 行

七草囃子

絵と文 二井榮逸



え 隅田川

この曲は何と申しましてもワキの語りが中心になっているのですが、シテの心持も大変

ら、笠を捨てて音が大きくなるという注に注意しなければなりません。少しせきぎみにすると、又笠の紐を一本かけておとすとあまり音がしなくなっていくようです。

このあと「南無阿弥陀仏」は細かく三つ打ちますが、子方の謡がきこえてくるので、原の上の方を見ながらそと鉦鼓だけを下に置きます。シテの着ている水衣は裾がひろがっていきから、その上に置かないよ

五節句の絵を頼まれると、私はその一つである若菜の節句に二人静のツレを描くことにしている。その理はワキの呼出しを受けて、若菜摘みのシテ連が冒頭に、拾遺集から取材した若菜摘みの小謡を謡うからである。私はこの一声から小謡にかけての文章が好きである。毎年陰曆正月七日、神前に供えるため、吉野勝手神社では若菜摘みのほとりに若菜を摘ませるのがならわしであった。一冊で若菜摘みのシテ連が舞を踊る。絵としては籠がほしいので若菜の節句だけは親世さんの型を描かせてもらっている。若菜といえは春の七草。春の七種の菜をさす。せりなすな。ごきよらはこべら。陰曆正月七日の朝、又は、前日

の夕暮に、まないたの上七草をのせ、ななくさなづな……トントントンと囃しながらさきむ風習を七草囃子という。それは少年の頃、ふるさとの家で泊った時、真っ白な髪をした祖母からも聞いた話である。ゴットンゴットンとゆるやかにきこえてくる水車の調子に合わせて祖母の囃う七草囃子はまことにゆっくりゆっくりしたものであった。シテ連、物着に唐織を脱ぎ長袖静鳥帽子、総て後シテ同好するべし、と、示されるように、この曲はシテとツレが全くそっくりの鳥帽子、長袖、腰巻をつけ、所作においても寸分の違いも許されぬきびしいおきてのある能である。その中に夢と現実、光と影の相異を表現しなくてはならない能だけに、熟達演技が必要なのである。二人静は何にしても文章がすばらしいので謡曲愛好者には特に好まれるようである。謡う文学と誰かが言ったように謡いながらと体のすみずみまで爽かさが通るゆけるようである。私は謡の弟子達に謡は発声・発音、構え、の三つを忘れないようにといつもやかましくいう。勿論三つとも関連した事で、発音がよければ発音も、構えも良いに違いないし、又、発音が正しければ発音もよいに違いない。正しい発音には構えが出来ていなければならないというのである。先哲の言ったように、上あごにも思をあてないように奥底から声を出すことである。そして一句一句はほんとうに大事に謡わなければならない。一句の内の一字でもおろそかにすると、その謡は死んでしまう。間拍子、位等はこの三つと節拍りが完成してからのことである。物から人間へ、ということを昨年、都市文化開発海外調査団の団長として、アメリカの都市を視察してこられた鈴木剛さんの手記の中に次のような一文があったのでここに掲げさせてもらう。物質文明のメツカのように思われていたアメリカが、人間の、真の生きがいをつくり出すものは何か、ということを考え、芸術、文化を都市開発の中心にもつて来

つゝあるのです。このことは、われわれ調査団にとつて大変なショックでした。それは、どういふことかと、いいますと、アメリカでは、この数年、新しい芸術文化センターの建設が、大衆のなかから自然発生的に生まれ、一つのブーム状態にまでなっている。大都市はもとよりのこと、地方都市にもすでに百カ所にも達しているといわれています。日本では、文化芸術といえは、やもすると単なる趣味娯楽と考えられがちですが、アメリカでは、大きく、人間形成のうえでなくてはならぬ重要なものとして、教育の中に、当然加えられなければならないんだ、という考え方が基本になっているように思われます。私はこの手記を読んで、物を買って込むだけに狂奔する今の日本人からは眼に見えぬ大事なことではないかと思つた。しかし、日本と日本人のその本来の美しさをみつめようとする人もふえている。私は今こそ日本をみつめ直さなければならぬ大事なことではないかと思つたのである。

つゝあるのです。このことは、われわれ調査団にとつて大変なショックでした。それは、どういふことかと、いいますと、アメリカでは、この数年、新しい芸術文化センターの建設が、大衆のなかから自然発生的に生まれ、一つのブーム状態にまでなっている。大都市はもとよりのこと、地方都市にもすでに百カ所にも達しているといわれています。日本では、文化芸術といえは、やもすると単なる趣味娯楽と考えられがちですが、アメリカでは、大きく、人間形成のうえでなくてはならぬ重要なものとして、教育の中に、当然加えられなければならないんだ、という考え方が基本になっているように思われます。私はこの手記を読んで、物を買って込むだけに狂奔する今の日本人からは眼に見えぬ大事なことではないかと思つた。しかし、日本と日本人のその本来の美しさをみつめようとする人もふえている。私は今こそ日本をみつめ直さなければならぬ大事なことではないかと思つたのである。

つゝあるのです。このことは、われわれ調査団にとつて大変なショックでした。それは、どういふことかと、いいますと、アメリカでは、この数年、新しい芸術文化センターの建設が、大衆のなかから自然発生的に生まれ、一つのブーム状態にまでなっている。大都市はもとよりのこと、地方都市にもすでに百カ所にも達しているといわれています。日本では、文化芸術といえは、やもすると単なる趣味娯楽と考えられがちですが、アメリカでは、大きく、人間形成のうえでなくてはならぬ重要なものとして、教育の中に、当然加えられなければならないんだ、という考え方が基本になっているように思われます。私はこの手記を読んで、物を買って込むだけに狂奔する今の日本人からは眼に見えぬ大事なことではないかと思つた。しかし、日本と日本人のその本来の美しさをみつめようとする人もふえている。私は今こそ日本をみつめ直さなければならぬ大事なことではないかと思つたのである。

つゝあるのです。このことは、われわれ調査団にとつて大変なショックでした。それは、どういふことかと、いいますと、アメリカでは、この数年、新しい芸術文化センターの建設が、大衆のなかから自然発生的に生まれ、一つのブーム状態にまでなっている。大都市はもとよりのこと、地方都市にもすでに百カ所にも達しているといわれています。日本では、文化芸術といえは、やもすると単なる趣味娯楽と考えられがちですが、アメリカでは、大きく、人間形成のうえでなくてはならぬ重要なものとして、教育の中に、当然加えられなければならないんだ、という考え方が基本になっているように思われます。私はこの手記を読んで、物を買って込むだけに狂奔する今の日本人からは眼に見えぬ大事なことではないかと思つた。しかし、日本と日本人のその本来の美しさをみつめようとする人もふえている。私は今こそ日本をみつめ直さなければならぬ大事なことではないかと思つたのである。

- ①面よりつづき
- 草子洗小町 平野文彦 安川光雄
 - 連吟 巴之段 川崎製菓部
 - 花月 日商岩井製正会
 - 嵐山 安川光雄 小鍛冶小棟 重保
 - 葛城 平野文彦 松虫 玉木孝男
 - 鞍馬天狗 神谷功
 - 葵 上 今井隆 水野俊三 桐井喜全
 - 屋 島北川治 鬼頭英二 寛三男
 - 芦 刈 神谷貞子 柳原富司 寛三男
 - 女郎花 後藤路子 寛三男 寛三男
 - 賀 茂 佐竹 寛三男 寛三男
 - 番外狂言 富士太鼓 前野郁子
 - 番 知 鳥 海辺千鶴 山田義高 久田敬二
 - 大 江 山 山 久田敬二

- 久田 観正 会
- 462 名古屋市中区東水切町四ノ四三
- 久田 秀雄
- 電話(981) 3643番
- 幸友会春の大会
- 四月二十九日(祝)午前十時始
- 熱田 神宮能楽殿
- 舞囃子など三十数番
- 柴田初太郎師米寿祝賀
- 五月三日(祝)午前九時始
- 熱田 神宮能楽殿
- 観世・流友会大会(第四回)
- 五月三日(祝)午前九時始
- 熱田 神宮能楽殿

- 神 歌 右翁 堀部 英雄 千歳 平光 進 地謡 梅田 邦久
- 高 砂 遠山 巖 原 正義 地謡 梅田 邦久
- 仕舞 菊慈童 石塚 定男 地謡 梅田 邦久
- 舟井 慶幸 坂野 寿夫 地謡 梅田 邦久
- 素謡(知水会)
- 櫻 川 高本佐喜子 竹内 良雄 地謡 寺倉 正一 白石 紗子 早川 幸子 早川 幸子
- 仕舞(茲水会)
- 高 砂 深見 一枝 地謡 有賀 滋子
- 羽 衣 余倉 早苗 地謡 有賀 滋子
- 菊慈童 深見 賀子 地謡 有賀 滋子
- 仕舞(観正会)
- 難波 大島寿美子 稲垣つね子 三宅 靖子 後藤はるえ 山岡 冬味 吉川 宇良子 鈴木 金子 伊藤 正子 久田 秀雄
- 清 經 高橋 宗司 加野昭二郎 地謡 殿島 修二 鈴木 嘉二 武沢 俊夫
- 連吟 俊 寛 高橋 宗司 鈴木 明
- 菊慈童 古川洋克良 後藤 寿子 地謡 柴田初太郎
- 仕舞 嵐 山 小泉 哲男 地謡 柴田初太郎
- 弱法師 芝村 榮枝 地謡 柴田初太郎
- 素謡(水雲会)
- 小 督 福島与志子 小川さく子 伊藤すく子 松岡 弘子 地謡 早川 幸子 佐藤 幸子 大塚 錦枝 森 ひと
- 山 姥 深見 鋼一 清 富士道周明 地謡 加野昭二郎 今村 修二 殿島 昌作
- 仕舞 綱之段 大平 敏子 御牧 紀代 吉井 佐季 鬼頭貴代子 山田 富美 吉岡 常子 守部 啓子 渡辺 節子 佐藤アヤ子 浮良 綱一 福間 昌彦 福間 昌彦 富士道周明
- 素謡(松園会)
- 弱法師 岩田 信代 野崎満佐子 地謡 殿島 修二
- 杜 素謡(茲水会)
- 若 奈倉 早苗 大野 幸 地謡 有賀 滋子
- 流祖 清兵衛重政三三十五年 先代 清兵衛重政五十年
- 龍吟会追善能
- 永田 てる子 近藤 志子 岩越 志子 三宅 恵子 岡田 多喜子 岡田 多喜子 天野 敬子 木村 守博 今井 行博 住田 秀和 佐藤 利次 永田 利次 神原 利次

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」切

隅田川

この曲は何と申しましてワキの語りが中心になって居るのですが、シテの心持も大変難しい所なものです。始めは何という事もなく舟に乗っていきながら、いわばケロリとして居るわけですが、「吉田の何某」と聞いて「若しや自分の子供ではないか」と注意して聞き出します。わが子と信じる気持はなくても若しやと思ふ心から涙ぐんで来て、「事終つて候」をきいて泣き伏しますが、このシヨル(泣く型)手は静かに持つて来てはいけません。わっと泣き出す感じをあらわさねばならぬので難しい所です。しかし「若しや」という心がある「のう舟人」と再びききますが、ワキは二度目のことでもあり、面倒なというふうな口調で語ります。

「去年三月今日のこと」さてその稚児の年は」とだんだんワキの方へ向いて、「父の名字」とと段々にかけて語り、「これは夢かや」と絶望の余り笠を捨てて泣き伏します。何しろ一番静かな時ですか

「亡者も喜び給うべけれど」のあたりでワキの方に向き、鉦鼓と撞木をワキに持たせてもらいます。

小曲の「鉦の拍子」(かねのひょうし)は、「南無阿弥陀仏」のところを「ナムア、大鼓がボン、鉦がニツ、一ツ、又ニツ」と交互に打つ習いの手を言います。二度目の念仏から子供の音が聞こえるのに気がつきそれに耳を傾ける気持でだんだんと塚に向きます。三度目では聞くことに心を奪われて鉦鼓を打つことを忘れるというのが心得になって居ます。「今一声を聞かまほしけれ」は高く、心をこめて聞かなければなりません。万三郎兄のこの謡の方は実にうまいものでした。

このあと「南無阿弥陀仏」は細かく三つ打ちますが、子方の謡がきこえてくるので塚の上の方を見ながらそっと鉦鼓だけを下に置きます。シテの着ている水衣は襦がひらがるので、その上に置かないよう注意をします。若し襦にのついているシテが立った時に大きな音がするからいけないのです。撞木は「互に手に手を」で立上る時に、はなすという感じではなく、ストンとおとします。そして子方を見て後へさがり「見えつ」で両手でふせ「かくれつ」で向うを見、「東雲の空」では体は正面を向いたまま前だけでワキ座に東雲の空を見ます。

「塚の上の草茫茫々」で止めになりますがこの型は、手を塚につけないで下から見上げる型(普通の型)、塚に手をかけてなでおろし塚の脇で泣き伏す型、手を塚にかけただけの型等いろいろあります。又横になる人がありますが、これは抱きつく意味からでしょうか型にはないものです。

子方は近頃幻だから、というのでなしでもやりますが、なるべく出した方がよいように思っています。出ているものが幻に見えるようにするのが能だ、と私は思います。けれどあまり子方が大きいのは考へもので、やはり七つ八つの可愛い子でないと情がうつりません。

ここに掲げさせてもらおう。
物質文明のメツカのように思われていたアメリカが、人間の、真の生きがいをつくり出すものは何か、ということを考え、芸術、文化を都市開発の中心にもつて来

小鼓方大倉宗家・大倉長十郎氏は、二月二十三日、50年度大阪府民劇場賞を受賞。昨年十月大槻能楽堂での「卒都婆小町」が顕彰されたものである。

各地だより

豊春(会春)の会

能「大原御幸」(シテ豊嶋三千春、法皇玉村篤也、内侍重本昌三、局植田三、ワキ岡治郎右衛門、小鼓藤田光春、小鼓藤田善一、大鼓河村総一郎)

能「大原御幸」(シテ豊嶋三千春、法皇玉村篤也、内侍重本昌三、局植田三、ワキ岡治郎右衛門、小鼓藤田光春、小鼓藤田善一、大鼓河村総一郎)

京都

金剛流・豊春会は四月十一日、金剛能楽堂で五十二年豊春会春の能を開催。

能「大原御幸」(シテ豊嶋三千春、法皇玉村篤也、内侍重本昌三、局植田三、ワキ岡治郎右衛門、小鼓藤田光春、小鼓藤田善一、大鼓河村総一郎)

能「大原御幸」(シテ豊嶋三千春、法皇玉村篤也、内侍重本昌三、局植田三、ワキ岡治郎右衛門、小鼓藤田光春、小鼓藤田善一、大鼓河村総一郎)

和博朗、大鼓河村総一郎、太鼓小寺俊三

狂言「土筆」(茂山千作、茂山千五郎)

ほか仕舞「養老」(金剛流)連吟「起請文」(川崎薫)など。

伊勢一宮 椿神事能

鈴鹿市・椿大神社で四月九日神事能で催された。

能「鉦鼓」(シテ金剛流、ワキ岡治郎右衛門、小鼓藤田光春、小鼓藤田善一、大鼓河村総一郎)

鹿

鈴鹿市・椿大神社で四月九日神事能で催された。

能「鉦鼓」(シテ金剛流、ワキ岡治郎右衛門、小鼓藤田光春、小鼓藤田善一、大鼓河村総一郎)

栄能楽堂の催し

▽4月4日	翠謡会	中村喜彦 森田光春
▽4月18日	美謡会	曾和正博
▽5月3日	豊水会	後見 金剛流ほか 地謡 今井幾三郎
▽6月6日	豊星会	後見 金剛流ほか 地謡 今井幾三郎

第46回 広田後援会能 5月2日金剛能楽堂

能「大原御幸」(シテ豊嶋三千春、法皇玉村篤也、内侍重本昌三、局植田三、ワキ岡治郎右衛門、小鼓藤田光春、小鼓藤田善一、大鼓河村総一郎)

井筒	高安 滋郎	河村総一郎 鬼頭 喜太郎
三輪	西村 欽也	寛 三男 助川 竜夫
名古屋巽会大会	五月五日(祝)午前九時半	熱田 神宮能楽殿

櫻川	高本佐喜子 竹内 良雄	地謡 早川 紗枝
高砂	深見 一枝	地謡 有賀 滋子
素謡(竹韻会)	深見 賢子	地謡 有賀 滋子
賀茂	太田 清見 村井 千年	地謡 加藤 幸雄
名古屋巽会大会	五月十五日(土)午後一時始	熱田 神宮能楽殿

龍吟会追善能	五月九日(日)午前九時半始	熱田 神宮能楽殿
名古屋巽会大会	五月十五日(土)午後一時始	熱田 神宮能楽殿
小袖曾我	吉田 定男 藤田 昭彦	
善知鳥	増田 一雄 青木 武弘	

名古屋巽会大会 五月五日(祝)午前九時半 熱田 神宮能楽殿

名古屋巽会大会 五月十五日(土)午後一時始 熱田 神宮能楽殿

小袖曾我 吉田 定男 藤田 昭彦

善知鳥 増田 一雄 青木 武弘

龍吟会追善能 五月九日(日)午前九時半始 熱田 神宮能楽殿

名古屋巽会大会 五月十五日(土)午後一時始 熱田 神宮能楽殿

小袖曾我 吉田 定男 藤田 昭彦

善知鳥 増田 一雄 青木 武弘

龍吟会追善能 五月九日(日)午前九時半始 熱田 神宮能楽殿

名古屋巽会大会 五月十五日(土)午後一時始 熱田 神宮能楽殿

小袖曾我 吉田 定男 藤田 昭彦

善知鳥 増田 一雄 青木 武弘

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」

大和の舞余(いわよ)に手習の能を造った。舞余は今、櫻井市安宿町大字池之内である。

玉穂宮は安宿町の郊外にある。小高い丘で、この丘を土地の人々「おやしき」と呼び、信え

舞余の目的は、舞余の能は狂女を装う女性に照り出さるることを知り、再び召使うことなる。

野趣に富み、しかも地位に即く。皇子の寵姫の身の上なので、夫婦で、万事が楽に出来ていましたので持ちよ

ったものです。今は小道具で、芝居のようにガチャガチャ鳴る、所謂鳴り物ではあ

りませんが、それでも重いですね。

人体の曲は気合のもので、それがゆけ

ると見ていらぬものです。型としては別

にむつかしいところはありますが、十郎の

「五郎殿、あれを御掃し候え」を受けて

五郎が「シカト掃えるまじいか」と刀に手

をかけるのが、おどかしさの心でなければな

りません。

クセは兄弟の優しい心を見せる所ですが

十郎の文を受取るのは「老少不定と聞く時

は」で立てゆく丁度渡すのにいいので

す。五郎の方は「今まではその主に」でゆ

くとこれもうまうまはまります。申入は十

三郎は十郎に目を付け、鬼王は五郎に向

くのが口伝になつています。十郎の「そのま

ゝやる」と指す方等が上手と下手の差がハッキリ

わかるのでこわいです。

昔は鬼王が先に入らなうようになっていま

しが、三郎の方が先なので、やはり先輩

が勤める関係から鬼王は先に出てよ

う三郎を先にして、これにつづきます。こ

れは梅若の父が始めたのだと聞いてお

ります。このような例は「木曾」でもシテの覚

明がよけて、ツレの義仲が先に入り、「七

騎落」でも実平が頼朝を先にします。しか

もこの時は平伏しているのです。これは勤

める者がどうかというのではなく、主君と

いう役割を重く見てのことなのですが、私

はこまでするのには余り好みませんが、梅若

の父はこのようなことが好きでしたが、好

きといふのはやはり明治の初め頃はこの

ような行方が喜ばれたのであろうと思

います。



二段之式 (前シテ山本勝一、白観世世雄、赤・梅若盛義師) は藤田昭彦師が勤めきわめて盛会であった。

(写真は能「観世」)

それについても思い出しますのは父の宙返りです。宙返りは名人や達人の多かったあの頃でも、ならぶ者がないと溢れられていました。

何しろ首を横にもってゆくとキンシリ横にかえるのです。正面に返る時はきんたまにかみつくようにせよと教えられました。父は裏に鮮やかにやりましてハッキリ安座します。我々がやりましてお尻からつくだ

変な格好になってしまいます。

又長月もったまで——これは「鳥帽子折」ですが——金棒の体操のようにくるっと返ったりするのです。「鳥帽子折」の子方はいくつもなく義経で、元服を祝うという本文ばかりでなく、多勢との斬組もありまして、子方としては最高のものであります。私が明治二十九年頃に勤めました。梅若の父がシテで、前ツレは、梅若新太郎の義父の梅若新太郎でした。この人は小づくりですが声の綺麗な調子の高い、女物のツレの得意な者でした。立案は父を始め、二十三世家元の清康さん、その弟で片山家にゆかれる前の寿さん(後の元義、左近、片山博通の父)、叔父の清之(喜之先々代)それに万三郎、竹世(実)両兄弟で、一列にはならびきれぬ位でした。

何しろ恐い人ばかりで、順々に斬り合っても、今度の人はどうとられるかと心配で心配で仕方がありませんでした。その上狂言方もやらねばなりません。これは流儀が違つて、やり方も違つたもので、それも一苦労です。しかしよくしたもので、「正尊」は同じ夜討といつても明るいのですが、「鳥帽子折」は暗夜のことで、暗く暗く見えないので、同志討をして子方を助けてくれます。(つづく)

六月五日(土)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

六月六日(日)午前十時半始
熱田神宮能楽殿

第二十一期第一回
青陽会定期能

入場料
二、〇〇〇円 一般
一、〇〇〇円 諸上学生
お申込み 昭和区南山町十二の七 野村方
TEL 832-8071

「夜討留我」で思い出しますのは、万三郎兄弟の長男の美雄と左近さんで兄弟をなされた時です。

万三郎兄弟が三郎をすといいますので、私が鬼王をいたしました。

そのほかにも万三郎兄弟と兄(当時梅若六郎、後の実)が、しんじつ、丁度東京へ見えていました手塚亮太郎さん(手塚雅三先代)とで鬼王、三郎をいたしました。

役ながら何かこう、気持のよい役で、シテがよいと一寸出て見たい役ですね。

何でもよいようにもいさし遊ばせよう」の所は相手と気合がうまく合わぬといけません。これがなかなかよい具合にならぬものです。相出出来る人が出ることになったりするので、両兄(故万三郎・実)の時等、よく梅若の父と宅の父が出たものです。シテも人氣の盛りで、その頃これ程の曾我兄弟はないといわれていた程であります。二人の父もそれはそれは嬉しそうに勤めていました。あの太刀を持って立っているのは年をとると少々大儀です。

五月三十日熱田神宮能楽殿
狂言やるまい会
第十七回公演

狂言やるまい会の第十七回公演は五月三十日熱田神宮能楽殿で催されるが(番組①)梅若盛義、主宰野村又三郎師の子息信行君(四才)が「観世」の小猿にて初舞台を演ずる。

「茶子味梅」(ちやすあんばい)は妻の愛情はわかって母が苦しむ。「日本人無心、我唐妻恋」と泣き悲しむ唐人。狂言には珍らしい楽を舞う。

舞囃子「船弁慶・小書白波の伝」は、金剛流のみの演出でワキと間が出る異例の型がみどころ。様式は能「船弁慶」中入後の部分を舞う。なお次回公演は十月十六日(土)の予定。

六月五日(土)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

六月六日(日)午前十時半始
熱田神宮能楽殿

第二十一期第一回
青陽会定期能

入場料
二、〇〇〇円 一般
一、〇〇〇円 諸上学生
お申込み 昭和区南山町十二の七 野村方
TEL 832-8071

5月・6月放送予定

● NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分)

〔5月〕

16日(日) 喜多流「頼政」後藤得三ほか
23日(日) 観世流「楊貴妃」大江又三郎ほか
30日(日) 金春流「通盛」金春欣三ほか

〔6月〕

6日(日) 観世流「善知鳥」観世寿夫ほか
13日(日) 宝生流「田村」野口緑久ほか
20日(日) 喜多流「班女」喜多節世ほか
27日(日) 観世流「天鼓」上田照也、大槻文蔵

● NHK・FM 毎週日曜日 (午前7時15分)

〔5月〕

16日(日) 観世流「杜若」橋岡久共ほか
23日(日) 宝生流「田村」野口緑久ほか
30日(日) 観世流「歌占」木原康次ほか

〔6月〕

6日(日) 喜多流「郎郎」粟谷新太郎ほか
13日(日) 観世流「白楽天」梅若泰之ほか
20日(日) 宝生流「昭君」今井泰男ほか
27日(日) 観世流「楊貴妃」大江又三郎ほか

● NHK教育テレビ
5月23日(日) 午後9時~10時半

観世流能「熊野」観世元正ほか
・番組変更の節はご了承下さい。

六月五日(土)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

六月六日(日)午前十時半始
熱田神宮能楽殿

第二十一期第一回
青陽会定期能

入場料
二、〇〇〇円 一般
一、〇〇〇円 諸上学生
お申込み 昭和区南山町十二の七 野村方
TEL 832-8071

六月五日(土)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

六月六日(日)午前十時半始
熱田神宮能楽殿

第二十一期第一回
青陽会定期能

入場料
二、〇〇〇円 一般
一、〇〇〇円 諸上学生
お申込み 昭和区南山町十二の七 野村方
TEL 832-8071

六月五日(土)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

六月六日(日)午前十時半始
熱田神宮能楽殿

第二十一期第一回
青陽会定期能

入場料
二、〇〇〇円 一般
一、〇〇〇円 諸上学生
お申込み 昭和区南山町十二の七 野村方
TEL 832-8071

期待される銀行
ご奉仕する

創立 明治10年
本店 岐阜市

十六銀行

能 樂 の 友

題字は熱田神宮 藤田宮司筆

発行 能 樂 の 友 社
名古屋千種区吹上本町2-20
(郵便番号 464)
電話 (731) 7 9 8 4
振替口座 名古屋 3 6 3 9 3
購読料 1年 500円
郵送の場合 1年 800円
一 部 50円

八月十七日(火)午後五時半始
沼津市・大手町会館
〔素謡〕羽法師(シテ浅井宏泰)
野宮(シテ梅田邦久) 求塚(シテ
小野朗) 道成寺(シテ鷺尾周三)
ほか仕舞三番

◆ 演能カレンダー ◆
(熱田神宮 能楽殿)

[6月]

12日(土) 一願会・叶石会大会 (来場歓迎)
13日(日) 観世会定式能 (有料)
20日(日) 宝生九郎師追善能 (有料) (番組①面)

[7月]

3日(土) 盛門会能 (有料) (番組①面)
11日(日) 朝日狂言会 (有料) (番組②面)
17日(土) 麦の会 (有料) (番組②面)
24日(土) 観世九郎会定期能 (有料) (番組③面)

[8月]

7日(土) 第11回名古屋新能
会場 熱田神宮神楽殿前特設舞台
(有料) (番組③面)

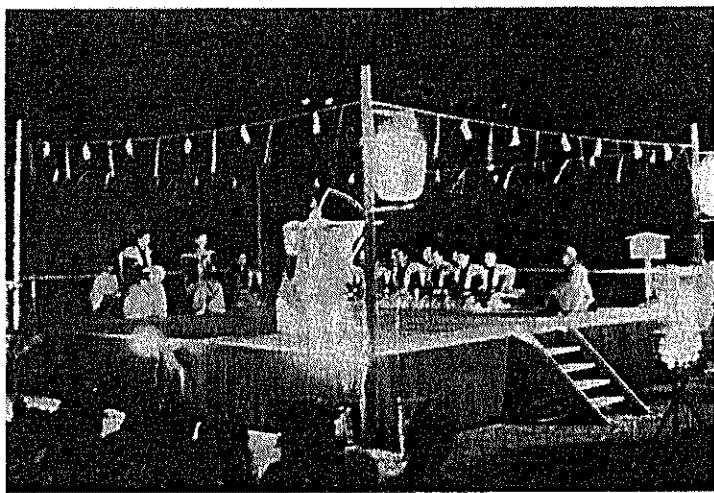
8日(日) 宝生流官庁楽連連合大会 (来場歓迎)
15日(日) 素謡と持能の会 (有料)
22日(日) 和泉会
29日(日) 長袖会

[9月]

12日(日) 観世会定式能 (有料)
15日(祝) 観世会秋の大会 (来場歓迎)
18日(土) 観世九郎会定期能 (有料)
23日(祝) 宝生会定式能 (有料)
26日(日) 淡交会 (来場歓迎)

(演能変更の節はご了承下さい)

第11回 名古屋新能



「名古屋新能」は、ことし第十一回目を迎え、またも名古屋市の恒例行事になり、入場者も毎回千五百人を越え、夏の宵の賑わいにくりひろげられる新能として市民に親しまれている。

主催は、熱田神宮、能楽協会の名古屋支部、後援名古屋市、中部能楽師会。

能組は、昨年と同じく三番立て宝生流「小鍛冶・小書白頭」(シテ内藤泰二) 喜多流「羽衣・小書留」(シテ長田鶴) 観世流「狸々乱・双之舞」(梅田邦久、武田邦弘)、狂言「釣針」金剛流舞囃子「竹生島」金春流・仕舞「松虫」ほか観世流仕舞四番。

火入れ式は薄暮の午後七時ごろ熱田神宮長谷晴男権宮司により厳かに行なわれる。

開演は午後五時三十分。(雨天の場合は順延)

前売券千円。当日券千二百円。

(番組詳細は③面掲載)
(写真は第10回新能)

納涼能楽鑑賞の夕べとして、年とともに名古屋市の恒例行事になり、入場者も毎回千五百人を越え、夏の宵の賑わいにくりひろげられる新能として市民に親しまれている。

主催は、熱田神宮、能楽協会の名古屋支部、後援名古屋市、中部能楽師会。

能組は、昨年と同じく三番立て宝生流「小鍛冶・小書白頭」(シテ内藤泰二) 喜多流「羽衣・小書留」(シテ長田鶴) 観世流「狸々乱・双之舞」(梅田邦久、武田邦弘)、狂言「釣針」金剛流舞囃子「竹生島」金春流・仕舞「松虫」ほか観世流仕舞四番。

火入れ式は薄暮の午後七時ごろ熱田神宮長谷晴男権宮司により厳かに行なわれる。

開演は午後五時三十分。(雨天の場合は順延)

前売券千円。当日券千二百円。

(番組詳細は③面掲載)
(写真は第10回新能)

8月7日(土) 熱田神宮 特設舞台

能 3 番 上 演

〔素謡〕小袖曾我(十郎・鷺尾周三、五郎・梅田邦久) 井筒(シテ浦部好弘) 砦(シテ小野朗) 道成寺(シテ浅井宏泰) (仕舞) 雨之段 笠之段、鼓之段、玉之段
入場料いずれも一、五〇〇円。

く、また著者の鋭い感覚と大きな視野から期り下げて解説した恰好の著がこの能のすずめである。B6判、百八十八頁、定価七八〇円。

玉川大学出版部 東京都町田市 玉川学園六ノ一

演 能 案 内

「田鶴惣太郎師の米寿」(四十六年五月) 「雨の染名」(四十六年六月) 「千手の前」(四十七年七月) 「お伊勢参り」(四十八年十月) 「名古屋まで」(中日五流能・足助にて) 「河八橋にて」など、非売品

〒17 東京都豊島区北大塚二丁目一四番
電話〇三(九二〇) 六九六四番

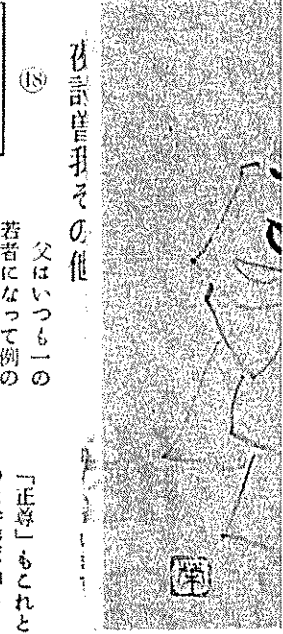
中日見舞廣告について
啓中見舞ご芳名廣告のお申し込みを頂いておきますが、紙面の都合にて七月号、八月号にわたって掲載させて頂きますのでご理解賜りますようお願い致します。(編集部)

電話(六七)二九二二番

<p>名古屋宝生会定式能 廿周年記念別会 宝生九郎三回忌追善能 六月二十日(日) 十二時半始 熱田神宮 能楽殿</p>		<p>盛門会能 七月三日(土) 午後一時始 熱田神宮 能楽殿</p>	
<p>加 茂 内藤 泰二 吉田 定男 福井 良久 鬼頭 好信 本間 英孝 野村 蘭作 馬場 富四夫</p>	<p>宅 高安 滋郎 河村 総一郎 柳原 富司忠 藤田 昭彦</p>	<p>小 天 鼓 自本 雅 馬場 富四夫 地謡 加藤 勝一 大川 啓和 中島 茂兵衛 井上 茂兵衛 武田 孝史</p>	<p>海 人 高安 勝久 寛 敏一 鬼頭 喜太郎 飯富 雅介 後藤 孝一郎 寛 三男 大野 弘之 佐藤 稔 伊藤 真六 馬場 富四夫 高田 義雄 廣島 克栄</p>
<p>魚 説 狂 辰野 蘭作 吉田 俊彦 地謡 須賀 小沢 福喜 昌美 一明 武本 野内 田間 口藤 孝英 稔 泰久 史</p>	<p>半 宝生 英雄 高安 滋郎 吉田 定男 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛</p>	<p>小 鍛 冶 菊池 重輝 西村 欽也 高安 勝久 山 寛 口 敏一 小沢 英三 小川 芳清 井 佐 大谷 六郎 井 戸 長次郎 和 治 男</p>	<p>巴 熊沢 惠美子 高安 勝久 鬼頭 英二 柳原 富司忠 藤田 昭彦</p>
<p>附祝言 梅 盛 若 猶 門 盛 義 会 会</p>	<p>不見 不 聞 佐藤 友彦 大野 弘之 井上 松次郎</p>	<p>天 班 敦 雛 羽 衣 波 盛 山 並 藍 彦 石田 龜 太郎 井 戸 和 男</p>	<p>盛門会能 七月三日(土) 午後一時始 熱田神宮 能楽殿</p>

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」



父はいつも一若者になって例の長刀をもつて出ますが「長刀の先を飛んで見よ」と申します。父の相手をすると、はもうこちらがへとへとになって、最後の元氣を出して斬り合ったことを覚えておきます。

「鳥帽子折」でもう一つお話ししておきますが、あの長髪べしみの面と長髪頭巾ですね、あの二つは糸でとおして、面組は二本つけ上を少し上へ締め、下の方を下に引、倒れた時一本がひびきで切れて大丈夫のようにしておきます。二度も宙をえりたり、仏倒れをしたりするのであふないのですが、こんな難わざは若いものにあんまり要求しません。

お話を「夜討」に戻りますが、後では古屋五郎と五郎丸とどちの役が重いか、ということをよく聞かれますが、大体は同格なのです。シテとツレ組んだりするだけに五郎丸の方が役がよいといえましょう。五郎丸はシテの後ろに廻った時、被衣の水衣をハネて大きく飛んで音をさせますが、これが「サア行くぞ」という合図になる訳です。そうでないと不意に組まれましたらシテの形が崩れる心配があるからです。「くるなッ」と思っただけで、全身で用意して、すどんすどん力一杯に組みつかれても、ビクともしないのです。

組みついたら右の膝にシテを腰かけさせようにしてやりやりますと「わだがみつかんで」と廻るのがやりやすく、脇腹の方へ向いてシテが前へ投げた型をすることになるので、だから余り背丈等が違っておかしいので、やはり役をきめる時には同じ位の背丈の人同士にしないといけません。細をかけるのは何でもないようになかなかむつかしいので、呼吸が大切であります。シテはしばられて覚悟しているのですから、しばったということがわかるようにかけなくてはなりません。そして右の人はシテの右の帯をにぎり、右の手首をとります。左はその反対にし、五郎丸は真中から抑えること

「正尊」もこれと同じであります。遊うのは弁慶が押してくる流儀と、おさなりの流儀があるのですが、シテとしてはやはり押してもらった方がやりやすいですね。斬組の型は別にきまったものはありません。父のことは前に申しましたが、叔父の清も身が軽くなかなか上手でした。私も興之丞も余りいたしません。そんな役があったります。

「稽古をしておけ」といつかありますので仕方なく布団の上でやってみるのですが、やはり舞台でないといけません。一畳台から「土蜘蛛」等ですが、あれは角でおてを打つかと心配しましたが、やれば矢張り出来た。自慢する際うまいんじやありませんよ。

仏倒れ、これは朽木倒れともいいますが立てていながら朽木が倒れるようにするあれですね。蒲団を何枚も厚くして、それだけ倒れてゆき、段々その蒲団をへらしてゆきます。しまいは板の間に直(じか)に頭があたりますが痛くはありません。

「あんなにそり返ってはいけません」といふ人もありますが、そる方がよいと万三郎兄が教えてくれました。余りそらずに首を前に出していますと舞台の板で肩をうった時反動で頭をいやという程うって、悪くすると脳しんとうを起したりするところがあります。

私も一度見たことがあります。誰が舞った時か覚えてはいませんが、ものは「忠信」でした。近頃余り出ないのでお馴染みはないでしょうが、義経を落した後、追手をひ

「新能」記念パンフレット発行に当たって

「名古屋新能」はことし第十一回を迎え本紙の面演能案内のとおり、きたる八月七日(土)熱田神宮で開演されます。

この「新能」は市民納涼能楽の夕べとして、昭和四十一年から催され、夏を彩る名古屋の一大行事として市民はもとより広く中部地区に関心をもたれています。

名古屋新能が各界の暖かいご支援のもとに、満十年を閉じたことを記念し、さらに新能を通じ、格調高い古典芸能により広く

之型(シテ観世元正、ツレ大観文、藏、ツキ山崎俊輔、地謡上田照也ほか)能「紅葉狩」小書鬼揃(シテ梅若六郎、ワキ宝生一)喜多流能「融」小書思出之出・今合返・狂言「清水」(茂山忠三郎、目下曲水之舞)シテ友枝喜久次、ワキ「部族」後六時三十分開演

取扱所 朝日新聞名古屋本社企画部 電話八二一三〇
中区橋下丁目七十五 井上芳 電話一四三三〇
各出演者氏名 各百貨店プレイガイド

狂言共同社

昭和五十一年度(第二回)

名古屋観世九臈会定例能

七月二十四日(土)午後一時始

熱田神宮 能楽殿

指定期 一、五〇〇円
普通席 八〇〇円
階上席 一、〇〇〇円

取扱所 朝日新聞名古屋本社企画部 電話八二一三〇
中区橋下丁目七十五 井上芳 電話一四三三〇
各出演者氏名 各百貨店プレイガイド

第十一回名古屋新能

八月七日(土)午後五時半始

(雨天順延)

熱田神宮 能楽殿前

観 能 組

龍 虎 佐々木勝郎 吉田 定男 助川 竜夫
龍 世 喜之 福井 良久 鬼頭 季信

薩摩守 野村又三郎 井上松次郎 佐藤 友彦

千手 西村 敏也 河村総一郎 藤田六郎兵衛
観世 武雄 福井啓次郎

花月 高安 澄郎 河村総一郎 藤田 昭彦
高木美智子 橋原富司忠 藤田 昭彦

観 能 組

龍 虎 佐々木勝郎 吉田 定男 助川 竜夫
龍 世 喜之 福井 良久 鬼頭 季信

薩摩守 野村又三郎 井上松次郎 佐藤 友彦

千手 西村 敏也 河村総一郎 藤田六郎兵衛
観世 武雄 福井啓次郎

花月 高安 澄郎 河村総一郎 藤田 昭彦
高木美智子 橋原富司忠 藤田 昭彦

付祝言

主催 麦の徹二会

観世流 久田 秀雄 地謡 須部 末吉
宝生流 衣田 正宜 須部 末吉
喜多流 長田 正宜 須部 末吉

(親)玉之段 久田 秀雄 地謡

(春)松 虫キリ 前田 茂徳 地謡

内藤 泰二 鬼頭 喜太郎 鬼頭 三男

高橋 滋郎 柳原富司忠 寛 三男

白頭 飯富 雅介 友彦

後見 竹内 澄子 地謡 加藤 勝利 吉田 俊彦
後見 玉井 博祐 地謡 加藤 勝利 吉田 俊彦
鬼頭 喜太郎 長谷 晴男

御挨拶 名古屋市長 本山 政雄

火入式 熱田神宮権宮司 長谷 晴男

観 能 組

龍 虎 佐々木勝郎 吉田 定男 助川 竜夫
龍 世 喜之 福井 良久 鬼頭 季信

薩摩守 野村又三郎 井上松次郎 佐藤 友彦

千手 西村 敏也 河村総一郎 藤田六郎兵衛
観世 武雄 福井啓次郎

花月 高安 澄郎 河村総一郎 藤田 昭彦
高木美智子 橋原富司忠 藤田 昭彦

(和)釣 針 野村又三郎

後見 加藤 豊 地謡 蘇田 直輝 大島 政允
後見 松山 明道 地謡 川井 宏 二井 榮逸

観 能 組

龍 虎 佐々木勝郎 吉田 定男 助川 竜夫
龍 世 喜之 福井 良久 鬼頭 季信

薩摩守 野村又三郎 井上松次郎 佐藤 友彦

千手 西村 敏也 河村総一郎 藤田六郎兵衛
観世 武雄 福井啓次郎

花月 高安 澄郎 河村総一郎 藤田 昭彦
高木美智子 橋原富司忠 藤田 昭彦

附祝言

主催 熱田神宮 能楽協会名古屋支部

後見 久田 秀雄 地謡 今村 和男 岡田 光彦
後見 久田 秀雄 地謡 今村 和男 岡田 光彦
後見 久田 秀雄 地謡 今村 和男 岡田 光彦

前売 一、〇〇〇円 当日 一、〇〇〇円

入場券は能楽殿、市内各プレイガイド、出演者楽師宅

桂 会

二十周年記念囃子会

七月十日(土) 七月十一日(日)
於 岐阜公園・萬松館

桂会(幸清流小鼓方・後藤孝一郎師)で
はきたる七月十日(土)十一日(日)の二
日間、岐阜公園・萬松館で二十周年記念
囃子会を開催する。初日の十日は舞囃子
一調、独調、連吟など五十六番、十一日は
同じく五十八番、東京から幸清流宗家・幸
四次郎師が来演、また東京・水戸から一門
が来演するとともにシテ方各流、囃子方の
出演で盛會が期待される。

七月十日(土)「初日」午前九時始

(宝)翁 辰巳 孝
内藤 泰二
三嶋春代子

【囃子】「高砂」中村和男、小鼓加藤芳康
【連調】「瓶」梅田邦久、小鼓後藤早波、
後藤越子、亀山喜美子、後藤光子、水
野悦子

【囃子】「草子洗小町」(小島一英、小鼓浅
野美恵) (宝)「小般治」(小鼓谷沢
トミ子)「通小町」(水藤元三、小鼓
浅野芳比紗)「船弁慶・前」(今沢美
和、小鼓高田みどり)「経正」(奥瀬孝
子、小鼓大羽紀代)「雲雀山」(塚田
ひさ、小鼓渡辺富美)「胡蝶」(玉井
博祐、小鼓水野美代子)「女郎花」
(半田智子、小鼓富田富美)「笠之段」
(杉村竹翠、小鼓赤間とし子) (劇)

【草紙洗】(石井要子、小鼓武藤常世)
【宝】「小督」(瀧美みさ枝、小鼓瀧
美公美乃) (観)「松風」(沢田春子、
小鼓安岡昌子)「班女」(近藤とき子
小鼓安田絹子) (劇)「経正」(長尾
博美、小鼓吉田瑞子)「養老」(関谷
薫、小鼓鷲坂信子)「春栄」(安藤勝
朗、小鼓坂野儀子)「鞍馬天狗」(小鼓
後藤孝江)「右近」(村中恵美子、小鼓
鈴木道代) (劇)「龍田」(川出福美
子、小鼓河井隆子) (宝)「松上」(葛
原正枝、小鼓戸田和)「乱」(梅田邦久
小鼓村瀬恒史)「高城」(鈴木篤一郎

の友社
本社 2-20
支店 464
電話 7984
736393
500円
800円
50円

熱田神宮祭奉納能

6月5日 能楽協会名古屋支部主催
田秀雄氏 追善会
5月5日 熱田神宮祭

小鼓 白井保子)「鞍馬天狗」(三浦
照代、小鼓岸本孝)「西王母」(三
浦律子、小鼓伊藤恵美) (劇)
【松虫】(石橋もと子、小鼓長尾博美)
【吉野天人】(熊沢百代、小鼓川辺瑞代)
【盛久】(坂野富子、小鼓山村幸子)
【鶴亀】(大塚鈴枝、小鼓藤田正蔵)
【劇】「自然居士」(小鼓佐久間雪子)
【山姥】(岡田朗秋、小鼓沢田春子)
【野守】(下田雄三、小鼓佐野博子)
【船弁慶・前後ノ替】(小鼓藤正利)
【狸々】(白井保子、小鼓鈴木篤一郎)
【次郎】
【一調】「勧進帳」(藤田繁三郎、福井啓
次郎)
【独調】「天鼓」(小島一英、山本久子)
【巴】(武田邦弘、八田ふさ)「扇島」
【鈴木一雄、奥瀬孝子】「松虫」(武田
邦弘、八田ふさ)「扇島」(梅田邦久、
日江井俊子)「小般治」(小島一英、井上
万里子)「宗林院」(梅田邦久、三浦敏
治)「狸々」(下田雄三、奥田茂子) 駒
之段(下田雄三、滝千代子)「玉之段」
(鈴木一雄、奥瀬孝子)「清経」(豊嶋
調三、石井要子)「藤戸」(鈴木一雄、
岩田広枝)「藤」(小島一英、安田一夫)
【花月】(武田邦弘、勝野正也)「健坂」
(下田雄三、大前悦信)「弱法師」(岡
田朗秋、島崎玲子)
【連調】「鶴之段」(武田邦弘、小鼓福井房
子、丸山敏子、市川静江、朝岡千代子、
向坂淑子)「綱之段」(朝日文化セン
ター)「後成忠度」(下田雄三、小鼓直
井富士子、西尾薫子)
七月十一日(日)「二日目」午前九時始

鼓佐藤道子)「声刈・五段」(小鼓野口富
美子)「葛城」(小鼓根本真砂)「海士」
(宮島喜代六、小鼓林千穂)「花月」
(小鼓谷山貞子)「草子洗小町」(新妻
恵美子、小鼓戸上恵子)「清経」(東美
内子、小鼓鬼頭一枝)「扇」(渡辺節
子、小鼓武田孝子)「高砂」(松本太郎)
【弱法師】(寺部啓子、小鼓村中恵美子)
【石橋】(小鼓半田智子)「扇丸」(池田
忠三)「山姥」(福間昌作)「羽衣・和
合之舞」(鬼頭貴代子、小鼓西本康敏
太鼓橋本曉子)「玄象・五段」(奥田広
小鼓慎川志やう)「松風」(奥田薫、小
鼓木村晴子)「賀茂」(寺岡佑子、小鼓
伊藤左門)「紅葉舞・急之舞」(鈴木道
代、小鼓三浦照代)「融・五段」(川久
保節子、小鼓天野映子)「那耶・パン
シキ」(佐藤アヤ子、小鼓北洞節子)
【鉢木】(中川良一、小鼓斎藤光裕)
【船弁慶・後】(高田みね子、小鼓堀
場正敏、笛森正利)
【二調】「雅波」(岸内貞博、幸四次郎)
【笠之段】(鈴木一雄、鏡見静子)
【独調】「竹生鳥」(小島一英、鬼頭妙)「玉
扇」(岡田朗秋、早野薫夫)「嵐山」
(久田敏二、安藤秀博)「清経」(小
島一英、加々美綾子)
【可八幡】(小島一英、袖村栄)「阿漕」
(久田敏二、桐井君子)「智茂」(久田
敏二、熊崎新七)「松風」(鈴木一雄、
後藤俊子)「玉之段」(和谷亀三郎、和
谷衛市、浜口幸成)「浮舟」(寺岡佑子
武川淳子)「数盛・キリ」(小島一英、
野村千代子)「経正」(水藤元三、池田忠
三)「飛鳥川」(和谷亀三郎、和谷衛市、
岡田みね)「橋弁慶」(小島一英、依田
康平)「駒之段」(和谷亀三郎、和谷衛
市、稲葉雄次郎)「葵上」(久田敏二、
中島多喜子)「田村・キリ」(鈴木一雄、
牧野守雄)「善知鳥」(久田敏二、原すず)
【連調】「数盛・クセ」(岡田朗秋、小鼓長
瀬妙子、大沢宜子、三島恵那子)「鶴之
段」(鼓早女子短大)「東北」(寺岡佑子、
熊沢恵美子、今沢美和、酒井平太郎、
蔵員勝子、杉浦芳枝ほか)

各地だより

山本定期能

山本定期能の六月公演
は、六月十二日、大阪・
大 山本能楽堂で開催。
能「賀茂」(シテ波多野晋、前ツ
レ吉山有、後ツ山本章博、ワキ
指吸雅之助、能「陽貴妃」(シテ
八木康夫、ワキ岡治郎右衛門)狂
言「口真似」(浅山千之丞ほか)
能「善知鳥」(シテ山本勝一、
ワレ松浦信一郎、子方千崎亨、ワ
キ岡治郎右衛門、笛左鴻雅義、小
鼓大倉長十郎、大鼓山本敏一郎、
関茂山千之丞)

山本定期能本年 度下半期演能

◎七月四日(日)
(巻)俊克 波多野 敬
盛久 矢野 一馬
水無月 千崎 隆一
鉄輪 山本 真義
◎九月五日(日)
小袖曾我 山本 章博
浮舟 山本 真義
殺生石 松浦信一郎

十一月六日(土)

松山 栗岡 正義
松山 波多野 晋
松山 山本 真義
松山 山本 勝一
鍾 山本 勝一
松山 山本 勝一

十二月十二日(日)

松山 山本 康夫
松山 山本 順之
松山 和辻 一行
松山 宇治田正子
松山 宇治田正子

お申込みについて

本紙では、恒例の暑中御伺廣告
を七月号、八月号に掲載させて頂
きますのでご案内申し上げます。
申込先 能楽の友社

住所変更

金剛流師範・水谷泰典氏
新住所 名古屋市中区上野町五
丁目六番地、電話(七二二)三三
四七番 (〒464)

富士道の婚礼道具

あなたに心をこめておくりする……

家具の富士道

本社 名古屋市中区栄3丁目35番18号
TEL 代表 (262) 5547
愛知県西加茂郡三好町 TEL (05613) 2-1178

檜書店

千 101 東京都千代田区神田小川町2-1
千 604 京都市中京区二条通鉄屋町東入

電話 (291) 2486-9
振替東京 3-3 552
電話 (231) 1990
振替京 113

中華料理 桃源亭

御宴会・御集會・御商談等には
是非御座敷を御利用下さい

中區栄三丁目29(松坂屋南) 電話 241-2938・6081
支店 名鉄百貨店9階 のれん茶屋

昭和五十一年度(初回)

名古屋観世九皇會定式能

演能案内

大倉七左衛門氏
大倉流大鼓方・大倉七左衛門氏
は、さる四月二十三日、大船中央
病院で逝去。享年七十七。
氏は旧尾張藩徳川家御能役者大
鼓役十四代大倉七左衛門の次男。
日本能楽会会員。
昨年、熱田神宮祭奉納能二十周年
にあたり祝辞を寄せて頂いた。
謹んでご冥福をお祈り致します。

熱田神宮祭奉納能

五月二十二日(土)午前十時始
熱田神宮能楽殿

名古屋鉄道株式会社

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区吹上本町2-20

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 36393

購読料 1年 500円

郵送の場合 1年 800円

一 部 50円

題字は熱田神宮 藤田富司筆

第11回名古屋薪能

能小鍛冶・羽衣
猩々乱・狂言釣針ほか



八月七日(土)午後五時三十分
於 熱田神宮神楽殿前
前売(1,000円当日1,200円)
市内各プレイガイド出演者各楽師宅
にて発売中
主催 熱田神宮・中部能楽師会

第14回「北陸中日能」

9月19日 金沢市観光会館

重要無形文化財第十四回「北陸中日能」は、北陸中日新聞、石川テレビ放送主催、文化庁の後援で、きたる九月十九日、金沢市観光会館で開催される。

欧州親善演能団帰国

仏、ドイツ、スイスで公演

フランスのニース市長の招きにこたえて、姉妹都市である神戸市上田照也師一門に、大槻秀夫師をはじめワキ方、稚子方、狂言方による渡欧能楽団一行とその社中など愛好者を迎えて総勢百有余名の訪欧親善演能は六月五日出発、ニースをはじめカンヌ、マルセイユ、ツール、モナコ、パゼル、ベルリン、ハンブルグ、フランクフルトの各地で公演、文化交流に大きな役割を果たした。

上演曲目は「半部」「土蜘蛛」(A)「乱・双之舞」「鉄輪」(B)「狂言」「瓜盛人」「神鳴」など。

第11回名古屋薪能

8月7日 熱田神宮神苑で

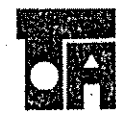
初歩から能面の打ち方を懇切に解説した絶好の入門書である。第一章序論・能の面、能の歴史と美、面打ち師の系譜、名人と名作
第二章準備篇、面打ちの心構え
既報のとおり、八月七日(土)午後五時三十分から、熱田神宮境内・特設舞台で行なわれる。
主催は熱田神宮、中部能楽師会、後援名古屋市、能楽協会名古屋支部。
能三番、狂言舞子各一番、仕舞五番、シテ方五流、和泉流など地元能楽師の総出演、火入れ式は、午後七時ごろ熱田神宮長谷晴男権宮司により行なわれる。
なお「名古屋薪能」にちなみ、今回は、記念パンフレットが刊行される。(番組②面掲載)
〔写真は新能ホスター〕

勸進帳・滝流之伝(シテ観世元昭 岡山に角寛次郎、久田徹二、佐藤太俊ほか、子方山中貴博、ワキ江崎金治郎、地謡上田照也ほか)
宝生流能「井筒」小書物著(シテ宝生英雄、ワキ江崎金治郎、今向返、遊曲(シテ松本恵雄、ワキ指吸雅之助、笛片岡吉雄、小鼓住駒扇介、大鼓植原崇志、太鼓三島太郎、地謡武田喜永ほか)
狂言「磁石」(山本東次郎、山本則直、杉浦茂)
宝生流仕舞七番、観世流仕舞二番。
正午開演、特別席四、八〇〇円
A席四、五〇〇円、B席三、五〇〇円
〇円いずれも指定席、C席(自由席)一、五〇〇円。
(取島記)

暑中御伺い申し上げます
社団法人 名古屋能楽会
熱田神宮能楽殿
暑中御伺い申し上げます
熱田神宮 宮司 篠田康雄
権宮司 長谷晴男

伝説芸能懇話会代表幹事
B5・二〇八頁・定価三、八〇〇円(千二百〇円)
発行株式会社日貿出版社(東京都千代田区猿樂町一十二、新日貿ビル)
十周年記念の紙の特集に祝辞を頂

観世元正 東京都渋谷区恵比寿南 一―二十一―十四	梅若六郎 景英	井上嘉久 京都市北区紫野下鳥田町六	鏡仙会 観世鏡之丞 観世寿夫 観世静夫	財団法人能楽会 梅若三郎 梅若紀夫 梅若晴	名古屋観世九皇会 観世喜之 観世武雄	増田一雄 塚本秀雄 有賀滋子 長谷川章 加藤保彦 青木武弘 高木美智子 吉田妙子 野垣慶子	大阪能楽会館 大西信久 大西智久	名古屋橋岡会 名古屋市中区九屋町五ノ三 山田紀子方	藤井久雄 徳久三雄 完楽人治	大槻清韻会 大槻秀夫 大槻文藏	大阪市東区上町二番地	山本観衛会 山本勝一 〒662 西宮市南郷町五十二	上田観正会能楽堂 社団法人観正会 上田照也	幽花会 片山慶次郎 〒603 京都市北区小山下花ノ木町二一 電話 四九二一五三〇二番	財団法人鎌倉能舞台 中森品三 中森貫太	〒248 鎌倉市長谷三十一―五―十三 電話(〇四六七)⑤五五五七	名古屋修諷会 梅若修一	一謡会 河村鉦二 叶石会 河村総一郎 名古屋市中区和区前山町 一丁目二三(〒466) 電話(七六二)四八八二	毎日婦人文化センター 謡曲教室 風韻会 殿島修二	名古屋淡交会 橋岡久共
--------------------------------	------------	----------------------	------------------------------	--------------------------------	--------------------------	---	------------------------	---------------------------------	----------------------	-----------------------	------------	---------------------------------	-----------------------------	---	---------------------------	-------------------------------------	----------------	--	-----------------------------------	----------------



演能 (熱田)

7月] 7日(土) 妻の... 24日(土) 観世九皇

8月] 7日(土) 第11回名... 8日(日) 宝生流... 15日(日) 素流と... 22日(日) 和泉流... 29日(日) 長...

9月] 5日(日) 大... 12日(日) 観世会... 15日(祝) 観世九皇... 18日(土) 観世九皇... 23日(祝) 宝生会... 26日(日) 淡...

10月] 3日(日) 九皇会... 10日(日) 修羅会... 16日(土) やるま... 17日(日) 猶惠会... 24日(日) 青陽会... 29日(金) 中日文化... 30日(土) 宝... 31日(日) 竹韻会...

(演能変更の...)

田神宮能楽殿で、観世流能「田村... (久田徹二)宝生流能「東北」(衣... 斐正宜)喜多流能「鞍馬天狗」(長... 田鶴)の三番を上演。

昭和五十一年度(第二回) 名古屋観世九皇会定例能

七月二十四日(土)午後一時始

熱田 神宮能楽殿

能千手 西村 欽也 河村総一郎 藤田六郎兵衛
福井啓次郎 藤田六郎兵衛

狂言 薩摩守 野村又三郎 井上松次郎
佐藤 友彦

舞獅子 龍 虎 佐々木勝雄 吉田 定男 助川 竜夫
観世 喜之 福井 良久 鬼頭 季信

高木美智子 河村総一郎 藤田 昭彦
高安 滋郎 御原富司志

附祝言 名古屋市南区元塩町一、一七(加藤保彦方)
主催事務所 名古屋観世九皇会
電話(八三三)六一一三六五九番
会員券申込みは各出演諸師又は当会事務所

第十一回名古屋新能

八月七日(土)午後五時半始

(雨天順延)

熱田 神宮能楽殿前

能花月 高安 滋郎 河村総一郎 藤田 昭彦
佐藤 秀雄

附祝言 名古屋市南区元塩町一、一七(加藤保彦方)
主催事務所 名古屋観世九皇会
電話(八三三)六一一三六五九番
会員券申込みは各出演諸師又は当会事務所

(観) 竹生島 百々 康治 後藤孝一郎 池田 季信
地謡 日比野圭昭 鬼頭 季信
菊川 恵三 豊野 三郎 水谷 泰典

仕舞 熱田 神宮能楽殿前

(観) 経 正キリ 前野 郁子 今沢 美和
熊沢 恵子 吉田 美子 熊沢 恵子 吉田 美子

(観) 笠之段 小島 一英 地謡 加藤 武生 河村 藤三 清水 藤三 水谷 泰典

(観) 玉之段 久田 秀雄 地謡 高橋 藤三郎 須藤 邦末 須藤 邦末

(春) 松 虫 前田 茂雄 地謡 塚本 光正 林本 光正 後藤 藤三郎 高橋 藤三郎

能小鍛冶 内藤 泰二 飯富 雅介 鬼頭 喜太郎 鬼頭 喜太郎

7月・8月放送予定

NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分)

(7月) 18日(日) 観世流「水無月」梅若泰之ほか
25日(日) 金春流「女郎花」今井幾三ほか
(オリンピック中継のため変更になることがあります)

(8月) 1日(日) オリンピック中継でお休み
8日(日) 観世流「清経」橋岡久共ほか
15日(日) 観世流「夜討」金井章ほか
22日(日) 観世流「玄象」大西信久ほか
29日(日) 喜多流「雨月」友枝喜久夫ほか

NHK・FM (毎週日曜日午前7時15分)

(7月) 18日(日) 宝生流「夜討」金井章ほか
25日(日) 観世流「天鼓」上田照也ほか

(8月) 1日(日) 観世流「融」武田太加志ほか
8日(日) 喜多流「雨月」友枝喜久夫ほか
15日(日) 観世流「井筒」観世元正ほか
22日(日) 金春流「女郎花」今井幾三ほか
29日(日) 宝生流「鱗丸」近藤 礼ほか

番組変更の際はご了承下さい。

森好会 東京都渋谷区代々木四一三八一二 森 茂 好	麦の会 久田 徹二 衣斐 正宜 長田 驍	喜多山本才 名古屋市中区区南二丁目二二三 電話(782)二二九二番	岡村保道 三重県度会郡玉城町田丸三五五	二井栄逸 松阪市内五曲町八八 電話(五九八)二二一〇二一六	喜多実 東京都練馬区中村南一ノ二九ノ二一	和谷亀二郎 伊勢市中島2-26-12	竹韻会 杉村 竹翠 名古屋市中区東区藤ヶ丘八三	緑宝会 名古屋市中区東区鳴海町池上16-10 千458 加藤 勝利	高安勝滋 名古屋市中区東区玉水町二ノ六四 電話(八三三)〇三六四番	西村欽也 名古屋市中区東区七所町二ノ四四 電話(八三三)五九一九番	福王茂十郎 大阪市東区平野町一ノ一五 西宮市名次町六ノ二二	福王幸 西宮市名次町六ノ二二	幸祥光 千158 東京都世田谷区等々力五三〇一三 電話(〇三三)七〇四一六九三	幸正影 千141 東京都品川区西五反田八二一〇一八 電話(〇三三)四九二一四八六四番	桂会 岐阜市松屋町 後藤方	小の会 幸宣佳 千838-01 福岡県小郡市小郡一四〇三 電話(八三三)二二八〇七	櫻月会 大倉 長十郎 源 次郎	住駒陽介 電話(〇七六三)五二四〇 電話(〇四八四)五三八九	住駒幸英 電話(〇四八四)五三八九	谷口喜代三 京都市右京区桂町五四一三六	谷口正喜 京都市上京区中立売町西入 室町スカイハイツ六一〇
---------------------------------	-------------------------------	---	------------------------	-------------------------------------	-------------------------	-----------------------	-------------------------------	---	---	---	-------------------------------------	-------------------	---	--	------------------	--	-----------------------	--------------------------------------	----------------------	------------------------	-------------------------------------

演能案内

謡曲観賞会公演

八月十五日(日)午後一時始
熱田 神宮 能楽殿

頼政 鷲尾 周三 橋本 雅夫
花篋 久田 徹二 梅田 邦久
須部 一政 清沢 一政

山姥 深野新次郎 武田 邦弘
枕之段 橋本 雅夫
網之段 鷲尾 周三

夜討曾我

鬼頭 英二 藤田 昭彦
久田 舜一郎

後見 今沢 美和 地謡 本田 和夫 武田 邦弘
鷲尾 周三 加藤 保彦 橋本 雅夫

若手能謡曲観賞会

八月十八日(水)一時始
岐阜公会館
〔素謡〕屋島(シテ浅野宏丞)班
女(シテ鷲尾周三) 泉清(シテ梅田邦久) 道成寺(シテ小野朗) 〔仕舞〕車之段、船之段、鳴子之段

八月十九日(木)一時始
八日市中央公民館
〔素謡〕小袖曾我(十郎・鷲尾周三) 五郎・梅田邦久 井筒(シテ浦部好弘) 碓(シテ小野朗) 道成寺(シテ浅野宏丞) 〔仕舞〕雨之段 笠之段、鼓之段、玉之段
入場料いづれも一、五〇円。

和泉流狂言大会

八月二十二日(日)午後一時始
熱田 神宮 能楽殿
狂言組

芥川 原田 三男 大原紋三郎
昆布 鷲見 政行 佐藤 友彦
雷 堀江 四郎 津田 節哉
花争 今枝 靖雄 今枝 郁雄
魚法 松井 直子 歌村 鴻助
重喜 佐藤 融 中北宇多子
犬山伏 小田 正一 酒井 利夫
棒縛り 林 東助 津田庄三郎
六地蔵 岡崎久太郎 中山 伸一
名取川 井上松次郎 山本 重吉
佐藤 友彦

出版紹介

「能のすずめ」

中森晶三著

玉川大学出版部から中森晶三氏著「能のすずめ」が刊行された。著者は、昭和三年東京生まれ、観世流師範、財団法人鎌倉能舞台常務理事、鎌倉長谷の能舞台を本拠地に、「泉民」のための能を知る会(泉民能)、「鎌倉新能」などを實現。映画「能」で芸術祭奨励賞受賞(昭和四十年)、鎌倉新能・鎌倉能舞台創設で鎌倉市功労者(昭和四十八年)。
能への情熱をこめて、読者に能の味わいをさわめて判りやすく、また著者の鋭い感覚と大きな視野から掘り下げて解説した恰好の著が「能のすずめ」である。現代演劇人たちにとって、能は極めて魅力ある存在になった。つまり能は「アリズム」の弊害を免

能面・能装束展

京都・金剛宗家

金剛宗家による夏の能面・能装束の展覧は、七月二十四日、二十五日の兩日、金剛宗家(京都市中京区室町通四上ル)で行なわれる。午前九時午後五時。入場料は六百円、なお解説は一日三回。午前十時、一時、四時の予定。
〔転居〕
大藏弥太郎氏(東京都練馬区関町一四六一一四(一七七) 電話〇三(九二〇)六九六四番 (電話変更)
中村富次氏(伊勢市宮町一四一(一七) (〇五九六) 二四五六、四三三三六
〔地番変更〕
加藤勝利氏(名古屋市緑区鳴海町池上一六一一〇
〔短信〕
山本能楽堂(大阪市東区徳井町一二二〇)は、今夏から浴房を設備。

「九段下より」

佐藤芳彦著

能評家、「宝生流地拍子」などの著者、佐藤芳彦氏は、このほど「九段下より」を出版された。氏は昭和三年わんや書店に入社月刊「宝生」に毎月「九段下より」に執筆した隨筆をまとめ、同氏の古稀の祝の記念に出されたものである。
内容は、昭和四十六年一月から五十年十一月までの「九段下より」を録、著者五十年の能楽関係の執筆を通じて、各会、各組織、先人の遺業が愛感あるタッチと高い見識で描かれており、記録書としても非常に参考になる。
当地に関する隨筆としては、「田鶴太郎師の米寿」(四十六年五月)、「雨の染名(四十六年六月)」「千手の前」(四十七年七月)、「お伊勢参り」(四十八年十月)、「名古屋まで・中日五流能・足助にて・三河八橋にて」など、非売品

能3番上演

8月7日(土) 熱田神宮

演能案内

名古屋宝生会定式能
廿周年記念別会
十七世 KAMINISHI Bunshu

海人

野山頭 大塚十雄 後野村 尚作 横中ノ舞

高安勝久 坂富 雅介 後藤孝一郎 寛三男 大野 弘之

亀井 俊雄	安福 春雄	前川 善雄	長生会 鬼頭 八喜太郎	鬼頭 季信	山本 敬一郎	山本 孝	算 鉦一	吉田 定男	大藏狂言会 彌太 義嗣	三宅 藤九郎	茂山千作	茂山千五郎	名古屋和泉会	狂言共同社	野村 万蔵	助川 竜夫	山口 義郎	山口 亮	狂言やるまい会 野村又三郎	善竹 忠一郎	茂山 忠三郎	熱田神宮能楽殿 仙田 美千子
-------	-------	-------	-------------	-------	--------	------	------	-------	-------------	--------	------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	------	---------------	--------	--------	----------------

東京都豊島区北原一四四一六 電話〇三(九九二〇)六九六四番 電話(六七)三九二二番

みなさまの暮らしとともに
預ける・貯める・払う・借りると1冊4役 2年・1年・6ヶ月・3ヶ月・有期に貯める
[東海]総合口座・[東海]定期預金
東海銀行

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社
名古屋市中千種区吹上本町2-20
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 500円
郵送の場合 1年 800円
一 部 50円

第17回 大衆能

9月5日 能3番上演
愛知文化講堂

能楽協会名古屋支部主催による「大衆能」は、愛知県、名古屋市内朝日新聞社の後援で毎年秋をかねて上演として開催されているが、今回は、さたる九月五日(日)名古屋・栄「愛知文化講堂」で開催される。
番組は、観世流能「鶴亀」(シテ河村延三、ツレ高木美智子、吉田千鶴、二、ツレ高木美智子、吉田千鶴) 当日券千二百円、全館自由席。

第11回 名古屋新能

好天に恵まれ盛会

第十一回名古屋新能は、八月七日午後五時三十分から熱田神宮境内・神楽殿前特設舞台で盛大に開催された。
当日は、台風発生の影響で早朝には激しい降雨があったが、午後から絶好の快晴に恵まれ、緑蔭の会場に観客が詰めかけた。
午後五時半金剛流舞臺子「竹生鳥」ではじまり、宝生流能「小鍛治」について、名古屋市長代理矢橋収入役は「十一回を迎えた新能」

演能カレンダー (熱田神宮 能楽殿)

[8月]
22日(日) 和泉流狂言大会
29日(日) 長袖会・二井会主催辻田たま教授披露会 (番組②面)

[9月]
5日(日) 大衆能 (番組②面) (愛知文化講堂)
12日(日) 観世会定式能 (番組②面) (有料)
15日(祝) 観世会秋の大会 (来場歓迎)
18日(土) 観世九草会定期能 (有料)
23日(祝) 宝生会定式能 (有料)
26日(日) 淡交会 (来場歓迎)

[10月]
3日(日) 九草会秋の会 (来場歓迎)
10日(日) 修験会秋の会 (来場歓迎)
16日(土) やるまい会公演 (有料)
17日(日) 鶴屋会(仕舞・茶屋の会) (来場歓迎)
24日(日) 青陽会定期能 (有料)
29日(金) 中日文化センター発表会
30日(土) 宝英会 (来場歓迎)
31日(日) 竹韻会秋季大会 (来場歓迎)

[11月]
3日(祝) 幸友会秋の会 (来場歓迎)
6日(土) 梅若盛義後援会 (有料)
7日(日) 邦福会秋の会 (来場歓迎)
14日(日) 観世会定式能 (有料)
20日(土) 一福会・叶石会秋の大会 (来場歓迎)
21日(日) 和泉会狂言会 (有料)
23日(祝) 中部金剛会主催故大塚一二追善能
28日(日) 宝生会定式能 (有料)
(演能変更の節はご了解下さい。)

世阿弥座 欧州公演

観世寿夫氏を団長、野村万之丞氏を副団長とする世阿弥座一行は、

一行の公演予定地はパリ、ゲント、ブラッセル、コペンハーゲン、ストックホルムの各地で二十七回公演。演能曲目は、能「鷹姫」「天鼓」「碁」「葉上」「狂言「船渡」「数相撲」「泉山伏」「椿姫」

一行の主な出演者は、観世寿夫、観世栄夫、観世静夫、野村万之丞、野村万之介、宝生剛、北村治、亀井忠雄、一噌幸政、三島元太郎、奥善助、浅見貞州、山本順之、名古屋から野村又三郎(順不同)の諸氏。帰国は十月九日の予定。

京都観世会館舞台改修
京都観世会館は七月十二日より舞台の張り替えと防火設備を施し八月二十日完工の予定。

京都

広田後援会能
9月5日金剛能楽堂で
広田後援会の本年度秋季公演は九月五日(日)京都・金剛能楽堂で開催する。
能「江口」(シテ広田隆一、ワキ岡治郎右衛門、笛森田光春、大鼓曾和博朗、小鼓谷口正喜、間・茂山千五郎、地謡今井三郎ほか)
能「野守」(シテ広田隆一、ワキ西本平三郎、笛杉吉次、大鼓竹村英雄、小鼓井林清一、太鼓小寺俊三、間・佐々木常雄、地謡今井三郎ほか)

大阪

橋岡久馬師の「山姥」
大阪能楽観賞会9月公演
大阪能楽観賞会の9月公演は九月二十一日、大阪能楽会館(大阪北区道本町二)で橋岡久馬師の「山姥」白頭・長杖の伝を公演する。
午後六時始、入場料A席(正面)三千円、B席(ワキ正)二千円、学生(二階)千円。
番組、能「山姥」(シテ橋岡久馬、ツレ大江将重、ワキ福土輝幸、間・善竹忠一郎、笛貞光義次、小鼓大倉長十郎、大鼓河村総一郎、太鼓三島太郎、地謡藤井久雄ほか)
狂言「佐渡狸」(善竹幸夫、善竹忠重、茂山忠三郎) 仕舞「小袖曾我」(大西智久、藤井徳三)
「班女」(大江又三郎) 「天鼓」(橋岡久馬) 「碁之段」(藤井久雄)

<p>久田 正会 久田 秀雄</p> <p>東京都世田谷区三軒茶屋二一〇一三二 電話(〇三)四二二二六三七番</p>	<p>武田 詠楽会 武田 小 兵 衛 武田 欣 司 武田 邦 弘</p> <p>誠交会 奥 善 助</p>	<p>大江 又 三 郎</p> <p>京都市東山区本町三三六 電話〇七五(五六)〇六二二番</p>	<p>梅 猶 会 梅 若 盛 義</p> <p>観 世 元 昭</p>	<p>中日文化センター特別教室 観 昭 会 昭 門 会 観 世 元 昭</p>	<p>幽 謡 会 片 山 博 太 郎</p>	<p>名古屋観世会</p> <p>井 戸 和 男</p> <p>井 戸 良 造</p> <p>大 阪 市 阿 倍 野 区 文 の 里 4-24-17</p>	<p>壺 泉 会 泉 嘉 夫</p> <p>名 古 屋 市 昭 和 区 山 里 町 一〇三 電 話 八 三 二 一 三 一 八 五 西 宮 市 甲 陽 園 目 神 山 町 一 七 八 電 話 八 〇 七 九 八 V 〇 二 四 五 八</p>	<p>大 垣 浦 声 会 浦 田 保 利</p> <p>福 古 場 大 垣 市 竹 島 町 善 念 寺 住 所 京 都 市 左 京 区 下 鴨 芝 本 町 五 八</p>	<p>謡 韻 会 里 井 順 次 郎</p> <p>堺 市 湊 寺 公 園 三 〇 二 一 八</p>	<p>水 雲 会 水 藤 元 三</p>	<p>田 村 正 諷 会 田 村 正 諷 会 大 阪 市 東 住 吉 区 東 露 合 町 一 一 五 七 電 話 大 阪 (七 〇 五) 二 四 〇 〇 番</p>	<p>徳 島 正 韻 会 徳 島 市 吉 野 本 町 四 三 三 谷 内 電 話 徳 島 (五 二) 四 七 四 四 番</p>	<p>松 韻 会 佐 藤 太 俊</p> <p>名 古 屋 市 名 東 区 上 社 二 丁 目 三 七 一 〇 二 電 話 (七 七 二) 四 七 四 六</p>	<p>犬 飼 末 吉</p> <p>名 古 屋 市 中 川 区 柳 瀬 町 二 一 四 〇</p>	<p>蛸 雪 会 後 藤 契 雲</p> <p>名 古 屋 市 中 区 栄 三 一 三 一 一 〇</p>
--	---	---	---	---	----------------------------	--	---	---	---	--------------------------	--	--	---	---	---

「狸々乱」の四番。
指導者多流長田、二井榮造の両師。

喜楽会(中尾和子社中) 十月十一日(月)津で秋の会、舞臺子藤田など。

など、秋の本留路に更張る旅です。

寝覚の床、霊麻御宿の景観とも秋の一日に、同好の方々おきそい合わせのうえご参加下さい。

日 時 十一月三日(祝・文化の日) 名古屋市千種区吹上本町二二〇(大衆能) 電話(731)7984

主催 能楽の友社

（なお席順は原則としてお申込順に前より指定いたしますが、ご年配の方は優先席とすることがありますのでこの点ご理解下さい。）

生きた調整ノガネ調整は視力測定・アップの充実を心かノガネ一本にノガネ本店のご責任感とたえノガネをい

◎駐車場完備

能紀行

能面が甦える時

絵と文 二井栄逸

能面は、つくる「かか」彫る「か」とは云わない。面を打つ、という。魂をたゞき込む、心を打ち込むという制作態度が自然そのような言葉を生み出していったのである。

能面には、本面(ほんめん)と写(うつし)とがある。本面というは五流宗家が各々祖先より伝承する古面、旧幕時代には「書上げ」といって、代々幕府にその所蔵を寄附したもので、現代では重要美術品に指定されている。これは皆、足利時代前後に制作された古作ばかりで、その作家の創作面であることが必須条件なのである。明治年間以後は昔の作品を模倣するような名作は殆ど出ず、横作に終始している。いわゆる横作に始まり横作に終る、あくまで本面の型を忠実に追うというところが面打師の芸術的能度だといいたいだろう。それは、能そのものがきめられた型を忠実に伝承するということが同じである。能も能面

も完成されていて、型の創作の餘地が極端にせまられているともいえる。それだけに内面的に掘り下げられ、ますます奥深く入り込んだものとなってゆくのである。そのようにして能面は時代を越え、現代を、未来を生きつづけるであろう。そして、すぐれた作者の手から魂を打ちこまれた能面は又、すぐれた能楽師によって、それぞれの芸術を打ちこまれ年輪を深めてゆく。面と演者の肉体が一つになった時、能面は血が通ったように甦える。笑みをたゞえ、或は怒りを表わし、或は青白い執念をたゞらせ、決して無表情ではなくなるのである。



八月、丘の上の葉桜はみな一斉に葉裏をかえして朝風にそよそよとなびく。爽かで健康な夏。蜜草が空色の絨織を敷いたようにびっしりと咲いた小川のほとりにも夏でなければ見られない爽かさが一

ばい。日本の四季は美しい、と、外国の人達がよくいうが、春夏秋冬のうつり変りはまったく素晴らしい。このように自然に恵まれて育ってきた能に四季のうつりかわりがたくみに折り込まれているのは当然の事であろう。

さて、能面の大きさのことであるが、能面の基準寸法は、出目家に伝わる能面の面型が基本になるようである。出目家というのは、桃山時代に確立された能面師の家元のようなもので、越前出目家、本家出目家、大野出目家、弟子出目家の四家があり、そのうち、越前出目家が最も古く雅祥した面打ちの家である。

能面の大ききの基準をどの面におくかという点、それは女面、基準寸法は小面となつてゐる。小面の寸法は、曲尺で縦七寸、横四寸五分、奥行二寸三分である。他の女面、増、曲見、若女、孫次郎等は、それ／＼に横巾や奥行に多少の違いがあるが、縦の寸法は七寸になつてゐる。能面師の鈴木慶雲氏は、この七寸の割出しを次のように考へてゐる。

日本人の平均身長が五尺三寸とすれば、舞台のシテの身長に面のすれ(面は素顔より一寸ばかり上にすらすらつける)の一寸をプラスした五尺四寸を八等分した、七寸を女面の基準寸法にしたものと思へる。室町期の能面作家の美雪が、はからずも現代流行の八等身と同じになることは面白い。

私も能面をよくかく。私が面布にかく能面は甦えつた面をわいてゐるので同じ小面でも、夕顔は夕顔でなければならぬし、羽衣は羽衣でなければならぬ。能面という範囲の中に其の曲柄を生かして表現してゆかなければならぬといつねづね思つてゐる。

又、髪物のシテに用いる女面を「三番目掛」ともいうが、流儀の主張によつてかわる面がそれ／＼違ふことも頭に入れておかなければならない。例えば観世流では若女、宝生流では増女、金剛流では孫次郎、金春流では小面など

私に飛込んでからの順序は、先ずすのこで天井には布團がつけてあります。鏡の中には團が四つ、前後の二つは少し高く、左右のは低く折り返し一ぱいの所に團があつて、それぞれにシテに必要なもの

さて、鏡に飛込んでからの順序は、先ずすのこで天井には布團がつけてあります。鏡の中には團が四つ、前後の二つは少し高く、左右のは低く折り返し一ぱいの所に團があつて、それぞれにシテに必要なもの

喜多長世師ら来演 辻田たま教授披露大会 八月二十九日(日) 熱田神宮 能楽殿

富士太鼓 西村 敏也 河村 純一郎 見 三男 井上松次郎 川井 克彦 富田 陽二 藤田 直輝 大島 政允 山本 才二 大島 久見 二井 栄逸

道成寺 辻田 たま 二井 栄逸 大島 政允 加 波 高林白平口二 大島 政允 難 波 高林白平口二 大島 政允

第一節 喜多長世師ら来演 第二節 辻田たま教授披露大会

二井会により、素謡「半部」「通小町」「野宮」「融」舞獅子「西玉母」「鱗形」独調、仕舞十数番で披露を祝い、ひきつづき二時から第二部を開催する。この第二部には、喜多長世師が来名、小鼓方・山口亮師により一調「笠之段」を所演。第二部の番組は次のとおり。

名古屋清光会 岡田 光 絃	幸謡会 近 藤 幸 江	近 藤 乾 三 助	竹 腰 勝 一	吉 田 俊 彦	金 春 欣 三	林 鉄 郎	中部金春会 前田 茂 穂 米本 平 一	喜多流謡曲研精会 貫周 福岡 周 斎	朝日文化センター 雛子 教 室 笛 笥 三 男 小鼓 後藤 孝 一郎	宝 生 弥 一 東京都練馬区小竹町一五〇 電話〇三(九五五)四七九五番	豊 嶋 十 郎 〒二七二 松戸市下矢切五五 電話(〇四七三) 一九八二	京都高安会 岡 治郎 右衛門	高安同志会 飯 富 良 人 熊本市黒髪二丁目六ノ二九	山 崎 俊 輔 大牟田市馬場町五七	杉 市 太 郎 和	幸 友 会 福 井 啓 次 郎 福 井 良 久 柳 原 富 司 忠	ウシマド写真工房
------------------	-------------	-----------	---------	---------	---------	-------	---------------------------	-----------------------	---	---	---	-------------------	----------------------------------	----------------------	--------------	--	----------

和泉流狂言大会 八月二十二日(日)午後一時始 熱田神宮 能楽殿

狂言「芥川」「昆布売」「雷」「花争」「魚説法」「重喜」「大山伏」「棒術」「六地蔵」番外「名取川」(入場無料) 附祝言 後見 吉田 俊彦 正宜 地謡 高田 真六 鈴木 義久 加藤 勝利 辰巳 孝 竹腰 勝一 鬼頭 嘉二 男 (終了予定五時)

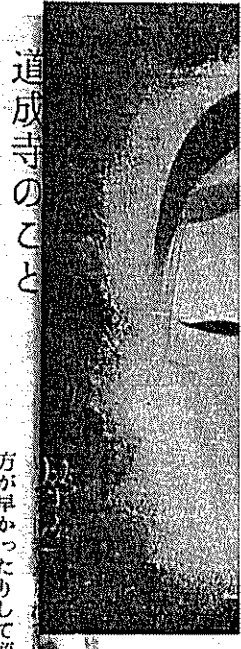
え

道成寺のこと 「道成寺」を若い間にやるのは体力が衰えているからだと重労働になるか

和泉流狂言大会 八月二十二日(日)午後一時始 熱田神宮 能楽殿 附祝言 後見 吉田 俊彦 正宜 地謡 高田 真六 鈴木 義久 加藤 勝利 辰巳 孝 竹腰 勝一 鬼頭 嘉二 男 (終了予定五時)

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」



又、髪物のシテに用いる女面を「三番目掛」ともいうが、流儀の主眼によってかける面がそれく違ふことも頭に入れておかなければならない。例をば観世流では若女、宝生流では増友、金剛流では...

「道成寺」を若い間にやるのは体力が衰えるから、年がいったからだと重労働になるからです。私が初演したのは比較的に遅く二十七の時梅若の父の一周忌で、家柄からいえば非常におおかつたのですが、これはやる人が多く順に遅れたわけで、それだけみっちり稽古を積ませて頂きました。

とにかく見ていられるだけでも大変な能で、シテが体力のいる役だとはわかりませんが、お素人には知れないシテの苦勞がたぐささんあり、又あの鐘も「道成寺」の象徴だけにいろいろと難しい秘事があります。

鐘の高さは凡そ六尺で竹籠のように組みその上を鏡子の布で包みます。この鏡子は普通紺色を用いますが模様入りのものもあります。

内側は下の方に鏡子の折り返しがあつて二枚になり、上からも巾二尺位の布を下げて舞台に近い席からでも中が透いて見えな

方が早かつたりして頭をうつことがありますが、すので天井には布団がつけてあります。鏡の中には團が四つ、前後の二つは少し高く、左右のは低く折り返し一ぱいの所に團があつて、それぞれにシテに必要なもの一切を自分で入れておくことになっていま

す。何しろ鏡の中は薄暗く思わぬ失敗もありますから、正面に赤い布で目じるしをつけてとまどわぬように出来ています。

それから坐つて見える位置に鏡が入っていますが、普通のものでは落ちた時に割れるおそれがありますから金物を磨いた昔の鏡を用い四角な木で枠をして抜くのに便利

なように柄がつけてあります。しかし中には鏡などよく見えるものはありません。團の中には糸と針入れ、鏡、それに氣つけ薬まで用意してあります。鏡鉢(へよう鉢、じゃんじんと鳴らすもの)は重いので低い方の團に入れておきます。又打杖を入れた筒を同じくもう一方に入れますが、高い方には面、般若の面を二面入れます。

これは響で割れたり、角が折れたりした場合に備えるためで、必ずつけるのを即ち替でない方を前の團に入れておきます。

講談などで人に恨を受けていた大夫が、いざ面をつけようとするそれが前に隠されていたのでありません。しかたがないのでとつさに自分の小指を噛み切つて血で隈取りをし後シテをつとめた、など言いますが、先程申しましたようにこれはシテ自身が入れておくものであり、又能楽師は、舞台で血を見せることを戒められております

さて、鏡に飛込んでからの順序は、先ず面をはずし氣を落ち着けて水を飲みます。この水は打杖を入れた筒と一緒に入っているのです。使つたものを下に置きますと忘れてしまつて、鏡が上つた時後に残るということにもなりかねませんから必ず使つたものから元の場所へ戻すことを心掛けねばなりません。

次に髪を乱します。根の巻き込んであるのをひいてピンとしたびんを面の外へ出しますが、このびんの出し方は面のつけ方や人によっていろいろか違つてまいります。私共では前両方と後両方の四ヶ所に出しますが、家元は品良く綺麗にするために面の前には出さないことになっております。

これより重くは鏡引きが困るだけでなく、落ちる速度も変わりますから大体これを標準にしています。これを引く綱は何と云つても綱が理想的で、それも芯まで粗で出来たのが最上です。しかし高価なので芯まで粗というのなかなか用いず、今は大抵麻の綱を用いています。これは余程いいのを選ばないと、上部のつてある車がかしんで一気に落ちかたりして具合の悪いことがあります。寸法は昔のまま作り変えることはありません。鐘の中はシテ以外、誰にも見せないことになっております。それで釣りに上げた時などつい見たがるものですが決して見せないようにしております。(つづく)

又、髪物のシテに用いる女面を「三番目掛」ともいうが、流儀の主眼によってかける面がそれく違ふことも頭に入れておかなければならない。例をば観世流では若女、宝生流では増友、金剛流では...

「道成寺」を若い間にやるのは体力が衰えるから、年がいったからだと重労働になるからです。私が初演したのは比較的に遅く二十七の時梅若の父の一周忌で、家柄からいえば非常におおかつたのですが、これはやる人が多く順に遅れたわけで、それだけみっちり稽古を積ませて頂きました。

とにかく見ていられるだけでも大変な能で、シテが体力のいる役だとはわかりませんが、お素人には知れないシテの苦勞がたぐささんあり、又あの鐘も「道成寺」の象徴だけにいろいろと難しい秘事があります。

鐘の高さは凡そ六尺で竹籠のように組みその上を鏡子の布で包みます。この鏡子は普通紺色を用いますが模様入りのものもあります。

内側は下の方に鏡子の折り返しがあつて二枚になり、上からも巾二尺位の布を下げて舞台に近い席からでも中が透いて見えな

方が早かつたりして頭をうつことがありますが、すので天井には布団がつけてあります。鏡の中には團が四つ、前後の二つは少し高く、左右のは低く折り返し一ぱいの所に團があつて、それぞれにシテに必要なもの一切を自分で入れておくことになっていま

す。何しろ鏡の中は薄暗く思わぬ失敗もありますから、正面に赤い布で目じるしをつけてとまどわぬように出来ています。

それから坐つて見える位置に鏡が入っていますが、普通のものでは落ちた時に割れるおそれがありますから金物を磨いた昔の鏡を用い四角な木で枠をして抜くのに便利

なように柄がつけてあります。しかし中には鏡などよく見えるものはありません。團の中には糸と針入れ、鏡、それに氣つけ薬まで用意してあります。鏡鉢(へよう鉢、じゃんじんと鳴らすもの)は重いので低い方の團に入れておきます。又打杖を入れた筒を同じくもう一方に入れますが、高い方には面、般若の面を二面入れます。

これは響で割れたり、角が折れたりした場合に備えるためで、必ずつけるのを即ち替でない方を前の團に入れておきます。

也留舞会夏季大会

八月二十二日(日) 午後一時始

中区栄・栄能楽ビル四階

栄能楽堂

番組
大名駒田等 太郎冠者 光岡 修
瓦 大 金森 順
練 都方 金森 順
鏡倉方 金森 武美

巴 シテ 林本 政夫
シテ 林本 政夫
シテ 林本 政夫

師 加藤 昭
師 加藤 昭
師 加藤 昭

悪太郎 徳田 文三
悪太郎 徳田 文三
悪太郎 徳田 文三

魚説法 新発意 高安晋一郎 施 主 大矢 高義
昆布亮 昆布亮 赤塚善代子 何 某 井上礼之助
引括り 男 滝沢修二 妻 金森 隆

主催 也留舞会
指導 野村又三郎

喜多流謡曲研精会
貫周 福岡 周 斎

利泉流狂言大会
八月二十二日(日) 午後一時始
熱田 神宮 能楽 殿

附祝言
主権 能楽協会名古屋支部
後援 朝日新聞 市 朝日新聞 市

観世会定式能 (第四回)
九月十二日(日) 十二時半始
熱田 神宮 能楽 殿

小鼓 後藤孝一郎

鶴 吉田 妙
高木美智子
河村 鉦二
高安 勝久
飯富 雅介
吉田 定男
福井啓次郎
鬼頭 昭彦

八 日比野 圭昭
山 口 亮
鬼頭 季信

通小町 西村 欽也
高橋 隆一
杉村 地謡
中村 和政
青木 武弘
武田 久田
加藤 隆兵衛

融 長田 暁
福井 欽一
助川 竜夫

紅葉狩 高安 勝久
飯富 雅介
河村 鉦二
後藤 孝一郎
鬼頭 三男

頼政 久田 秀雄
河村 鉦二

竜 吉田 妙
加藤 隆兵衛
保太 俊彦

通小町 高安 滋郎
河村 鉦二
真 三男

松 坂井 音重
地謡 武田 久田
水森 元三
小島 一英
坂井 音重

山 梅田 邦久
片山 博太郎
西村 欽也
真 敏一
助川 竜夫

付祝言
主権 名古屋観世会

各地で新能

大阪新能

8月11、12日生国魂神社で大阪新能は、こし二十回記念として、八月十一・十二日の両日生国魂神社境内で開催。いずれも五時二十分開演。

番組は次のとおり。

第一日(八月十一日)
解説沼津舞踊本日の能について(金春流・舞囃子「弓矢立合」(金春晃実、金春康之、阪田幸夫) 観世流能「高砂」(前シテ生一素組、後シテ梅若盛義、ツレ山中義彦) 挨拶 大阪市長大島靖氏 大蔵流狂言「融牛」(善竹幸四郎 善竹孝夫、善竹長徳) 観世流狂言「難波」(田村勇) 「夕顔」(仲長進) 「雀之段」(塩山本真義)

神戸新能

神戸新能は八月一日、二日の二日間、神戸長田神社境内で開催。

八月一日第一部は、各社中による連舞、狂言、独吟など五十数番 第二部能「絵馬」(シテ下川勝一 ツレ下川宜長、久田徹二) 能「井筒」(シテ上田照也、ワキ市場豊久) 狂言「清水」(善竹忠重、下都義太郎)

八月二日第一部連舞、狂言、連舞 須磨離宮外能は、こしし第六回を迎え、八月二十三日(土)

甲府新能

9月7日甲府市で第二十九回山梨県芸術祭特別行事として、甲府新能がきたる九月七日(火)、甲府市鶴岡公園自由広場(雨天の際は県民会館小ホール)で開催される。こし第三回目。

主催山梨県教育委員会、山梨県芸術祭実行委員会、開演午後五時三十分。入場無料。

番組は次のとおり。

能「隅田川」(シテ奥村富久子、子方藤岡裕子、ワキ森茂好、ワキツレ野口敦弘、笛・寛三男、小鼓大倉長十郎、大鼓・河村穂一郎、地謡五木田武計ほか) 狂言「蚊相撲」(山本則直、山本則俊、山本東次郎)

須磨離宮外能

須磨離宮公園野外能は、こしし第六回を迎え、八月二十三日(土) 調など四十数番 第二部・能「巴」(後シテ藤谷政二、前シテ藤田稔、ワキ中村信光) 能「国櫃」(後シテ上田豊弘 前シテ大槻文蔵、ワキ福王輝幸) 狂言「延命袋」(茂山千五郎、茂山正義、茂山千之丞)

出版紹介

「面打ち入門」 長沢氏春 著 渡会恵介 著

日本の美の真髄といわれる能への関心が高まるにつれ、能面を単に鑑賞の対象としてみるのではなく、能面の制作に意欲をもつ人たちがめだつ。本書は、専門面打師の領域と考えられてきた面打ちの技法の詳細を、豊富な写真、図版を中心として、長沢、渡会両氏が多年にわたる能面制作の体験に基づいて初歩から能面の打ち方を懇切に解説した絶好の入門書である。

第一章序論・能の面、能の歴史と美、面打ち師の系譜、名人と名作 第二章準備篇、面打ちの心構え

B5・二〇八頁、定価三、八〇〇円(二四〇〇円)

発行株式会社目録出版社(東京都千代田区猿樂町一丁目二一、新日貨ビル) 泉流玉言

北岸祐吉氏逝去

能楽評論家・北岸祐吉氏は、七月二十三日午後五時四十分、寝室川市の関西大付属香里病院で逝去。享年七十二歳。

文化庁文化財保護審議会専門委員、演劇学会理事などを歴任。大阪芸大教授。

氏は元朝日新聞記者として名古屋能楽界の今昔についてもうろた深く、昨年熱田神宮能楽殿創立二十周年記念の紙の特集に祝辞を頂いた。

武田太加志

名古屋市東区葵二丁目一九

山本観衛会

名古屋市中区錦三丁目

山本勝

名古屋市中区錦三丁目



薪能

第十一回名古屋

能小鍛冶・羽衣 蝶々乱・狂言釣針ほか

能小鍛冶・羽衣 蝶々乱・狂言釣針ほか

古屋新能は、既報のとおり、八月七日(土) 午後五時三十分 から、熱田神宮境内・特設舞台で開演される。

「おことわり」 暑中見舞いについて

名古屋新能のパンフレット刊行

能楽の友社では第十一回名古屋新能にあたり、新能のあゆみを記録したパンフレットを刊行しました。B5判二十四頁。ご希望の方に頒布します。一部二百円。(郵送料二百円)

分譲マンション

メゾン則武 (2DK, 3DK) 中村区則武本通

中央マンション (1DK, 2DK) 中区錦三丁目

中央地所株式会社 名古屋市中区錦3-13-5 TEL 962-2071

株式会社

名古屋市中区高辻町11番35号 電話 871-0291(代表) 466

8月・9月放送予定

◆ NHKラジオ第一放送 (毎週日曜午前10時15分)

8月	22日(日)	観世	流	「玄象」	大西信久ほか
	29日(日)	喜多	流	「雨月」	友枝喜久夫ほか
9月	5日(日)	観世	流	「善知鳥」	観世寿夫ほか
	12日(日)	観世	流	「流流」	野口裕久ほか
	19日(日)	観世	流	「流流」	観世元正ほか
	26日(日)	観世	流	「流流」	片山慶次郎ほか

◆ NHK・FM (毎週日曜午前7時15分)

8月	22日(日)	金剛	流	「女郎花」	今井幾三ほか
	29日(日)	金剛	流	「流流」	近藤礼ほか
9月	5日(日)	観世	流	「清経」	橋岡久馬ほか
	12日(日)	狂言	「八幡前」	「真舞」	山本東次郎ほか
	19日(日)	金剛	流	「富士太鼓」	奥野達也ほか
	26日(日)	観世	流	「玄象」	大西信久ほか

【おことわり】 前号8月8日第一放送・観世流「清経」は橋岡久馬氏の誤りでしたのでお詫びします。

秋の木曾路を訪ねる

謡曲名所めぐり

11月3日(祝)挙行 会員募集 ④面参照

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友

名古屋市中千種区吹上本町2-20

(郵便番号 464)

電話 (731) 7 9 8 4

振替口座 名古屋 36393

購読料 1年 500円

郵送の場合 1年 800円

一部 50円

10月・1

NHKラジオ第一

(10月)

24日(日) 観世

31日(日) 観世

(11月)

7日(日) 観世

14日(日) 観世

21日(日) 観世

28日(日) 観世

NHK・FM (毎

(10月)

17日(日) 観世

24日(日) 観世

31日(日) 観世

(11月)

7日(日) 観世

14日(日) 観世

21日(日) 観世

28日(日) 観世

定期能・秋季大会

9・10月の中部能楽界

中部能楽界の秋の催しは、恒例のとおりに九月五日、能楽協会名古屋支部主催の秋の能楽でその幕を開いた。

大衆能は観世流能「鶴亀」(シテ河村純二)「通小町」(シテ島修二)宝生流能「紅葉狩」(シテ玉井博祐)の三番、狂言「仁王」(井上松次郎ほか)で、協会支部主催の劇場能として唯一のものであるが、広い会場は熱心な観客で満員の盛況であった。

これを皮切りに、九月、十月と各流定期能、秋季大会が相ついで行なわれる。

九月の演能は、十二日名古屋観世会定式能、ことしは五回行なわれる定式能の第四回目。能「通小町」(シテ武田太加志)「山姥」(シテ片山博太郎)の二番で、通小町は、雨夜之伝、山姥は雪月花之舞といずれも小書つきの所演。

宝生流では、十五日が内藤泰二師の観世会例大会。能「雲雀山」「杜若」「鞍馬天狗・白頭」宝生宗家、大坪十喜雄、辰巳孝の諸師らを迎え能三番の大会。また二十

三日は、宝生会定式能(本年度第二回)は、能「千手」(シテ倉本雅、ツレ本間英孝)「綾鼓」(シテ大坪十喜雄、ツレ衣斐正宣)を上演。

観世流では、十八日に定期化したきた名古屋観世九阜会定例能、能「通小町」(シテ長谷川章、ツレ加藤保彦)「菊慈童」(シテ吉田 若)「狂言「蚊相撲」(井上松次郎ほか)の公演。九月には「通小町」が大衆能をふくめ三番の競演である。九月二十六日には名古屋淡交会七十年記念の秋季大会。能「俊寛」(シテ橋岡久共)「遊行」(シテ伊藤長八)「東北淡交会」(シテ伊藤長八)「東北淡交会」協賛淡交会さらに東京淡交会の協力で記念能にふさわしい盛況が期待される。

また九月二十三日岡崎・随念寺で幸謡会(近藤幸江師)では能「鶴」(シテ近藤幸江)が演ぜられる。

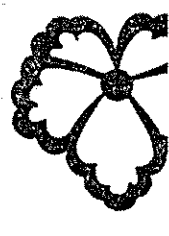
十月は、まず三日(日)名古屋観世九阜会恒例の秋季大会。今回は九阜会会友の野垣慶子さんが準師範技師として「狸々乱」を演

ずるほか社中により幸謡「野老小町」(関寺小町)の披露が組まれている。

十日は修善会(能若修一師)の秋季大会で、能「杜若・小書恋之舞」(シテ佐藤敬子)が披露はか幸謡八番、舞囃子、仕舞など十五番で大会をかざる。

演能カレンダー (熱田神宮 能楽殿)

- [9月] 15日(祝) 観世会秋の大会 (番組①面) (来場歓迎)
18日(土) 観世九阜会定期能 (番組①面) (有料)
23日(祝) 宝生会定式能 (番組①面) (有料)
26日(日) 名古屋淡交会70周年記念能 (来場歓迎) (番組②面)
[10月] 3日(日) 九阜会秋の会 (番組②面) (来場歓迎)
10日(日) 修善会秋の会 (番組③面) (来場歓迎)
16日(土) やるまい会公演 (番組③面) (有料)
17日(日) 猶惠会(素謡と仕舞の会) (番組④面) (来場歓迎)
24日(日) 青陽会定期能 (有料)
29日(金) 中日文化センター発表会
30日(土) 宝英会 (来場歓迎)
31日(日) 竹韻会秋季大会 (来場歓迎)
[11月] 3日(祝) 幸友会秋の会 (来場歓迎)
6日(土) 梅若盛義後援会 (有料)
7日(日) 邦謡会秋の会 (来場歓迎)
13日(土) 邦謡会
14日(日) 観世会定式能 (有料)
20日(土) 一謡会・叶石会秋の大会 (来場歓迎)
21日(日) 和泉会狂言会 (有料)
23日(祝) 中部金剛会主催故大塚一二道能 (来場歓迎)
28日(日) 宝生会定式能 (有料)
[12月] 5日(日) 歳末助け合い義捐能 (有料)
12日(日) 風韻会能楽大会 (来場歓迎)
19日(日) 青少年のための芸術劇場 (有料)
(演能変更の節はご了承下さい。)



蓬菜軒

本店 熱田区神戸町三四 電話(71) 868618
電話(32) 55993(7)

観世会例大会

九月十五日(祝) 午前九時始
熱田神宮 能楽殿

能雲雀山

高安 滋郎久 吉田 定男 寛 三男
飯富 雅介 柳原富司忠

能杜若

西村 欽也 寛 鉦一 鬼頭 喜太郎
福井啓次郎 藤田六郎兵衛

能鞍馬天狗

高安 滋郎 吉田 定男 助川 竜夫
後藤孝一郎 藤田 昭彦

昭和五十一年度(納会) 名古屋観世九阜会定例能

九月十八日(土) 午後二時始
熱田神宮 能楽殿

通小町

高安 滋郎 柳原富司忠 鬼頭 季信
長谷川 章

菊慈童

西村 欽也 寛 鉦一 鬼頭 喜太郎
後藤孝一郎 寛 三男

蚊相撲

井上松次郎 佐藤 弘之
大野 友彦

綾鼓

西村 欽也 河村純一郎 鬼頭 喜太郎
井上松次郎 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

寝音曲

佐藤 友彦 大野 弘之

仕舞

生田敦盛 竹内 澄子
姥キリ 戸田 和
葛 城クセ 吉田 俊彦 地謡 鬼頭 喜太郎
笠ノ段 辰巳 孝 竹韻会 藤田 昭彦

千手

高安 滋郎 寛 鉦一 藤田 昭彦
本間 英孝 倉本 雅 福井 良久

小鍛冶

鬼頭 喜太郎 竹韻 勝一

能雲雀山

高安 滋郎久 吉田 定男 寛 三男
飯富 雅介 柳原富司忠

名古屋宝生会定式能

九月二十三日(祭) 午後一時始
熱田神宮 能楽殿

能雲雀山

高安 滋郎久 吉田 定男 寛 三男
飯富 雅介 柳原富司忠

能杜若

西村 欽也 寛 鉦一 鬼頭 喜太郎
福井啓次郎 藤田六郎兵衛

能鞍馬天狗

高安 滋郎 吉田 定男 助川 竜夫
後藤孝一郎 藤田 昭彦

通小町

高安 滋郎 柳原富司忠 鬼頭 季信
長谷川 章

菊慈童

西村 欽也 寛 鉦一 鬼頭 喜太郎
後藤孝一郎 寛 三男

蚊相撲

井上松次郎 佐藤 弘之
大野 友彦

綾鼓

西村 欽也 河村純一郎 鬼頭 喜太郎
井上松次郎 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

寝音曲

佐藤 友彦 大野 弘之

仕舞

生田敦盛 竹内 澄子
姥キリ 戸田 和
葛 城クセ 吉田 俊彦 地謡 鬼頭 喜太郎
笠ノ段 辰巳 孝 竹韻会 藤田 昭彦

千手

高安 滋郎 寛 鉦一 藤田 昭彦
本間 英孝 倉本 雅 福井 良久

小鍛冶

鬼頭 喜太郎 竹韻 勝一

能雲雀山

高安 滋郎久 吉田 定男 寛 三男
飯富 雅介 柳原富司忠

能杜若

西村 欽也 寛 鉦一 鬼頭 喜太郎
福井啓次郎 藤田六郎兵衛

能鞍馬天狗

高安 滋郎 吉田 定男 助川 竜夫
後藤孝一郎 藤田 昭彦

通小町

高安 滋郎 柳原富司忠 鬼頭 季信
長谷川 章

菊慈童

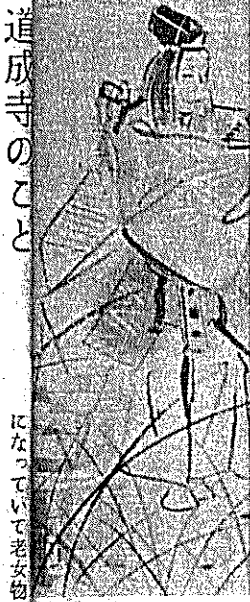
西村 欽也 寛 鉦一 鬼頭 喜太郎
後藤孝一郎 寛 三男

蚊相撲

井上松次郎 佐藤 弘之
大野 友彦

名物

おで 一品料理



道成寺のこし
NHK教育テレビ放送
9月15日(祝)午前九時
増田正造
能「安達原」武田大加徳ほか
能「羽衣」野口謙吉

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」より

万三郎兄が東西の舞台(大阪能楽殿)で「道成寺」をつとめた折、大西さん(手塚亮太郎)はそういうしきたりに特になじびい方だったの、申合せの時に他の人に一切見せないように幕を張って下さった程でした。それでも何しろ鐘入りが万三郎兄・実兄の鐘引きというので、大西一門の人々が見たがって舞台を離れません。そこでとうとう両兄は舞台で申合せをやって、旅館にひきあげ、何もかも忘れた。二人が呼吸を合わせて申合せをしたという程のこと、これは重く考えられているのです。

「人の積古を見よ」という私の考え方は矛盾するようですが、「道成寺」に限らず大曲にはいろいろ秘密の難しいことがありますから、ただ興味本位で見たいというわけでは、お話を元に戻して落れから申上げましょう。

先ず幕が上りますと鐘の音で鼓に合わせて、

若しこの日三番目に老女物、例えば「威捨」等を出してその後「道成寺」という番組の時は、同じ次第が二番続くことになり、すから、老女物の方が遠慮をして普通の足使いにすることになっています。

ヨセイの手で幕をはなれます。すつと出て一ぱいには止まらず足をゆるめコイアイ一つ入れます。コイアイの所では別に位取りをかえ、ここで姿を見せながらすらすらと出ます。芝居で言えば切替から出て、花道の七三で見得をきる気持です。

こう致わって、未熟な者はただ早く出たがりますが、足運びが軽くなるのは意味がよくわかっていないからで、反対に強くなる嫌味になりますから注意しなければなりません。このあたりに芸の深さ、浅さがわかるものです。

舞台に入って、次第に三週返しという小書があります。この三週返しというのは、先ずシテが謡い、次に地が謡う、そしてもう一度シテが謡返して謡うことで、最初のシテの謡「作りし罪も」は常の通り謡いますが、次に地が謡う時「鐘の供養に参らん」とのまじりで拍子を合わせます。そうしないと後のシテが出られないからです。これを半ノリと言います。二度目のシテの謡は前とは変り調子をすつと引き立てて高く返しの節で謡います。

それから進行になって「急ぐ心」で調子を変え、高く引き立てるように謡いますがむやみに調子はすれに高くしてもいけません。ここが丁度よい高さであり、後のしずめがよく利きます。時に「急ぐ心」までを高く謡ってその後調子を変えて下げる(つづく)

この時狂言の人でずつとシテの方を向いている人がありますが、シテは顔を凝らしているのにそれに向いていられては都合が悪いので前以て「正面をはずして下さい」と頼んでおかなければなりません。シテは左の足をにじる間顔を凝らし、体の方向を変えて右足をにじる時分に顔をどすようにします。

次の物帯で烏帽子をつけます。この烏帽子の締め方にも秘伝があって家元は自分で結びますが、本来は後見が締めるものです。「堅い」といわれてゆるくしますと、舞の途中鐘の下をくぐる時に落ちてしまったり強すぎると脚ではねた時落ちにくいとか、余程心得た後見でないといけません。けれど「道成寺」ほどになりません。後見は大抵師匠とか、すつと上の人がしてくれ、すから初めての者でも安心して舞うことが出来ます。

第18回狂言やるまい会公演

十月十六日(土)午後二時始
熱田 神宮能楽殿

筑紫奥

鬼ヶ宿

素囃子 男舞

野村 万作
野村 万之丞
野村 万之介
野村 信行
茂山 千五郎
茂山 正義
河村 総一郎
後藤 孝一郎
藤田 昭彦

野老

野村 又三郎

三人片輪

入場券 一般二千円(自由席)
学生 千円(階上席)

野村 万之丞
野村 万作
野村 万之介
井上 礼之助
野村 万作
野村 万之介
野村 万作
野村 万作
TEL (832) 8071
TEL (832) 8071
TEL (832) 8071

通小町 上岡 順也
松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

松 風 梅田 弘子
阿 口 後藤 鈴子
江 口 後藤 鈴子
関寺小町 伊藤 睦子
通小町 吉田 市郎
当 麻 伊藤 睦子
船弁慶 橋本 とも
恋重荷 菊地 忠次
独 吟 伊藤 睦子
阿古屋松 伊藤 睦子
仕 舞 宮本 正彦
狂 言 宮本 正彦
牛 井上 礼之助
能 楽 佐藤 秀雄

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」切

物著が終りますと橋がかりに出て一松から鐘を見ます。これを一の目附けと言つて、急に見ないで、じつと見上げるようにすると型がよく利きます。この一の目附けの後舞台に入りませう時、大倉流では最初小鼓を打つて、二度目の置きで小鼓をとめますが、他流即ち、幸流や幸清流では初めから小鼓はとめて大鼓ばかりでやります。シテが鐘を見込む時大鼓は掛けるのはつきり大きくかけますからシテはそれを聞いて鐘を見て、一息おいてからするすると舞台に入ってゆきます。この一寸間をおくことが大切で、するすると同じようになつては面白くありません。このあとは乱拍子になりますがこの時、小鼓がシテの方に向くのは、気合をかけるためで、シテを見てはあきません。型はただ一つ、腰をしずめ、すくうよう

流にも使われているようです。乱拍子は石段を上る際に解されるようですが、当流だけにあつたという「輪廻」の乱拍子、又宝生流だけにある「草子洗」のそれなどから考えますと、これらには石段はありませぬから、結局舞の一つの足の型が形式化されて、白拍子の方に残っているものと思われまふ。

「道成寺」の場合、乱拍子は舞型に舞います。本来は二十何段とか言われていたが、私をはじめ勤められた時、明治四十年は十五段に舞いました。即ち、正前に三段、この段というのは小鼓の掛け声と共に拍子をふむのでわかりませんが、ワキ座に向つて三段、シテ柱に向つて四段をふみます。ここで一段多くふむことによつて丁度最初の一段目のところへ帰り、うまく三角の舞型になるわけです。

それから又正面をむいて、つまり十一段目で、これが中ノ段になります。ここでは扇を逆手に持つて前に出し、普通は拍子を落させて始めのエ、ヤア、と音をぬいてト・タアと踏みます。数拍子はこの夕をふまずに後を全部踏みますのでこの名がある訳です。ここで扇を逆手にとつて中ノ段になるのです。

中ノ段から先は呼吸がつかまつて、「道成の舞」と謡いが入る所で四段あります。最初から数えて丁度十五段になるわけですが、普通の型とされています。今では略して十三段に舞つていますが、段をへらすと鐘の型が小さくなつて鐘を見込むところなど鐘

へ行き、正面をむいて、鐘の下へ入る時、扇をふちの外側へ振りますが、私共では、舞いながら扇を落した時に扇を逆手にしてすつと持ち上げると、扇が鐘のふちにあたりますからそれから正面を向く、という方法をとつております。(つづく)

第二回名古屋梅若盛義後援会能

十一月六日(土)午後一時始

熱田 神宮 能楽殿

花

子方 梅若 盛義
フシ 梅若 修一
梅若 盛義
西村 欽也
高安 澄郎
飯富 雅久
飯富 雅久
後藤孝一郎
三男

後見 山並 藍彦
井戸 良造
地謡 岡田 晃一
前川 芳岡
大嶽賢次郎
池内光之助
岡田 則静
井上礼之助

竹生島参り 狂 實
舞 壱子
観世 静夫
後藤孝一郎
藤田六郎兵衛

菊

梅若 盛義
西村 欽也
吉田 定男
柳原 富司忠
藤田 昭彦

竹生島 梅若 盛義
龍 虎 岡田 則静
梅若 修一
善高 地謡
井戸 良造
和男

梅若 盛義後援会
主催 梅若 盛義
後援 中日新聞
連絡先
名古屋市中区東区猪高町猪子石
高根一五八八 日車マンショ
平和ヶ丘四〇四
熊沢 恵美子
電話四一六九七三番

京都
金剛流・豊春会能は十月三日、京都・金剛能楽堂で開演。能「枕草子」(シテ豊嶋弥左衛門、ワキ江崎金次郎)は、小舞前後之習、さらに抱いて山中に捨てられる短い前場があり、二段物の趣のある後式能になる。京都ではかつて今井幾三郎師が演じて以来三十年ぶりの上演、東京では最近金剛能楽堂によつて開演する。

東京
東京豊春会の第二回能。能がきたる十二月七日、弘、大鼓安福建雄、太鼓小寺佐七、四狂言善竹圭五郎、善竹十郎、鐘後見金剛殿、後見豊嶋弥左衛門。

東海英会
主権 東海英会
豊橋市上伝馬町三〇 西村祐三
電話(〇五三三)五五一五六六

因幡
主権 野村又三郎
井上松次郎

土蜘蛛
主権 杉村竹韻
電話七七一五〇三九番

山姥
主権 藤戸 関谷 薫
水野 光子
妹尾 久
戸谷 亮巳

能碓
主権 高安 澄郎
井上松次郎
藤田 昭彦

幸友会秋の会
十一月三日(祝)午前九時半始
熱田 神宮 能楽殿

秋の邦謡会(一)
十一月七日(日)午前九時始
熱田 神宮 能楽殿

故浅井栄子姉追悼
十一月十三日(土)午前十時始
熱田 神宮 能楽殿

秋の邦謡会(二)
十一月十三日(土)午前十時始
熱田 神宮 能楽殿

故三木英一氏追悼
十一月十三日(土)午後六時
梅田 邦久

班
主権 西村 欽也
高安 澄郎
藤田 昭彦

女
主権 高安 澄郎
藤田 昭彦

松
主権 飯尾 勇
百 萬 錦木 峰子

須磨源氏
主権 岩田 慎之
百 萬 錦木 峰子

仕舞
主権 須磨源氏
百 萬 錦木 峰子

舞
主権 須磨源氏
百 萬 錦木 峰子

葛
主権 梅田 邦久
石川 貢

夕顔
主権 佐藤 千代
庄司 憲

葵
主権 小島 英子
中村外幾代

東
主権 佐藤 千代
通 小町 坂野 嘉子

雲
主権 橋本 淑子
橋本 淑子

大原御幸
主権 坂野 嘉子
橋本 淑子

鷲
主権 水野美代子
橋本 淑子

隅田川
主権 河井雄一郎
橋本 淑子

松
主権 岩井 一夫
遊 行 柳 江口 末雄

熊
主権 中島 芳子
那 那 那 喜久也

千
主権 重衛 小次郎
都 築 健二

鞍馬天狗
主権 河合 雄一郎
横山 良史

独吟
主権 山口 良孝
戸 宮川仁左衛門



能紀行

紅葉を焼く

絵と文 二井栄逸

朝戸出の眼にひんやりとした冷たさを感じる頃になりました。時...

紅葉を歌によみ、詩につくり観賞した起源は古く、すでに現存する最古の歌集、万葉集に額田王...



名古屋修真会 (51・10・10)

演能の記録

「杜若」 恋之舞 佐藤敏子さん

Table listing names and roles for the performance '中部金剛会 故大塚一二師追善会'.

Table listing names and roles for the performance '第廿期・第三回 名古屋宝生会定式能'.



道成寺のこと (その4) 鐘に吸い込まれたように見えるおとし方...

鐘に吸い込まれたように見えるおとし方が散上で、「道成寺」を勤めた者でない...

風韻会秋季能楽大会 十二月十二日(日)午前九時半始

能百 富士太鼓 殿島博子 殿島満里子...

能楽先人の訓え

「観世華雪雲談」刊

われてきました。葉先が五つに分れるアサノハカエデ、七つに分れるイロハカエデ、十一に分れるハチワカエデ、どれも風情があつて面白いので、多くはイロハカエデが使われているように思われます。能楽の唐紙や、縫箔、かつ

道成寺のこと (その一)

能引きは「さる程にさる程に」で助手は手を退いて一人だけになり、気合いで一尺ばかり出しませんが、出た勢いでずるずるひきずられないように支えます。これにも心得があつて、柱の環に指をひっかけた腹の気合いで出し後は一気にはばたきません。この時シテを見ていては鐘に気合が入りません。これには他の方法もありますが、鮮やかに気合がかかるといふことではこの行き方が一番いいよ

うです。鐘入りは申すまでもなく鐘引きが絶対の

鐘に吸い込まれたように見えるおとし方が最上で、「道成寺」を勤めた者でないとならないと云ふ。シテは鐘の下に行くと同時に飛び上つて安座して落ちますが、飛び上つた時にいきの方に顔を上げようにして、落ちる時は片膝でしゃがみようにしますと、足がくじけることもなく、また外から見ても安座して落ちたように見えます。さて、鐘が落ちますと先ず重の後見が鐘の後へ来て申すのを伺います。申に入つたシテのことは前に申し上げましたが、「普通仕度は狂言の「そなた申上げ」のあたりにはもう済ませていて、ウキの語りは落ちついて聞かなければなりません。もっとも「赤頭」「替装束」などの小書のある時は、頭や衣裳を全部かえすからさうもいけません。この時は前シテでは着物の襟の箱が小さく、後シテでは着た大きな襟にかえす。これは最初から着込んでいて、上だけを脱げばいいのですが、腰巻もかえすし、前もって丁度真中が持てるように手さぐりをつけて後につか

また、小書で緋の長袴をはく場合がありつぎをかいつくすまっています。 (つづく)



(51・10・10)

歳末助け合い 義捐金募集能 (第八回)

十二月五日(日)午前十時始

- | | | | | | | | | | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|--|------------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|----------------------------|----------------------------|-------------------------------|-------------------------------------|---------------------------|
| 舞臺子 (春) 高 砂 林 鉄郎 河村総一郎 柳原富司忠 鬼頭 八郎 | 能(剛) 巴 吉川 周子 高安 滋郎 河村総一郎 後藤孝一郎 鬼頭 季信 | 後見 片野東四郎 佐藤 友彦 豊島三千春 水谷 泰典 水谷 三郎 水谷 三郎 水谷 三郎 | 放 下 僧小歌 今沢 美和 地謡 菊川 三三 菊川 三三 菊川 三三 | 歌 占キリ 熊沢恵美子 地謡 須藤 一 須藤 一 須藤 一 | 田 村キリ 加藤 保彦 地謡 須藤 一 須藤 一 須藤 一 | 井 虎 須藤 一 地謡 須藤 一 須藤 一 須藤 一 | 竜 竜 須藤 一 地謡 須藤 一 須藤 一 須藤 一 | 薪 之 段 後藤 武弘 地謡 須藤 一 須藤 一 須藤 一 | 連吟(飽) 薪 之 段 後藤 武弘 地謡 須藤 一 須藤 一 須藤 一 | 仕舞(喜) 天 鼓 長谷川 章 地謡 山本 栄逸才 |
|------------------------------------|--------------------------------------|--|------------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|----------------------------|----------------------------|-------------------------------|-------------------------------------|---------------------------|

能(剛) 羽 衣

高橋 昭一 高安 勝久 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

- | | | | | | | | | | | |
|----------------------------|-------------------------|-----------------------------------|---------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|
| 能(剛) 卷 絹 西村 欽也 福井 良久 鬼頭 好信 | 能(剛) 泉山伏 野村又三郎 井上礼之助 秀雄 | 能(剛) 二九十八 河合雄一郎 井上松次郎 大野 弘之 後藤 孝二 | 能(剛) 邯鄲 高安 滋郎 吉田 定男 助川 龍夫 | 能(剛) 狂言(和) 久田 敬二 井上松次郎 大野 弘之 後藤 孝二 | 能(剛) 狂言(和) 久田 敬二 井上松次郎 大野 弘之 後藤 孝二 | 能(剛) 狂言(和) 久田 敬二 井上松次郎 大野 弘之 後藤 孝二 | 能(剛) 狂言(和) 久田 敬二 井上松次郎 大野 弘之 後藤 孝二 | 能(剛) 狂言(和) 久田 敬二 井上松次郎 大野 弘之 後藤 孝二 | 能(剛) 狂言(和) 久田 敬二 井上松次郎 大野 弘之 後藤 孝二 | 能(剛) 狂言(和) 久田 敬二 井上松次郎 大野 弘之 後藤 孝二 |
|----------------------------|-------------------------|-----------------------------------|---------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|

風韻会秋季能楽大会

十二月十二日(日)午前九時半始

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------------|---|-----------------|---|--|--------------------------------------|--|---------------------------------------|---|---------------------------------|------------------------------|-----------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| 仕舞 松 風 吉川 周子 地謡 今井 幾三 今井 幾三 今井 幾三 | 仕舞 女 郎 花 日比野 圭昭 地謡 東田 康文 東田 康文 東田 康文 | 仕舞 藤 戸 水谷 泰典 地謡 佐藤 秀雄 佐藤 秀雄 佐藤 秀雄 | 仕舞 取 川 井上松次郎 井上礼之助 地謡 佐藤 秀雄 佐藤 秀雄 佐藤 秀雄 | 能 熱 田 神 宮 能 楽 殿 | 神 歌 福間 克彦 加野昭二郎 地謡 日比野 圭昭 日比野 圭昭 日比野 圭昭 | 竹 生 島 浮貝 綱一 加野昭二郎 地謡 今井 幾三 今井 幾三 今井 幾三 | 小 督 吉田 文子 石黒 操子 地謡 福間 克彦 福間 克彦 福間 克彦 | 三 井 寺 阿部 三男 村上 楠枝 村井 幸子 地謡 水野 和子 水野 和子 水野 和子 | 花 井 俊 寛 関谷 三男 近藤 一清 山岡 常子 山岡 常子 山岡 常子 | 天 舞 鼓 日比野 圭昭 福井啓次郎 地謡 鬼頭 英二 鬼頭 英二 鬼頭 英二 | 小 袖 曾 我 御牧 紀代 鬼頭 英二 鬼頭 英二 鬼頭 英二 | 放 下 僧 奥田 薫 柳原 司忠 柳原 司忠 柳原 司忠 | 玉 盤 金丸 洋子 高井 敏雄 高井 敏雄 高井 敏雄 | 能 羽 衣 高安 勝久 浅野 比沙 浅野 比沙 浅野 比沙 | 能 松 風 守部 啓子 後藤 孝一 後藤 孝一 後藤 孝一 |
|-----------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------------|---|-----------------|---|--|--------------------------------------|--|---------------------------------------|---|---------------------------------|------------------------------|-----------------------------|-------------------------------|-------------------------------|

- #### 11月・12月放送予定
- NHKラジオ第一放送 (毎週日曜午前10時15分)
- (11月)
- 21日(日) 宝生流「夜討討我」金井 章ほか
- 28日(日) 観世流「葛城」浦田保利ほか
- (12月)
- 5日(日) 観世流「仲光」観世元昭ほか
- 12日(日) 観世流「鉢木」松本謙三ほか
- 19日(日) 観世流「朝長」大槻秀夫ほか
- 26日(日) 観世流「朝長」大槻秀夫ほか
- NHK・FM (毎週日曜午前7時15分)
- (11月)
- 21日(日) 金春流「自然居士」金春信高ほか
- 28日(日) 観世流「英上」藤井久雄ほか
- (12月)
- 5日(日) 観世流「乱巻」藤波紫雲ほか
- 12日(日) 観世流「正尊」松本謙三ほか
- 19日(日) 観世流「葛城」浦田保利ほか
- 26日(日) 観世流「葛城」浦田保利ほか
- NHK教育テレビ
- 23日(祝) 喜多流「松風」後藤得三ほか
- 28日(日) 観世流「後寛」観世寿夫ほか
- 狂言「千鳥」茂山千作ほか

- 〔御来場歓迎〕
- 主催 殿風 毎日新聞社
- 後援 泉勝 梶泰 水田 嘉幸 泉勝 梶泰 水田 嘉幸
- 半能 養 福間 克彦 高安 滋郎 飯富 雅介 吉田 定男 山岡 常子 伊藤 伊三郎 伊藤 伊三郎 伊藤 伊三郎
- 熊 坂 高田みね子 鬼頭 英二 鬼頭 季信
- 葛 城 渡辺 節子 吉田 定男 柳原 司忠 後藤 孝一 後藤 孝一 後藤 孝一
- 実 盛 福間 昌作 吉田 定男 柳原 司忠 後藤 孝一 後藤 孝一 後藤 孝一
- 舟 心 井上松次郎 井上礼之助 藤田六郎兵衛 藤田六郎兵衛 藤田六郎兵衛
- 通 小 町 殿島満里子 吉田 定男 福井啓次郎 藤田六郎兵衛 藤田六郎兵衛 藤田六郎兵衛
- 能 百 万 西村 欽也 後藤 孝一 鬼頭 好信 鬼頭 好信 鬼頭 好信
- 附 祝 言 名 古 屋 宝 生 会 佐藤 秀雄 佐藤 秀雄 佐藤 秀雄

能土蜘蛛、狂言因幡堂

12月12日(歳末助) けいあいC B Cクラブ芸能祭

歳末助け合いC B Cクラブ芸能祭は、昨年第一回として、C B Cクラブの芸能部門の会員による奉仕出演で行なわれたが、ひきつづき今年も、十二月十二日(日)C B Cホールで催される。

能・狂言は第一部(午後六時開演)で番組は次のとおり。

狂言「因幡堂」(井上松次郎、佐藤秀雄、後見・井上礼之助) 能「土蜘蛛」(シテ梅田邦久、頼光・清沢一政、胡蝶・今沢美和)

トモ須部市、ワキ高安渡郎、ワキツレ高安勝久、間・佐藤友彦、笛・藤田六郎兵衛、小鼓福井啓次郎、大鼓寛範一、太鼓鬼頭八郎、後見・殿島修二、高橋謙一、地謡・久田秀雄、塚本秀雄、佐藤太俊、加賀敏彦(西村敬也)

入場料は第一部、第二部とも各千五百円、その純益は名古屋市、東海三県の恵まれぬ人たちに贈られる。

能「小鍛冶」「黒塚」を上演

12月19日 青少年のための芸術劇場

名古屋市教育委員会と能楽協会名古屋支部主催により「青少年のための芸術劇場」能、狂言は、十二月十九日(日)熱田神宮能楽殿で催される。

番組は次のとおりで、第一部(午前十時始)第二部(午後二時始)の二回公演。入場料はいずれも三百円。

働く青少年、高校生など能・狂言鑑賞の機会として毎年行なわれているものである。

◎第一部

解説・能について：内藤泰二氏 狂言について：野村又三郎氏、狂言「孤塚」(井上松次郎、佐藤友彦)

◎第二部

解説・能について：内藤泰二氏 狂言について：井上松次郎氏 狂言「武悪」(野村又三郎、井上礼之助、佐藤秀雄) 能「喜多流」(黒塚) (シテ長田寛、ワキ高安渡郎、ワキツレ飯富雅介、笛・藤田昭彦、小鼓・山口亮、大鼓・吉田定男、太鼓・池田茂、間・大野弘之、地謡大島久見ほか)

52年度 名古屋宝生会定式能日程

名古屋宝生会主催の五十二年定式能(第二十一期)の日程、および演能曲目は次のとおり決定した。

◎二月六日(日)

能頼政 内藤 泰二
能求塚 辰巳 孝
能夜討曾我 本間 英孝
はかに狂言・仕舞 衣斐 正宜

名古屋宝生会事務所名古屋市中区山崎町一三五、内藤泰二氏事務所〇五二(六三三)三四四九

52年度 名古屋観世会定式能日程

名古屋観世会の昭和五十二年定式能の予定番組、ならびに日程は次のとおりである。五十二年度も本年と同じく年五回の演能。

自由席一万円、指定席一万五千円、当日券(自由席一回分)三千円。

◎初回 二月十三日(日)

能羽衣 観世 元正
能天和 鼓 観世 元昭

◎二回 四月十日(日)

能杜若 梅若万三郎

◎三回 六月十二日(日)

能弱法師 梅若 六郎
能善界 観世 武雄

◎四回 九月十一日(日)

能竜田 梅若 盛義
能玄象 大観 秀夫

◎五回 十一月十三日(日)

能江口 片山博太郎
能野守 観世 寿夫

申し込みは、十一月十四日から名古屋観世会所属能楽師、又は熱田神宮能楽殿(名古屋熱田区新宮坂町一、電話〇五二(六七)二九一二番)

各地たより

山本定期能は、十一月六日(土)午後一時から大阪・東区・山本能楽堂で定期能を開催。大阪市民文化祭参加、能「松風」(小書見留) (シテ山本真義、ツレ河村和重)、能「鐘屋」(小書黒頭) (シテ山本勝二) 素謡「清経」(シテ東岡正徳) 狂言「茫々頭」(善竹幸四郎、善竹玄三郎) ほか仕舞三番。

なお十二月定期能は、十二月十二日(日)、能「邯鄲」(シテ八木康夫)、「仏原」(シテ山本順之)、「紅葉狩」(シテ宇治田正子) 素謡「項羽」(シテ和辻一行) を上演。

大阪 桜間金太郎遺蹟記念道成寺能

大阪能楽観賞会では、桜間会と共催で十一月十六日、特別公演「能を大阪太郎遺蹟記念「道成寺」能を大阪能楽会館で公演する。

金春流の「道成寺」は、明治三名入、金太郎の祖父桜間伴房師江崎金次郎。

岡山 観世流・渡辺祥栄師・斯道五十年記念能

斯道五十年記念能は、十一月十四日、岡山・後楽園で観世宗家が来演して催される。能組は「安宅」(シテ観世元昭、ワキ高安渡郎)、「半帯」(シテ観世元正、ワキ高安渡郎)、「道成寺」(小書赤頭) (シテ片山博太郎、ワキ江崎金次郎)、「乱・双之舞」(シテ河村慎二、河村隆司、ワキ江崎金次郎)。

木曾路を訪ねて 謡曲名所めぐり

11月3日 挙行

能楽の友社では、毎年「謡曲名所めぐり」として、同好の方々にバス旅行を行なっていますが、ことしは、さる十一月三日、文化の日「木曾路を訪ねる」旅行会を催しました。

当日は、すばらしい快晴に恵まれ、名古屋市内は三河・瀬田からも参加され、総勢四十九名で午前八時三十分、愛知県文化講堂前を出発、友社同人として殿島修二師が同行。東名ハイウェイ小牧ICから、春日井を経て、中央高速道路を一路中津川へ、恒例の通り車中での懇話会は、最初の観賞地寝覚の床にちなんで、「寝覚」にはじまり、中津川ICを経て、賞所に参拝、枯山水の石庭、さらには紅葉の万松庭を觀賞し、同寺大広間にて少憩。木曾福馬町の能楽同好の方々を代表して、出迎えられた板井源一氏(木曾福馬町議会議長)から歓迎のことばと、木曾の謡曲名所について丁寧な説明をいただき、謡曲の徳を感じつつ同寺を後に、日義村に入り、巴ヶ淵をみながら、急流木曾川にかかる寺橋をわたり、都会では味わえない晩秋の妙景のなかに、老いしげる古木にかこまれた養徳寺普賢寺日照山徳音寺に着く。

総導りの櫻門(尾張に縁のある犬山城主成瀬半人正ら寄道)をくぐり、本堂養徳公の木像の前で「巴」を奉納、養徳公、小枝御前(再び車中の人となり、養徳公の養父中原兼遠の菩提寺林昌祥寺で駒王丸時代の兼遠の起請文の写し寺室内内蔵などを披見させて頂き温かい湯茶の接待をうけ少憩。

午後三時すぎ同寺を出発、車屋本店で名物手打ちそばに舌つづみをうち、午後四時二十分出発、車中にて「葛城」「龍田」さらに「紅葉狩」を同吟するうちに、一宮ICを経て午後七時半つづがなく帰りました。

※今回は、初めての木曾路探訪で、コースも時間的に追われたスケジュールでご迷惑をおかけ致しましたが参加者皆様のご協力を厚く感謝いたします。

また、木曾福馬町の同好の方々と共に板井源一氏に格別のご配慮ご案内を賜りましたことを抵上をもって心からお礼申し上げます。

(写真) ①徳音寺で素謡「巴」の奉納 ②興禪寺・養徳公廟に参拝する一行



外科・せいけい外科・皮膚、泌尿器科

東山整形外科

TEL 781-7835

東山公園駅下車 オークランドビル2F

割烹 ぬじ

名古屋市中区栄3丁目13
電話 (241) 2713

檜書店

流元 剛行 金発 流本 世家 観宗

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入

電話 (291) 2488-9
振替東京 3-3 552
電話 (231) 1990
振替 京都 113

社友の友
吹上本町2-20
号464)
D) 7984
古屋 36393
1年 500円
1年 800円
50円

歳末助 義捐金募集能

能楽協会名古屋支部主催

筑紫奥 小舞 野村 信行
十月十六日(土) 午後二時始
熱田神宮能楽殿
野村万作 野村万之丞
野村万之介

青陽会定期能
十月二十四日(日) 午前十時半始
熱田神宮能楽殿



山田宝石 貴金属・時計・装飾品

名古屋・本山駅 電 762-2434代表

能樂の友

題字は熱田神宮 窪田富司筆

発行 能樂の友社

名古屋千種区吹上本町2-20 (郵便番号 464) 電話 (731) 7984 振替口座 名古屋 36393 購読料 1年 500円 郵送の場合 1年 800円 一 部 50円

(能樂の友社同人座談会 スナック)



け合い 義捐前盛會

12月5日 能4番を上演

能楽協会名古屋支部主催、愛知県、名古屋市、中部能楽師会後援による「第八回歳末助け合い義捐金募集能」は、さる十二月五日午前十時から熱田神宮能楽殿で盛會のうちに催された。

午前十一時開演、金春流舞囃子「高砂」につづき、金剛流能「巴」(シテ吉川周子) 観世流能「羽衣」(シテ高橋順一) 宝生流能「巻箱」(シテ竹内澄子)、狂言「鼻山伏」(二十九八)、観世、喜多流仕舞、仕舞など。(主な能組は○面掲載)

中日五流能公演

明春3月27日 中日劇場で

金小曲書つきの能として異色の演目をそろえ、充実した内容が期待されている中日五流能は、明年は三月二十七日(日)名古屋・中日劇場で開催される。

第一部は、宝生流能「花月」(シテ野村開作) 観世流能「熊野」(シテ観世元昭) 金剛流能「融」(シテ金剛融) 第二部は観世流能「鉢木」(シテ梅若万三郎) 喜多流能「羽衣」(シテ観世元正、ツレ吉井順一、子方)

第三回神戸五流能

1月22日 神戸文化ホール

神戸市主催による「神戸五流能」は、ことし第三回をむかえ、新春一月二十二日(土)午後一時から神戸文化ホールで開催される。能組は、喜多流能「三輪」小書神遊(シテ喜多長世、ワキ岡治郎) 宝生流能「雲林院」(辰巳孝) 金春流能「阿漕」(金春晃史) 金剛流能「山姥」(福田道雄) 狂言「節分」(大藏弥太郎、大藏基雄) 観世流能「望月」小書古式(シテ観世元正、ツレ吉井順一、子方)

宝生流・近藤乾三氏

日本芸術院の新会員

日本芸術院(高橋誠一郎院長)は、十一月二十五日、ことしの会員補充選挙の開票を行ない、十一人の新会員を内定した。能楽関係から、宝生流シテ方・近藤乾三氏が選ばれた。新会員は総会の承認をうけ十二月十五日付で発令される。

近藤乾三氏(宝生流シテ方) 東京都生まれ。明治三十四年、十一歳で十六世宝生九郎師入門。明治三十九年初シテ「草薙」。宝生流シテ方として重厚で底力のある芝居を示している。昭和三十五年日本芸術院賞受賞。昭和四十一年重要無形文化財保持者認定。八十一歳。東京都豊島区巣鴨五十二番三十八。

喜多実氏 叙勲

「文化の日」の十一月三日、秋の叙勲が発布された。能楽関係では次のとおり

勲三等瑞宝章 喜多実氏

井上八千代さん勲三等 観世流故片山博通氏夫人、井上八千代さん(片山博太郎氏母室)は秋の叙勲で勲三等瑞宝章を受章された。

第二十三期第三回 青陽会定期能

五十二年一月九日(日)午前十時半始

神歌	加野昭二郎	小川貞三	地謡	高橋宗三	今村嘉男	藤本重一
高砂	加野昭二郎	小川貞三	地謡	高橋宗三	今村嘉男	藤本重一
待詠	加野昭二郎	小川貞三	地謡	高橋宗三	今村嘉男	藤本重一
羅生門	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
野宮	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
安達	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
卒都婆	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
放	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
松	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
斑	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
鉄	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
船	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
熊	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
清	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
櫻	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
道	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
天	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
昆布	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
弱法師	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
松	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
芦	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子
能碓	飯坂信子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子	飯坂悦子	飯坂美子

本店 熱田区神戸町三四 電話(671)8686-8
神宮東門店 熱田区新宮坂町一 電話(682)5598(代表)

あなたに心 富士
社 ヨールム場
本シエ



能紀行

或るデザイナーの言葉

絵と文 二井栄逸

能は私たちの生活とあまりかけ離れていて理解出来ない。と、こぼしたB君に、あるファッションデザイナーが答えた言葉が、私のつねづね思っていることと同じだったので、そのまま借りしてここに掲載してみよう。

「ボクにしたって、それは完全に理解しているわけではない。でもボクは能を見に行くよ。それは能が美しいからさ。君だってパレエにしてもシンフォニーにしても全部が全部わかっているわけでもないだろう。でも見ていて楽しいにちがいない。能にしても同じ態度でいいんじゃないかな。ボクはディオールのファッションショーがはじめて日本へやって来たときその美しさにびっくりしちまった。しかしそのあとではじめて能の舞台を見たのだが、ディオールなんかにはびっくりする必要がなかったと思っただけだよ。日本にもこんな素晴らしいものがあつたんじゃないか。古典の研究は専門家にまかせておけばいい。そしてボクたちはそうした専門家を通じて古典に近づいていけばいいのだから。能衣裳の立体感とか、音階の微妙な味わいとか動作の象徴性とか、たとえわからなくとも美しいものは美しい。

だから、その美しさをいまの感覚のまゝで、ジカに美しいと感じることが大事だと思う。それがおもしろい心、おもしろい生活に、実は大切なことなんだ。能と現代を平面的にくらべてみて文化的にズレがあるとか、スジガキが単純だからつまらないとかいうことは、それこそつまらない心だよ。利用できるものがあれば、どんどん利用すればいい。いいかい、ボクたちの祖先がのこした古典というものを、もっと信頼しなければいけないと思う。そしてこの国で生れたものに、日本人の感覚でつくられたものに、すなわちメイドインジャパン、愛情をもたなくてはいいけないんじゃないかな」と、いう

言葉である。近頃、若い人達の中に能をわがやうとする人がずいぶんいることは五流能の盛況を見てもわかる。たしかにこのデザイナーの言葉は当を得てるなと思つた。

×××××

蟹江あたりの水郷地を通ると、田に降りている蟹の姿をよく見かける。二、三年前前から其の数をましているところを見ると、少しづつ自然が帰ってきたのかも知れない。

京都二条城のすぐそばに天皇遊宴の遺跡、神泉苑がある。桓武天皇が京都に都を定められた時、造られた池の苑である。あたりは広大な沼沢地で清水がわき出でたので神泉苑と名づけられた。其の頃は、南北四町、東西二町という広い地域であつたという。

夏の夕、神泉苑の芦間に降りたつた鶴を主題に作られた能が驚である。取材は平家物語巻五「羽敵ぞうへの事」の中の説話によつたもの。何といつても鶴が中心で、この鳥の習性や姿態が律動的に表現され、普通、人間の姿になつた精霊ではなく、現実の鳥の風情を芸術化した能である。

物語によつて地に伏し、蔵人に捕えられ、五位の位をたまわり、喜びの余り舞をまうという、曲柄が清らかで高い品位を持つてゐるので、十四才までの少年が、六十才を過ぎた家元、弟子家にあつては七十才にならないと許されない直面(ひためん)の稀曲である。

〔絵は喜多美の「鶴」〕

紫綬褒章を受章

文部省関係の紫綬褒章がさる十月二十七日発表され、一噌流笛方藤田大五郎氏が受章した。

藤田大五郎氏は大正四年一噌流笛方・藤田多賀成氏の長男として東京に生まれ、一噌又六郎に師事昭和四年「羽衣」が初舞台。昭和四十五年度芸術祭大賞を受賞。四十六年重要無形文化財個人指定。日本能楽会理事。

山本定期能、52年上半期演能日程

大阪 山本定期能の昭和五十二年度上半期の日程および演能曲目は次のとおりである

◎一月九日(日) 翁 山本 勝一 下 山本 常博 羽衣 矢野 一馬 野守 山本 順之 黒頭 山本 眞義

◎二月十三日(日) 山 山本 眞義

須藤源氏 波多野 晋 ◎四月二日(土) 朝長 山本 勝一 杜若 宇治田正子 熊坂 千崎 隆一

◎六月四日(土) 通盛 河村 慎二 百萬 山本 眞義 夜討曾我 松浦信一郎

同定期能の開催は山本定期能楽会(〒540、大阪市東区徳川町1-10) 電話九四三一九四

現代をみつめる眼 東海テレビ

熱田紳士能

昭和五十二年一月十六日(日) 午前九時始

入場歓迎 主催 名古屋清韻会 補導 大槻秀夫

藤	戸	福間 昌作	山口 鏡一	寛 三男
融	五段・替之型	長谷川 実	山口 亮	助川 龍夫
笠	之段	大槻 文藏	吉田 定男	助川 龍夫
網	之段	杉村 竹翠	山口 亮	助川 龍夫
笹	之段	水藤 元三	山口 亮	助川 龍夫
枕	之段	殿島 修二	山口 亮	助川 龍夫

高	砂	村上 博	海	人	佐々木輝雄
梅	枝	鬼頭 淑子	融	小	小川 直美
桜	川	山田 嘉子	小	督	山本 隆子
松	丸	後藤巴裕喜	経	万	斎藤 節子
弱	法	長谷川美知子	政	上	野 信子

舟	ふ	佐藤 友彦	大野 弘之
枕	童	西村 欽也	吉田 定男
安	宅	高橋 昌子	宮本 正都己

花	竜	田	山	美	龍	太	鼓	島	村	貞	子							
井	筒	中	富	代	子	石	黒	俊	二	福	井	啓	次	郎	石	黒	喜	一

玉	葛	秋	布	錦	石	黒	俊	二	石	黒	秀	剛	石	黒	秀	剛	石	黒	喜	一
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

羽	衣	高	安	滋	郎	寛	敏	一	鬼	頭	喜	太	郎	寛	敏	三	男
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

進成寺のこと

「あれ見上総体は——」で伏すのもあります。鐘を打つ時に打杖を大きく知らせますと

花も実もある舞台

名古屋和泉会第16回公演

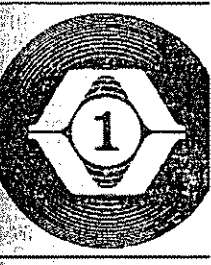
前田 満穂

「進成寺のこと」(その5) 次は鐘を見て打杖をよりあげて廻ります。これを、柱巻きといっています。しかしこのやり方は家元の型で、私の方では先ず、鐘を見て、次のツキを見、打杖は下げたまままで廻ります。これは折られて弱まった気持で巻きつく、という解釈から、家元の巻き上つてののびにくく二つの行き方

藤田大五郎氏は大正四年一噌流
笛方・藤田多賀蔵氏の長男として
東京に生まれ、一噌又六郎に師事
昭和四年「羽衣」が初舞台。昭和
四十五年度芸術祭大賞を受賞。四
十六年重要無形文化財個人指定。

野 羽衣 矢野一馬
守 山本順之
黒頭 山本真義
山 山本真義
能楽会(〒540)大阪東区徳
同定期能の問合わせは山本定期
九四三三九四

夜討曾我 松浦信一郎
百 萬 山本真義
通 盛 河村三二
盛 山本真義



能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」

「あれ見よ蛇体は——」で伏すのもあります。鐘を打つ時に打杖を大きく知らせますと太鼓が、これを合図にして頭から崩してゆきますのでいかにもそれらしい感じが出るのであります。

折りは「安達原」「葉上」「道成寺」と形は何れも同じで、ただ気合や心持がそれぞれに違います。詳しく申しますと、この型は舞台際でシテ柱ごしに橋がかりから舞台のワキに向うところで、

「葉上」は最初に舞台の先にある出し小袖を見込み、二度目にワキを見ます。

「安達原」はただワキに迫るだけで最後に作物の戸をおさえるのが特徴です。

「葉上」は最初に舞台の先にある出し小袖を見込み、二度目にワキを見ます。

「安達原」はただワキに迫るだけで最後に作物の戸をおさえるのが特徴です。

「葉上」は最初に舞台の先にある出し小袖を見込み、二度目にワキを見ます。

「安達原」はただワキに迫るだけで最後に作物の戸をおさえるのが特徴です。

岐阜市能楽鑑賞会

五十二年二月十四日(月)午後六時開演

於岐阜市民会館

三 兼 班 阿 野
輪 平 女 阿 野
岡田 朗 橋岡 久共 青木祥二郎 片山慶次郎 梅田 邦久
仕 舞 於 岐 阜 市 民 会 館

井 片山博太郎
筒 西村 欽也 寛井啓次郎 藤田 昭彦
物 後見 奥善助 地謡 武田 邦弘 小野 朗

附 子

佐々木常雄 茂山正義

葵

奥善助 観世元正 高安 勝久 河村三郎 鬼頭喜太郎

附 祝 言

終了予定九時 主権 岐阜市民会館

安 舞 子 吉田 定男 藤田 六郎兵衛
後見 大塚十喜雄 柴田 千代 若尾千代子
内藤 泰二 長細のぶ 竹内喜代香
吉田 俊彦 足立 貞子 黒田 ちる
鬼頭 嘉男 佐高 すすき

名古屋和泉会第16回公演
前田 満穂

後見 大塚十喜雄 地謡 佐藤 米吉 鈴木 義久
佐々木 輝雄 内藤 泰二
久野 幸三 鬼頭 嘉男 喜一

主権 熱田 紳 士 能

A 久しぶりにゆくり拝見でき
てうれしかった。

B 久しぶりは恐れ入る。久し
ぶりでもな批評や鑑賞が
できるかい?

A 別にまともな批評や感想を
披露しようとは思って
ない。題名の通り放談だ。
それは無責任な……

B 無責任といえは無責任だが放
談、雑談の中でこそ、気軽に
ものが云えるというものだ。
気軽に云えてこそ本当のこと
が云える。批評という様を
て本当のことが云えるのは、
大家、大通、大学者ならではの
こと。われわれ如き、小家
には及ばぬことだ。

A 放談やむなしの弁はそれくら
いにして、始めるか放談を?
はじめよう。何からはじめ
るか。ゆき当りばったり放談
の放談たるゆえんだから何で

B 近代的解釈もよし悪しだぜ。

A 「千鳥」は?
藤九郎の太郎冠者、老功の一
語に尽きる。万歳の濃烈に対
して、これは老功、しかも心
理的に掘り下げた近代的?解
釈が面白い。

B その藤九郎の新作狂言「じゃ
じゃ馬馴らし」はどうだ。
新作はなんでもむつかしい。
プログラムの解説に「古典狂
言に値して、少しも異和感を
感じさせない」とあるが、新
作なら少しぐらい異和感を感
じさせてもいいのじゃないか
古典のワクの中で、という前
提に立ってのことだからむつ
かしいのはわかるがね。

A 僕は結構面白かった。ただ女
が強過ぎる、というより乱暴
過ぎて女に見えなかつたが、
じゃじゃ馬でも女は女だろ
保之がよかったね。芸に味の
出て来たのがうれしい。

B とにかく新作大いに結構だが
思い切った大胆にやってみ
たいね。舞台を重ねて適当にカ
ットしたり、つけ加えたり、
演出を替えたり、年月をかけ
てよいものに仕上げることだ
現在ある古典の歴史が正にそ

A 藤九郎の新作狂言「じゃ
じゃ馬馴らし」はどうだ。
新作はなんでもむつかしい。
プログラムの解説に「古典狂
言に値して、少しも異和感を
感じさせない」とあるが、新
作なら少しぐらい異和感を感
じさせてもいいのじゃないか
古典のワクの中で、という前
提に立ってのことだからむつ
かしいのはわかるがね。

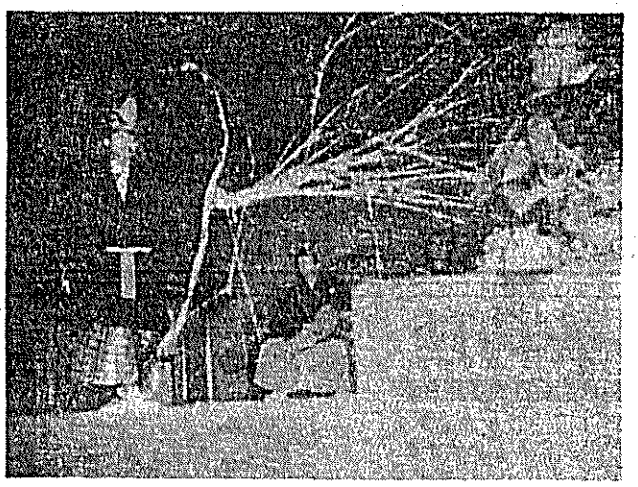
B 僕は結構面白かった。ただ女
が強過ぎる、というより乱暴
過ぎて女に見えなかつたが、
じゃじゃ馬でも女は女だろ
保之がよかったね。芸に味の
出て来たのがうれしい。

B とにかく新作大いに結構だが
思い切った大胆にやってみ
たいね。舞台を重ねて適当にカ
ットしたり、つけ加えたり、
演出を替えたり、年月をかけ
てよいものに仕上げることだ
現在ある古典の歴史が正にそ

演 能 の 記 録



「半 節」 杉村 善子 さん (51. 10. 31 竹韻会大会)



「土蜘蛛」 シテ 福垣道雄氏 頼光 松本 一氏 (51. 10. 31 竹韻会大会)

